特105
243

神戸又新日報
掲載小説

男（をとこ）

羽様荷香作
谷洗馬畫

716
412

始

特105
243

神戸又新日報
掲載小說

男（をとこ）

~~（編後）~~

羽様荷香作
谷洗馬畫

大正
3. 2. 14
内交

男

田舎の面影

東家

樋口隆文館新刊小説目次

渡邊默禪作　千枝子窟

同　人作　封人

同　人作　俠妓

同　人作　千里小鶴

同　人作　風流菩薩眼

同　人作　櫻井一策

同　人作　迷ひ子

伊原青々園作　其女

島村抱月譯　戀の敗者

鹿島櫻巷作　海の豪傑

同　人作　愛と財力

新田靜灣作　富の力

同　人作　予

伊藤銀月作　三人の仇

根本吐芳作　男

羽樣荷香作　浮木舟

須藤南翠作

山田松琴作　闇のうつゝ

和田天華作　競べ

同　人作　戀の意氣地

同　人作　靜子

同　人作　浪まくら

同　人作　二人の女

安岡夢鄕作　罪の子

同　人作　地獄谷

稻花生作　金齒の於墨

中村兵衛作　父なき子

同　人作　甚九郎稻荷

五竹園作　香人形

小島孤舟作　梅花錄

同　人作　浪がしら

花冠者作　思はぬ戀

春秋園作　俠妓胡蝶

樋口隆文館の出版物は東西各地の新聞紙上にて多大の好評を博したる物に付これを讀んでも至極面白い

樋口隆文館新刊小説目次

渡邊默禪作　千枝子
同　入作　封入
同　入作　侠妓窟
同　入作　小鶴
同　入作　千里眼
同　入作　風流菩薩
同　入作　櫻井一策
伊東青々園作　迷ひ子
島村抱月譯　其の女
鹿島侵卷作　戀の敗者
同　人作　海の豪傑
新田靜濤作　愛と財
同　人作　富の力
伊藤銀月作　子……
根本吐月作　三人の仇
羽樣荷香作　男……
須藤南翠作　浮木舟……

須藤南翠作　闇のうつゝ
山田松琴作　競べ操
和田天華作　戀の意氣地
同　人作　靜子
同　入作　浪まくら
同　入作　二人の女
安岡夢鄉作　罪の子
同　人作　地獄谷
稲花生作　金齒の於墨
中村兵衛作　父なき子
同　入作　甚九郎稲荷
五竹園作　香人形
小島孤舟作　梅花録
同　入作　浪がしら
花冠者作　思はぬ戀
春秋園作　侠妓胡蝶

樋口隆文館出版物は東西各地新聞紙上に大多数の好評を受けたる物なれば何れも讀んで面白く

樋口隆文館新刊小說目次

同　入作　千枝子
同　入作　封人窟
同　入作　俠妓小鶴
同　入作　千里眼
同　入作　風流菩薩
同　入作　櫻井一策
同　入作　迷ひ子の女
伊皇青々園作　島村抱月譯　具の敗者
鹿島樵巷作　戀の豪傑
同　入作　海の乞ひ
新田靜濤作　富の力
同　入作　予……
伊藤銀月作　三人の仇……
根本吐芳作　男……
羽樣荷香作　浮木舟
須藤南翠作　渡邊默禪作
須藤南翠作　闇のうつゝ
山田松琴作　操競べ
和田天華作　戀の意氣地
同　入作　靜子
同　入作　浪まくら
同　入作　二人の女
安岡夢鄉作　罪の子
同　入作　地獄谷
稲花生作　金齒の於墨
中村兵衛作　父なき子
同　入作　甚九郎稲荷
五竹園作　香人形
小島孤舟作　梅花錄
同　入作　浪がしら
花冠者作　思はぬ戀
春秋園作　俠妓胡蝶

樋口隆文館　出版終に東西各地　新聞紙上にて多大の好評を受し　たる物に付と れを讀んで面白い

男

羽様荷香

（一）

春は暦の上に立つても諒闇の世間には未だ梅咲く噂さへ傳はらぬ、昨日も今日も雪空の暗憺と亟返る寒氣を吹き蔓らす烈風は癖の如に打續き、人の心は重い陰氣に壓へられてあつたが、霜の辻に號外の鈴の音飛び、續けさまに議會の變傳はつてより此方、都も鄙も一時に物凄い政騒の渦の中へ卷込れ、人氣は怒る風の如く、鍼刺す寒威と棘々しう彼方此方に暴力沙汰さへも聞ゐる。

東京小石川區竹早町、あの邊一帶の樹木に富んだ景勝の土地を多く我物にした富豪楢崎家の借家中で、一寸人目を惹くのは大野代議士の邸宅である、植物園の花と共に名物に數へられた年

古る老櫻が門前にあつて花の頃は此處に一區の春を集める、一抱へもあらう大木の下、敷石の道を數歩奥へ進むと本邸の玄關でスグ其横手は供待部屋がある、種々の植込みを隔てゝ門も邸宅も翠緑の裡に包まれた床しい住居であるが、此家の主人大野廣之が名譽の名は門前の櫻よりも芳しいものに廣く世に轟いて居る、それは民友黨の名士として、機略と機辯に富む政客として崇められて居るのであるが一つには多年民黨の孤壘に據り正義の節を屈せず辛酸の爲に志を挫かぬ彼の持操に同情し、今の世に得易からぬ人物として多數渇仰の本尊と爲つて居るのである。

櫻は梢ばかりであるが大野邸の門前は花の頃よりも賑やかである、政變に伴ふ政客の活動振目覺しく、敵黨に對する作戰計畫は無論民友黨の本部で謀議されて居るのであるが、一黨の幹部たる廣之を中心として自然に群れ集る人々の爲に門前は俥の市が立つ、今日は美しい自働車も一臺止まつた。

供待部屋には地に掘つた爐に炭火が炎を上げる、それを取卷いたのは主人を待つ俥夫達で、五六人の者の中に先刻から何かの問題が一つ小面倒に縺れて故障つた。

『可ねゝ可ねゝ、それァ俺ァ反對だ、何故ッて見ねゝ判り易い比喩がさ、お互ひに嬶や子供に

やァ甘い物も喰はせてよ、美くしい衣裳を着せていのは人情だ、けどもよ、肝腎の大將が梶棒握る味氣ねいのぢやァ始まらねい、俺が俥を曳けァ山の神も燐寸筥を張る、行きてい學校を廢して子供は工場へ通勤ッていのは皆な一つ運命と諦めてるんだせ、それを俺が榮耀贅澤の仕度三昧をして宅の奴にァ糠味噌舐めて襤褸を着ろたってそれは無理さ、なァ由公、手前馬淵さんと俺の議論に何方に賛成するんだ』

馬淵といふのは佐藤男爵の自働車の運轉手である、法被の群に凛々しい洋裝姿が目立つ肥つた男で、紙莨を吹かせながら絶ねず冷かな笑を浮べ、眼鏡越しに俥夫の皆を見廻はす。

『左樣ともよ、誰だつて賛成だい、不賛成ッて奴が居れァ俺が相手だ、ヘン馬淵さん、お前なんざブウブウついふあの自働車の屁に全然中毒られ了ってそんな間違つた事を云ふんだ、何が有難くつて成上り者の俄男爵なんか乘せて威張つて歩くんだい馬鹿々々しいや、今に民黨が内閣を乘取つて見ねいお前なんか御主人と一緒にお江戸追放の代物だせ、今の中に善心に立歸つて俺の主人にでも泣着きねゝ惡い事ァ云はねいから』

俥夫連はドッと哄笑ひした。

『辰公手前心配は置きや、男爵はそれ位の目は見えらあな、今日だつて當家の大將の所へ來る

のを見るとモウ同志黨に見限を付けて密と裏切ッて寸法かも知れねいせ、馬淵さん俺の眼力は何だね』

『御主人が降參なら家臣のお前さんも此處で俺們に潔よく謝罪りねねな、妾が惡けれア謝りませうてんだ』

酒氣を帶びてる痘痕面が斯云つて馬淵の背をドンと叩いた。

『何をするッ』

と馬淵は身を変して。

『はッはッはッ知らぬが佛といふ事がある、何方が降參するかお前達に判つて堪るもんか、馬鹿な』

と傲然と空嘯く。

『馬鹿だ？、奴ッ』

突然痘痕面の頑丈な腕が空に舞ひ馬淵の眞額を毆りつける、チャラ〳〵と窓硝子が毀れた。

『遣つちめゝ』

『疊めッ』

拳の雨の中で馬淵は悲鳴を上げた、勝手口の方から駈付けたのは當家の抱俥夫音藏で。

『ヤイ惡戯やがるな』

大喝して飛込むと騷ぎはスグ止んだ、音藏はモウ五十近い年輩ながら、額の廣い眼の大きい、色澤に其若々しい血の氣が見られる勇み肌の男である。

《二》

夕暮方に客は散つて靜かになつた大野邸の門内へ空の俥を入れるのは音藏である主人を他所に送つて歸つたところで、俥を仕舞つて勝手口へ廻らうとすると、女中のお濱といふのが玄關の方から小走りで來た。

『あの奥樣が待つて入らつしやるからスグ行つて下さいよ』

『奥樣が？、おいしょッ』

と行掛ける。

『ほゝほお奥ちやアありませんよ』

女中は供待部屋の方を指した、音藏は面喰つた形で。

『お他行かね』

『否、何か御用でしやう』

『お使ひかね』

と音藏は玄關口へ急ぐ。

月と梅に春の夜色か出來たら風情があらう、亭作りの供待部屋に圓窓の障子淡乎と白く夕の色を扳く三尺の軒下に細い痩形の體を佇ませたのは夫人綾子である、音藏は腰を屈めて。

『オッ奥さんで厶いますか、只今歸りましたところでヘイ何か御用ださうで』

『お苦勞だつたのねお送り申して』

『ヘイ麹町の大浦樣から佐藤樣へ……』

『大浦樣と佐藤樣へ？』

綾子は憂しげな聲。

『そして何方かへまたお越しになつて』

『ヘイ佐藤樣と御一緒に……何で厶いますあの……』

『何方かへお越しになつて？』

『ヘイ……新橋の如月へお送り申して歸つて參りました』

『如月といふのは待合だねね』

『ヘイ』

と答へた音藏の聲も曇る、綾子は氣を換へて。

『此頃はお忙がしいからお前も御苦勞だねね、お迎への時間が判つて居ればそれ迄お憩みが可い』

『ヘイ、否忙がしいたつて此位の事は、斯な時御奉公を勵まなけあ濟みません奥樣、市中の人氣は大した物で厶いますぜ、民黨々々ッて、旦那の俥なんざ群込へウッカリ曳込んだら萬歳責めに遇ひまさ、豪い事で厶いますぜ』

綾子は部屋の中を見廻はしながら。

『人の氣が荒くなつて居るのだねね、今日此室でも喧嘩があつたつてね』

音藏は頭を搔いて。

『ヘイ供待の若い奴らが詰らぬ事から佐藤樣の運轉手とヘイ、飛んだ事をお耳に入れて濟み

ません』

『それでも負傷が無くて可かつたねえ。能く氣を付て下さいよ間違ひが有つては濟ないからね』

『ヘイ心得ます、血の氣の多い奴らで場所も辨へねいで飛んだ事を』

『妾些とも知らなかつたから、先刻女中から聞いて驚いたのですよ、それでお前に尋ねた上で何とか佐藤樣の方へ御挨拶を爲なければ可けなからうと思つてね』

『奥樣、その御心配は要りません、ナアニ眞の喧嘩の卵で鎭まつたのですからね、それに原因はッて云ふとあの佐藤樣の運轉手が惡いのですからヘイ、俺だつて居合せたら承知が出來ねい事を云つたんで』

と音藏は左も口惜しさうに。

『當家の旦那が同志黨に買收されたの今に降參するだのと忌々しい事を吐かしやがつて畜生ッ』

思はず憤りの色を現せたが周章て。

『へ、、、間違つた事を云つたのが原因で皆が怒つてッイ手荒い事をヘイ』

『まあそんな事をあの佐藤樣のお供が』

『奥樣』

と音藏は何か思入つた風で一足前へ出る。

『斯な事を俺なぞが申上げる分ぢやアムいませんが、あの佐藤男爵は今度出來る同志黨の大立物で、新聞には民黨の買收係なんテ出て居る方だッて專ら噂をして居る樣で』

綾子は柱に身を寄せて次第に蔓る夜の色を眺めた儘默つて居る。

『あんな方と旦那が此頃お交際を始めなすつたからそんな惡口を吐かすんだと思ふと腹が立つて堪りませんや、人ウ馬鹿に、當家の旦那が束で仕入れの出來星徒輩見たいに金でお動きなさると思ふのは大きな間違だ、今に見ろ議會が始まつたら旦那が眞先に立つて同志黨を顚覆へすから其時肝を潰すなッて云つて遣りますかね、奥樣、旦那は何故佐藤男爵などと……』

綾子は音藏の詞を遮つて。

『お表向の事は妾達にも些とも判らないからねえ、併し常時も變らずにお前が旦那樣や當家の事を思つてお呉れのは實に嬉しう思ひます、何か此上ともねえ……』

涙を含んだ樣な夫人の聲を音藏は變に思つて其顏を見上げた時女中が來た。

『奥樣、御隱居樣がお呼びでムいます』

(三)

主人廣之の母仲子の隱居所は母家と中庭の植込みを隔てた廊下傳ひの奥邃にひき籠つた一棟でツイ去年の秋仲子が郷里山口から出て來る迄は主人の書齋に用ひられてあつた二室ほどの茶がかつた平家で、横手の圓窓に近く盤紆つた老松の姿を友に、世を免れた人でも住みさうな閑かな境である。

八疊の室に片寄せて敷かれた段通の上だけを微茫と青布で包んだ電燈が照らす、蒔繪の剝げた桐胴の火鉢を中に對ひ合つたのは仲子と夫人綾子である、仲子は齡の六十は五つも六つも若く見ゐる、女盛りの偲ばれる顏に、色澤すぐれて姿態も確りと、國訛りの太い辯舌は一句づゝに綾子の嵩に出る元氣のよい老女である。

『お前は奈何思ふてのか知らんがの、廣之の身の上や此大野家の事は大切に考へて呉れてぢやと妾は安心して居ますがの、それで無論お前に異存の有う筈もなし又家庭の事と違うて妾やお前が口を出す事柄では無のだけれど……』

綾子は母の改まつた前置は何を語り出さうとするのかを胸と騷がせて思ひ煩ふた此十日ばかり前から綾子は强い快惱を抱いて居る、それは夫廣之の身の上である、今も音臧の詞にあつた佐藤男爵と夫の交際、男爵は今度新に組織される同志黨一方の旗頭である、其上に主に黨員狩集めの任務を有つたと噂さるゝ人である、夫は主義も政見も臺本の立場からして新政黨とは反對の地位ある、民友黨の領袖である、從つて平日から餘り親近の仲とも覺ゐぬ間柄だのに此十日ばかり前、それは恰度議會が第一回の停會になつた時、確か其翌日の晩だつたらう、不意に佐藤男爵の訪問を受けた夫はモウ物の交渉事なら七分通り進んで居るかの樣な應對振で、二時間以上に渉る密談の後男爵と共に連立つて外へ出て行つた、その夜以來の夫の擧動には綾子は不審を抱かずには居られなかつた、勿論夫が世間向きの勤めには知ると知らぬと一切關係はせぬ事になつては居るものゝ、今度の樣な重大な政變の場合に夫の身の周圍の事情は大略を知つて居なければ政治に提はる人の妻として濟むものではない、夫にしても從來は然うであつた、我事業の輪廓だけは親切に說明もし尋ねにも應へて呉れて政治家の妻の覺悟とやらの凜々しい訓話を聞く折節は、權勢に諂らはず正義の爲に鬪ふ民友黨に重きを爲す夫に連添ふ所存の程を赤誠と共に捧げるのであつた、夫に捧げる愛情は取りも直さず夫の事業に同情する赤誠である、

此心は妻となつて十五年の歳月片時忘れた事も無い、忘れぬ妻を夫は忘れて……。

そんな事がと縋れる憂思を破つて棄て、策略は親同胞をも欺く戰陣に同じ政界の表裏、昨日今日烈しい雲行を睨んで立つた夫の眼に正義の光りいかで曇らうぞ、百の佐藤男爵が誘ほうとも說うとも動かぬ丈夫の魂は夫の寶である、それを疑ふは夫を信せぬ我心の淺慮であらう。

綾子は斯な快惱に數日を暮した、今母の改まつた詞を聞くと、其に關した事柄がと先づ心か躍るのである。

仲子は火鉢に炭を足しながら、さら〳〵と竹戰ぐ窓外の音に耳を立て。

『また雪かの。今夜も歸りは遲からう、風邪を引かねば可いがのう大切な身躰ぢや』

と身を竦めて凝と綾子の顏を見る。

『お疲れが出やしないかと心配でございます、格別に寒威が酷くなつてまゐりましたから』

といふ綾子の詞を咎める樣に。

『寒うても暑うても家の大事には換へられんからの、廣之も今は一生懸命ぢや、この年寄つた妾を連れて地獄の底へ轉げ込むか、それとも大野の家を安樂な極樂淨土の雲の中へ運び上げるか、二つに一つの瀨戸ぢやからの、家族の者はせめて邪魔だけなりと爲ん樣に心掛けん事

にはの』

火蓋は切つて放たれた、綾子の胸に毒彈が飛ぶ。

（四）

主人の外間の事業に對して家族の者はせめて邪魔せぬ樣にしなければと針を含んだ仲子の詞は綾子にとつて實に謂れなく罵り辱しめられた心地がして、姑の情ない詞に暫時は我耳を疑ふのであつた、けれども自分の責任にもかゝるやうな重大な意味もつ詞に其儘默つて居るべきではない。

『左樣でございますとも、女の身では外間のお職掌には何のお手傳も出來ないのですから、せめて家庭の事だけは妾の手で致して御配慮を掛けない樣にと始終そればかり氣を注けて居るのでございますが、行屆ぬことばかりでお母樣にも御苦勞をかけて相濟みません』

『イヱ妾に何の斯のを云ふのぢやありませんよ、何も今の若い人達は老人の云ふ事だと直に聞き僻めてぢやから物事に圭角が立ちます、妾は云はば廣之やお前達の厄介で何して貰はうと

も思ひません妾のいふのは此大野の家の大事ですよ』

姑の氣質を會得む綾子は、モウ何も云はずに默つて居る方が此の場の納りが早いことを知つて居る、詞の上も心持も當方の思ひは悉皆途中で消されて了ふ情なさを凝と堪へると、弱い涙が涌きかゝる、夫を泽してはいよ〳〵事が面倒になる。

『此大野家はの、山口藩でも押しも押されもせぬ大資産家ぢやつたのを、廣之の父樣と廣之とで皆な無い物にして了ひました、尤も廣之は學問の費用ほか出さぬけれどの、父樣が士族の商法で巨大い損を殘して先へ死んで了はれたからモウ其時大野家は潰れるばかりぢやつたのを此妾と妾の里方の骨折で家名を繋いで來たのですよ、斯な話は廣之からもお聞きぢやらうが妾の苦勞といふものは普通大抵ではござらんよ、その内に廣之が學校を出たからヤレ安心と思ふとの、妾に相談もなしに政黨に入つて了う、それも仕方が無いとして、マア何でも可いから早く金を拵へて以前の大野家にせん事には御先祖に對して云譯もなし、廣之の父樣も黄泉の蔭で安心なさらんといふもの、妾は獨りで氣を焦々して居るのに親の心子知らずで廣之の爲る事と妾の所期とは根本から違ふて居ます』

政黨も數ある中に擇りに選つて貧乏で有名な民友黨に入り、身錢を切つて顔を賣つたところで

貧乏ばかりぢや無い鄕里の親戚知人に對して何時までも成功せぬ恥辱の上塗りする樣なもの、廣之と一緒に大學を出た誰某は官途で出世して今では公使になつて居られる、小學友達の誰某は銅山で儲けて生れ故鄕へ總饗應をした、其評判で狹い町は沸騰る、彼や此やを見聞するにつけ自分の心は火に焦がされる、迚も老後を養ふ月々の送金位當にして故鄕で安閑としては居られぬから去年の秋東上つて見ると果して二度の破滅が來かけて居る、幹部とやらの地位を保つ爲には有象無象大勢の人に金の融通やら食扶持まで當がひ、それで自分は遣繰算段を續け表面も体裁も飾らねばならず筋の惡い高歩の金も何やら入て居る樣子は睨んで知つて居る、何といふ不心得であらうか。

『さうして民友黨とやらの爲に働いた揚句が何になります、金の世の中だもの、お國の政治向も我們の臺所も金といふ重寶が無くては廻はつて行けはしません、其道に明るい人に聞くと貧乏浪人の集團の民友黨では迚も大臣大將には漕付られぬと云ひます、何な理屈が有らうとも妾が來た以上は廣之を此儘に爲ておく譯には行きません、此事は廣之には度々能く云ふて居ますがの、お前にも異論の有う筈はないから、お前の力だけでも早く廣之が妾の言ふ事に從ふ樣に骨を折つて貰はぬ事には困りますよ、現に今度が可い機會で、廣之の考へ一つで

浪人から一足飛びに大臣になれる運が眼の前に舞下つて來て居ます、人は何程知慧學問があつても天から授かる運を捉まへんことには生涯浮む瀬はないからの』

綾子は愕然として我知らず頭を上げた、そして『今度が好い機會』『浪人から一足飛に大臣』といふ姑の詞を口の中で繰返すと、汗がタラ〳〵と腋下に流れる。

（五）

浪人から一足飛びに大臣になれる運が眼の前に舞下る？、姑の意中は此短い詞で全然と解めた常時から夫の現時の地位に大反對の姑は、今度の政變は我子の爲に出世の幸福授ける運の神の采配で、何晩まで民有黨に居ても大臣のお鉢も廻はらず金儲けにもならぬ引合つかぬ惡緣？をサッパリと切つて了はせ、當代の權勢と金の力を一つに集めたと曰はる、新政黨の同志黨へ牛を馬に乘り換へさせやうの魂膽である、然うと知れば此頃姑が頻りに寺田＝仲子の弟で御用商＝の方へ足繁く行かれるのにも其邊の消息が解る、表門からの佐藤男爵よりも、家庭の恐ろしい誘惑の手には肉親といふ強い力が籠つて、夫に何な壓迫が加へられるのであらうか。

綾子は此上姑の話を聞く苦痛には堪へられぬのであるけれども、自分の精神は進んで明らかにして置かねばならぬ、假令その爲に家庭にどんな衝突不和が起らうともそれは畢竟門より內の內證事である、公人として重い責任と大きな名譽を有つ夫の爲には自分の苦痛は犧牲に捧げねばならぬ、いかに姑の感情に逆らうても之は飽くまでも反對せねばならぬ、又自分の所信を陳べて置かねばなるまい、と決心した。

仲子は眼の中に綾子は無い調子の、淀まぬ辯で捲しかける。

『廣之もモウ分別盛りを過ぎた齡で何時迄も馬鹿氣た事も爲まいと思ひます、妾や家に對してもの、大分思慮が周密になつて來たやうぢやから、けどもまだ〳〵安心は出來ません、此妾といふものは何時になつたら苦勞が絕えるのか』

と額を押へて仰山に揉む。

『お母樣』

綾子は膝を進めて何か云はうとする、其聲が耳に入らぬ樣に。

『今度といふ今度は眞個に廣之の爲めに出世の運が向いたのですよ、此運を能く捉まへんことにはモウ大野の家は破滅です』

出世々々といふ詞の度に綾子は消ね込む思ひである。

『お母様、御出世と申しますと何か……』

『ほゝほお前でも大概解りさうなものぢやの、今度の政變を廣之の妻女として知てゞない樣な事では濟んでは無いかの』

『イエそれは承知して居るのでございますが……只今のお詞の御出世といふ事につきまして』

『お前は何かの、廣之の出世が嫌ひとでも云ふてのかい』

横に横にと酷く出る、綾子の聲は判然と。

『ハイ萬一も間違つた御出世なら妾は嫌ひでございます』

仲子は呆れた顔をして凝と綾子を視る、艶に光る額には穩かならぬ筋か浮く。

『何と云ふの』

『お母樣、お氣に障れば御免遊ばせ、妾の所存だけを申上げます、妾現今の御事業の儘で御成功遊ばす樣にお祈り申すのでございます』

『ほう、妙な事ぢやの、妙な事を云ふてぢやの』

と仲子の聲は憤りに震ふ、前の火鉢を押除けて。

『聞きませう、聞棄にならぬ事ぢや、廣之の出世が嫌ひといふのは此大野家が潰れるのが好きといふのぢやの、イエ、妾達は何うならうとお前は構はぬといふのぢやの、まあお前がそんな恐ろしい了簡を有つて居るとは妾は今が今まで知らなんだ』

『お母樣ッ』

綾子は涙とめどのない顏を袂に押へて聲を絞つた。

『お母樣、妾の赤心がお母樣に通じませんのは妾の過失でございます、何卒お赦し下さいませ……如何樣のお叱りを受けましても妾毛頭……。』

『それはの、お前は立派に當世の學問を受けて女學校まで卒業したお方ぢやげな、妾なそは昔の人間でお負けに田舍の土に生た草木同然の人間ぢやから心が通じんのは當然ですよ、それでも妾の國では嫁入先の家が潰れるのを好む樣な女は一人も居ませんからの』

『妾の申上げ樣が惡かつたので……妾御出世をお止め申す心ではございません、現今の御事業は自分の魂で一生お國の爲め人民の爲に盡さねばならぬといふ御決心を日常から承はつて居るのございますから』

『フンそれでお前は飽くまで妾に反對して廣之が出世の邪魔をしやうといふのぢやの』

『お母様に反對だの御出世の邪魔をするなぞといふ考へは妾決してございません、只自分の氣付を申上げただけでございます』

理性を失ふまでに憤怒つて居る姑に向つて此上云爭ふのは火に薪の愚であると、心を殺して綾子は俯向くと。

『ほゝほ氣付？それ程氣の注く女さんなら些と御自分の事を注意してなら可いに、折角の一人子を生れもつかぬ不具者にしたのは何誰の不注意かのう』

一人子を不具者？、此毒舌は綾子の耳に百雷の鳴音である、今に始らぬ事ながら。

《六》

新たに組織される同志黨といふのは伯爵巽元郷を總裁に頂き、富豪の階級を黨員に網羅した實質は兎も角形體に於ては嘗て例の無い尤然たる大政社である、幹部の面々は何れも多年官海の經歷を有つた人達で、これらの人々が力を一つにして攻蒐ればいかなる内閣も議會も自由に制御されやうと生れぬ前から大した評判であつたが、敵を得て軍容を改めた民友黨の勢力は却

〻に凄じく、夫に時局に對する二大政策の上において同志黨と民友黨の政見は全然反對であつて、一般の輿論は從來の位置から正義黨の名を取つた民友側に傾き、今が天下分目の政變眞最中モウ停會の期盡きやうとするに戰場に於ける多數勝利の見込は同志黨にはグワラリ外れて了つた、其上個人としての名望を缺いだ巽伯爵が情實の緣に繫がる富豪連や乾兒を利用して已が進退の道具に俄拵への政黨を卒ひ民友黨に當らうとした遣方を卑怯と罵る聲が漸次に烈しくなる、公私両面に於てまだ議會に初陣の姿を見せぬ同志黨は非常に不利益の地位に立つた、之に應ずる新政黨の作戰は？。

芝山内なる巽伯爵家の門前は權勢に集ふ人々を運ぶ車馬の姿が賑はしい、今の前一頭立の幌馬車が出て行つた、其輕い蹄の音が消ねぬ中入違ひに一輛の自働車が來る、美しい玉川砂利へ眞白の煙を吐き散して大玄關へ軋る、サツと下り立つたのは鼻眼鏡の佐藤男爵である、袴を穿いた受附の老人は鄭寧に叩頭をすると心得たものだ男爵の後へ廻つて襟毛の外套を脱がせる、男爵は無言の儘奥へ入つた。

佐藤男爵は巽伯の腹心である、嘗て伯が廟堂に立つた時は其秘書として重要の官職を占め、野に下つた後も依然として其腰巾着を勤め、今度の新政黨組織には或重大な任務を承はつて夜を

日にと其非凡の才略を發揮する事に努める、傲慢陰險の世評に上つて一部の人等には指彈されては居るが巽伯と其新政黨にとつては缺ぐことのならぬ柱石である。

人を遠ざけた一室で卓子を挾んで相對した主伯と男爵の密談は長い間打續く。

『すると倶樂部の一角は確に崩れる見込みがあるんぢやな』

脂太りの體軀を寛濶に籐椅子に乘せ、太い葉卷を吹かせながら男爵が出した部厚の書類に目を通しつゝ伯爵は斯う尋ねた。

『ハイその方は大丈夫です、そこに朱を入れた連中は悉く私が直接折衝に當つたものばかりですから決して動く氣遣ひはございません、何時でも御前へ連れて來る手順が運んで居ります』

『然か、それは働きぢやつた、併し油斷は出來んぞ、此方へ動く奴ァ彼方へも動く』

と伯爵は戒める樣に嚴かに云つた。

『ハイ全く仰せの通りでございます、充分注意を致します』

『動かん輩を動かしたいのう』

主伯の意味ある詞に男爵は頗る恐縮の体で。

『ハイ、其方へも極力奔走して居るのでございます……遠からず大きな獲物を棒げる確信は抱いて居るのでございます』

『確信？大野か』

『ハイ』

『貴公見ン事奏功させて見せるかの』

と主伯はニッコリとした。

『手答へがあります、私必らず成功して御覽に入れます』

『我輩も實は密かに手を廻はして居るぢや』

『御前も？』

男爵は左も驚嘆の態で眞眼鏡をビク〳〵と動かす。

『何邊も云ふ事ぢやが大野は欲しいからのう、他の碌々たる徒輩は何でも可い、彼男を一人味方に取れば勝算は此方にある、味方に取らいでもぢや、敵を混亂させるだけの道具に用ひたいテ』

『屹度私が責任を帶びて御命令を果します……併し第一番の難物でございますから御前の御應

援を蒙る事が叶へば實に結構でございます』

『ウム我輩も然う思ふから……我輩のは搦手から攻めるのぢや、裏門からな』

『ハア』

と男爵は腑に落ちぬ顔。

『妙な事が有るもんぢや、貴公あの寺田幸作を知つとるやらうな』

『ハイ存じて居ります寺田組の』

『彼男ぢや、あの男に妹がある、其妹が大野廣之の母ぢや』

『大野の母が？それは事實でございますか』

男爵は意外に驚く。

『事實ぢやとも、家内なぞは能く知つとる、我輩はそれを知つたから早速寺田の方へ手を廻したぢや、案外に此搦手は攻め易いかも知れんからのう』

『御前ッ』

と卓子を輕く叩く手附をして男爵は勇みの氣勢。

『私は強襲を續けます、御前は其搦手の方へ肉薄して頂いたら此城は屹度落ちます、ハイ落さずには置きません』

『何方が先登するか貴公と我輩で競爭を遣るか、はッはッはゝゝゝ』

主客は成算の喜びの前に晴やかに笑ひ興じた。

（七）

騒がしい世を春は靜かに音信れる、探梅案内の鐵道廣告が出る、暴動の名殘とゞめた交番所の辻に花の繪廣告が東風に飜へる。

『お母様……お母様……』

可愛らしい透通る樣な聲、ケキョホウケキョと覺束ない初音が止んだ。

『大きな聲をしますから折角啼いてた鶯が吃驚して逃げて了つたぢやありませんか』

母の綾子は居室の障子を明けて顔を出した、今年九つになる薫は杖に縋つて、昨日の雨に苔の色鮮やかな庭前に佇んで居る、梢の間を漏れる暖い日光が怜悧さうな面を射る、眩しさうに太い眉を動かして。

『ャッ逃たな、お母様が早く來ないもんだから鶯奴逃げて了つた、面白かつたなア、斯なにつて枝にブラ下るんだもの』

と杖を腋で支へて小禽の身振りをする。

『ほゝほお母さんは先刻から此處で鶯の歌を聞いてたのよ』

『歌？、あれ歌？』

『歌ですよ、春の歌を唄ふのです、美い聲だわねえ、お前あんな聲で唱歌唄ねて？』

『フ、、僕厭だい歌なんか、歌なんか女が唄ふもんだ』

『そんな事は有ません、君ケ代やら軍歌やらありませう』

『ウム僕軍歌は大好きだ、四百餘淵をこぞる十萬餘騎の敵イ、フ、、あれを榊先生が歌ふと可笑しいぜ、あの髯が皆動くんだもの』

『ほゝほ、そんな事を云ふものでは有ません、人の批評をするのは惡い事ですよ』

『だつて先生は僕が大好きだから怒りはしない、あの髯を引張つたつて怒りはしない』

『まあお前そんな事をして？、先生は善が方だからお怒りにはならないでもお前物を敎へて頂く生徒ぢやありませんか、餘り可愛がつて頂くのに馴れて失禮をするとお父様のお叱が出ま

すよ』

薫は聊か不平らしい顏をしたが其鈴のやうな目を空に移すと、不自由な身體を椽から離して。

『ャァ梅の花が咲いてらア、ほらあの上の枝に、ね、お母様見ねて』

と其樹の下に走らうとする機みに、杖を突き損ねて危く横に倒れかける、『あれ』と綾子は其身體を支へて。

『危ないぢやないかね、お前そんなに急いでは……何でもお前は能く沈着いて爲んと危い怪我をしますよ、普通の身體ぢやないからね』

薫は平氣で椽に上らうとすると又鶯が鳴いた。

『ャ又來よつた、今度は捕つて遣る』

再び下りかける、其小さな躰軀を抱へる樣にして後ろから止めると。

『まあ何故お前はそんなに惡戯が爲たいのだらうねね、其上怪我でもしたら何するのです』

可愛い姿を護ふて椽に佇つた綾子の眼は涙に濕んだ。

薫の右の脚は全く廢物である、恰度七歳の春初めて學校に行つて間もない出來事であつた、友珍らしい少年は大勢と連れて運動場を兎の如く飛廻つて遊ぶ中一人の仲好と一緒に其處の鞦韆

へ上つた、二筋の繩が惡魔の手とは知る由も無つた、二度三度少年の姿は両個を一つに空に流れる、と忽ち恐ろしい鳴動がして鞦韆は左右の柱一時に十際から折れて倒れた、栗の五寸角柱は空に舞ふて纖弱い両少年の投出された上へ雷の如く落ちた、此椿事は遂に教育界の問題となり、校長の引責辭職で結局が着いたが両少年の不幸は永い悲痛の種となつた、一人は腦震盪の爲に間もなく死んで了ひ、一人の薫は右足を關節から折られて生涯の不具者となつた、治療に手を盡くしたが遂に甲斐なく、二月の後杖に縋つて病院から歸つた痛ましい姿を抱いて父の廣之は『因縁だ』と涙を呑んだ、夜の目も合さず付添ふた綾子は壽命の半ばを此哀傷の爲に奪はれたと思つた、それは三年前の事であるが、不足なく生んだ一粒種を殆んど壓し潰しかけた災禍の追懷は、薫の生長つに從つていよ〳〵酷く大きく綾子を惱ますのである、姑は此不幸を綾子の不注意に歸して、二言目には『一人子を生れもつかぬ不具者にしたのは誰の罪？』と罵るのである。

鶯の能く諦めて籠に啼くといふ句がある、雲や霞や花の梢を及ばぬ餘所に諦めて障子の暗い籠裡の幽閉に優しい歌囀づる小禽の心は何なであらうか、學校通ひの苦痛を見せまじと家庭教師を置いて教育事には些かの弛怠もないが、發育盛の少年に家庭ばかりの空氣を吸はせるのは

小禽を籠に伏せるに似た罪深い業であらう。

姑の罵りや斯な憂慮に綾子は我子の上にも大きな苦勞を有つのである、唯聊かの慰籍は家庭教師の普通ならぬ骨折で、怜悧い質の薫は學問も才能も齡と共に加はり行くことである、家庭教師は榊直也といつて某私立大學出の男である。

(八)

大野廣之の母仲子の兄は寺田幸作と云つて一代に巨萬の富をつくり上げた男である、深川に材木問屋神田に石材の大店を營んで居るが、主の事業は諸官署會社の土木建築請負で寺田組といへば内外に聞えたものである。

今日は寺田の高輪の別莊で觀梅の宴が催される、海に面した廣い梅林は眞白の盛りを見せて、數奇を盡した邸宅の姿は奇薫の海に繪の如く浮く。

日盛りをいよ〳〵薫る花に反いて閉め切つた客室の上席に、蒲團に埋る樣に大胡坐をしたのは巽伯爵である、其前には數々の珍味を盛た膳部が置れて、客の伯爵の顏には三分の醉が輝い

て居る、主人の幸作は膨れ切つた體軀を潰れた樣に低う正座まる、遙か下つて頭を下げて居るのは廣之の母仲子である、幸作は皺枯れた聲で恐れ入つた格好。

『エ、之が妹奴でござります、何かお詞をヘッヘ、、、、』

『御前樣には初のお目通りでございます妾は幸作の妹仲と申しまする……』

『オ、然うぢやつてのう、ズッと此方へお出、左樣両人で小笠原流に出られては反つて俺が迷惑ぢや』

『ハッ、これは有難いお詞ぢや、一つお盃を頂戴してな』

『ウム盃も上げるが種々話したい事もあるぢや……貴女があの大野廣之氏の母堂ぢやとの』

『ハイ不束な者で……』

伯爵は盃を仲子にとらせて。

『イヤ却々大野氏は立派な男ぢや、貴女の名譽ぢや』

『恐れ入りまする、まことにお恥かしうございます、母親の手で育てましたもので頓と妾の命令を守りません、その爲に當時もあの樣な……』

『はッはッは、、、左樣何時までも親の思ふ儘になるもんぢやない』

觀梅といふのは世間体で、今日巽伯が此寺田の別莊へ來たのは幸作の紹介で仲子に遇ふのが目的であつた、仲子を廣之の母と知つてからは、死活を握る幸作を道具に遣つて先づ仲子から說き伏せ、遂に廣之を我物にして新政黨の當の敵たる民友黨を混亂させやうといふのが伯一流の苦肉の策略であつた、佐藤男爵が有ゆる誘惑手段を講じて强襲に蒐るのに對し所謂搦手から攻めるといふのが之である幸作は幸作で、算盤を外れては己れも人も世間も無いといふ信條を有ち、此信條で今日の成功を遂げた男だから、常日頃から民友黨の達者たる大野廣之には大反對で、妹仲子が國から出て來る迄は一度も大野の宅へ顏出した事も無い、大野の方からは綾子が姑の兄に對する義理捌きに四季折々の見舞に出掛る位ひで、之には又廣之が反對であつた、權謀術策を商買の資本と心得不義の富に誇る卑しい人格を大勇に有つのは不名譽であると云つて綾子をもナル可く足踏みさせぬ樣にする、斯な具合で両家の間は自然と他人よりも疎遠になりかける、其處へ仲子が現はれたのである、仲子は云ふまでもなく富豪の兄と意氣合で、自分には貧乏は性に合はぬと云放して起臥も月の半ばを寺田の邸宅で暮すのである、で幸作が今度巽伯爵に賴まれて先づ妹から抱き込まうとするのは廣之の利益や大野の家を思ふ念からでは微塵無いのである、當代權勢の中心たる巽伯爵の喉元深く喰付く事が自分の富を殖しつ護りつす

るのに唯一の策であると信ずるからである。

仲子は一時も早く廣之を兄のやうな富豪にしたいといふが凝り固まつた一念である。

伯爵と幸作と仲子と、思ひは別々であるが共に一つ途を廣之にと向つて進むのである。

（九）

巽伯爵の前を退つた仲子は兄の幸作と一室で密々語る、伯爵のお盃で微醉が出て豬顔はいよ〳〵照る、得意の笑を浮べた幸作は。

『何ぢや俺の仕事は？、的確と鑄型に塡た樣に運ばうがな、はッはッは、、、』

仲子は兄の大きな笑ひ聲が濟むまで其顏を凝と眺めて居る。

『何を呆然として居るのぢや、御前の仰有つた事は能く會得に入つたらうな』

『それは最う……解り過ぎて居りますよ』

幸作は又笑つた。

『解り過ぎて憂慮するが有るもんかよ、まあ可い、俺も安心ぢや、何にしても大野家再興といふ運が捉まつたのぢやからな』

『貴兄獨りで喜んでも……まだ捉まつたとも捉まらんとも極らんものを、妾は貴兄が御前樣にあんなお約束を爲られたのが心配でならんのですよ』

『馬鹿ッ』

と幸作は三度目に堪らぬ樣な笑をして。

『ナル程な、俺は世間で貧乏人には誰がなるのかと思ふて居たがお前達が貧乏人の志願者ぢやな、情ない、それ程貧乏神が戀しければ強いて宗旨變へをせんかて可いが、馬鹿なッ』

罵る聲で。

『これが他人ぢやなしさ、母親の口から我子を說伏せて、それが成功したら莫大な謝禮が貰へるといふ、そんなボロ口が何處にあるかよ、巽の御前が今度は內閣を乘取る事ア黑人筋には確かに判つとるからな、さうなつた時は廣之さんは貧乏浪人から一足飛びに大臣ぢや、大臣のお袋ならお前かて今の苦勞は夢にも見られん、馬車か自動車で俺の宅へ橫付して此幸作に土下座を爲せやうと云ふもんぢや、それがよ、それが嫌ひといふのは貧乏神と情死したい了簡ぢやらう、馬鹿なッ』

仲子は周章て。

『貴兄そんな亂暴を云はんかて……妾一生懸命に工風をして居るのに』

『工風？、駄目々々、お前などが逆立したつて、造化神が女人の頭腦をお拵へになる時智慧といふ器械を入れる事をお忘れになつたのぢや、無い智慧を絞つたつて何になる』

『ほゝほ、それぢやから貴兄、今度は僅た一人の妹を助けると思つて骨を折つて下さいよ』

『お前の樣な貧乏人の妹が澤山有つて堪るもんか、詮術が無い、乘りかゝつた船ぢや、骨を折るからお前は唯俺の指揮通りに爲れば可い、よしか、俺の云ふ事に反對打つ事はならんよ』

『貴兄に反對うつ道理が無いが、此間からでも貴兄の云ふての通りに爲て居るのですよ』

『そして何ぢや、廣之さんは、些とは手答へがあるかな』

『廣之は案外にな、齡の藥も有るだらうし、それに何か考へがあるのか、以前の樣に妾の云ふ事に最初から反對する樣な事もありません』

『ウン左樣か、それは何よりぢや、賢い男ぢやからな、何時までも不利益な地位に居つて目が覺んといふ事はない筈ぢや……左樣かそれは何よりぢや』

と幸作は獨りで合點する。

『厄介なのは嫁ですよ、彼女が眞に變な女ですからの』

『綾子かい、はッはッはゝゝゝ一家再興といふ大事な場合に嫁なぞは問題にならん、お前に厄介な者なら拋り出せば可いが、俺もあの綾子といふ嫁は氣に喰はんぢや、彼女は大野家の貧乏神かも知れんで』

『眞に左樣かも知れませんよ、子供はあんな不具者になるし……』

『子供は殘しても可い、一家再興の邪魔になる樣な嫁なら貧乏神と一緒に叩き出してお仕舞なさい、俺が手本ぢや、女房が居んかて男は不自由するもんぢや無い、女房より何より先金を拵へんければ當世に生れた甲斐は無いのぢや』

（一〇）

民友黨本部で代議士總會がある、其前夜の事で。

新橋の待合如月の一室は今夜カイゼル大盡の陽氣なお座敷で、强い酒の香と嬌かしい女の聲に心を樂るやうな春の宵は更けて行く、瓦斯の白熱は廣間一ぱいに展げられた極彩色歡樂を活畫

圖を麗々と隈なく照して輝いた。

荒い格子縞の丹前姿で曲線に椅掛り、泡の花咲く麥酒の大酒盃を手に、強く挿んだ眼鏡に高い鼻の相を險しくした、颯爽の氣に滿てる紳士はカイゼル大盡の名を花柳界に歌はる、佐藤男爵である、其右に火鉢を挾んで同じ丹前姿の、面長く色淺黑い美髯の紳士が坐る、後の柱に倚つて腕を組みながら、銚子を捧げた雛妓を相手に何か興に入つた話。

佐藤男爵は酒盃を一氣に煽つて、聲と共に前へ突出す。

『オイ君鶴、此盃を取らす來い』

君鶴と呼ばれた老妓を取卷いて七八人の藝妓は隅の方でお客に構はず何か燥やいだ話の最中。

『有難う、御緣がございましたら其内頂戴に？』

『ほゝほゝゝゝ』

一緒に群つた藝妓は聲を揃へて笑つた。

『コラ失敬なッ』

と云つて男爵も笑ふ、側らの紳士が口を出した。

『佐藤さん酷く反抗を買つた樣ですな、同盟罷工といふ形ぢや』

『何の此妓輩にそんな意氣地があるものですか、我輩が三日來なかつたら皆が餓死する癖にね』

『仰有い、今に痛快なる大復讐に遇ふとも御存じないでさ』

束髮の女が相手になる、昨夕これだけの藝妓を帝國劇場まで空足運ばせた男爵の諜伏に對して何か報いる計畫が大きな聲で秘密に相談される。

『モウ來いッ』

聊か肝走つた男爵の聲に美しい群りがパッと碎けて老妓の指揮で両客を包圍む。

『ハゝア諜伏されたんだな、これ丈が揃うては念が入り過る、お前もか、齡に不足は無い樣だが』

と紳士は君鶴に盃を與へた。

『あらッ大野さんの不意打？覺えてらつしやいよ。憎らしい』

『駄目々々、潔く束になつて降參する事ぢや、大野君と我輩が一つになつては天下敵なしぢや』

男爵は斯云つて左も心地快げに、笑ひつゝ盃を大野と云はれた紳士に差す。

『僕はモウ飲れないのだが』

『大野君、そ、そんな事を云つちやア可ん、お互の間に於ける最も記念すべき日ぢやないですか、今に閣下も見える、君と我輩とがだね、牢として動かすべからざる信念を共にしてさ、これから共に巽伯爵の下に柱石股肱となつて國家の大事を成就しやうといふ、其情意投合の門出にだ、謂ば此酒は血だ、確に血だ、丈夫血を啜つて義を盟ふの盃だ、僕も大に飲る、君も飲つて下さい、豈獨り酒のみならんやだ、君と我輩が斯結んでか、つたら天下を呑むの抱負を我輩は有つて居る、イヤ確に成算があるですよ』

『ウムそれは僕も努力するさ』

意味あり氣な盃は數次献酬されて両紳士はモウ酔中の人となつた。

大野は大野廣之である、民友黨一方の旗頭たる彼が敵黨たる同志黨の大達者男爵佐藤信明と暮夜の待合に肝膽相照らして盃を交換す仲とは世間は絶えて知らなんだ、一つ黨籍に身を置く彼の同志も一人此消息に通ずる者が無つた、選擧區民も知らぬ、知る者は佐藤男爵と彼自身である、男爵の手腕を信ずる巽伯爵も此城の攻め易からぬを知つて自身搦手へ出馬し、寺田幸作の手で先づ廣之の母を射る計畫を立てたのである、すると昨日の朝佐藤男爵は自動車を遲い物に伯爵邸へ飛ばして一つの報告を捧げた、そして其報告と引換に莫大な金を懷中にして去つた

のであつた。

如月の座敷はいつか宵の光景とは變つた明るい瓦斯は花火屋の小さな電燈になつて盃盤と共に大勢の藝妓は退ひて了ひ、室外の朧ろの夜に相應しう梅にもあらぬ匂ひの籠る離座敷に大酔の身を横たへたのは大野廣之である。

（一一）

『お寒くはなくつて』

『……』

『お感冒召しては可けないことよ、チヨイト貴郎……』

『ウ、、』

漸くに轉寢の夢から覺めた廣之は着せられた夜具を脱がうとする、身を寄せて扶け起さうとする女、艶めかしい裾の色、強い薫が漂ふ中に縮緬の羽織が冷々と酒に熱つた顔に觸る。

『ほ、ほ、、、』

と女は羞澁んだ風情で、握られた手を其儘に俯向いた、小仙と云つて二十位ひの仇つぽい藝妓である。

『寢て了つたな、佐藤さんは何した』

『御前は彼方で……』

『左樣か、ア、醉ひ潰れたな、お前此處に隨いて居つたのか』

『ほゝ』

小仙はそつと睨んで傍を向く。

『薩張前後不覺ちや、お前が介抱して呉れたのかね』

『存じませんよ』

廣之はフウと酒の氣を吐いて檢束ない姿を床の柱に倚せかけると、女は後ろから丹前を着せる斯な夜はモウ二度三度もあつた。

『斯なに醉つた事はない、冷たい水を呉れないか』

女が立つて行の後姿を恍然と見遣つた廣之はブル〳〵と胴震ひをして懷手をすると、急に物に驚いた樣に其両手を出して、閉められた襖の方を凝と見る、時計が遠くで三つ鳴つた。

『ウム、昨夜請取つたかな』

獨語つて今度は襟を搔き分け紫の袱紗包を摑み出すと、四邊を見廻し手早く解いて開けた、無雜作に紙片で結ねた百圓紙幣の束が五つ、掌に餘つてバタリと疊に落ちる、それを周章て元の樣に包んだ時小仙が水指を持つて入つて來た、廣之は袱紗包で額を拭いて懷中に入れた。

『オヤ何うなすつたの、お顏が』

『何もせん、何だか暑い樣な寒い樣な晩だなア』

と云つてコロリと又横になる。

『お冷水を』

『水？、水より酒にしやうか』

『今頃？、そんなに召上つては毒よ』

『毒を喰はゞ皿までか』

廣之は天井を仰いで術なさうに云つた、小仙は懷中に挿んだ新聞を出して。

『取つて來ましたよ、今配達たところ』

『ウム』

手を伸してまだ墨汁の香する今日の朝報を取つた、一面の中央に二段抜きの大掲題は民友黨の勢揃ひと初號活字。

廣之は彈かれた如く起上た、小仙は吃驚して目を睜る――今日の民友黨代議士總會硬軟両派の對陣、形勢依然渾沌たり――と小掲題をサラ〳〵と口の中で讀む、最高幹部の動搖といふ二號活字が見えた。

記事の要領は今日午前十時から開かれる民友黨の代議士總會こそは同黨が議會に對する態度を告白するものであるが、黨員中同志黨に買收されて脱黨する軟派もあつてそれが陣笠連に止まらぬ、最高幹部の二三人も動搖の形勢であるから此大會こそは同黨に取つて勝敗の決をとる關ケ原であるといふ意味を極めて大膽な筆法で書いたものである。

之を讀了つた廣之の顔は蒼白かつた、そして突然に起上る。

『貴郎何なさるの、彼室にお床がとつてあるわ、參りませう』

『イヤ然うして居られん、俺ア今から歸る、着物を出して呉れ』

『今から？、まあ』

呆れる小仙の前へ懷中から手を出して最前の袱紗包を投げ出した。

『オイ此品は大切な物ぢや、晩までお前に預けて置く、何處へも行かんと此處で番をして居つて呉れ』

《一二》

民友黨の代議士總會は豫想の如く大騒擾を極めた。

事の起因は、風説が事實に現はれて當日出席すべき筈の代議士中十餘名は開會に先ちて脱黨を届出たのである、すると硬派を以て目せらるゝ黨員の代表者から緊急動議を起した、それは本日脱黨の變節代議士以外に現に同志黨に欵を通ずる某々等數名が居る、彼等に對して本日の決議として除名處分を行へといふのであるそして之を先決問題と爲さゞれば幹部に對し不信任を決議すべしと絶叫し、卓を叩く血氣の腕は兎もすれば人に飛ばんとし、慷慨の演説に和する喝采は物凄く止む間もない。

今壇上に立つたのは大野廣之である、彼が面を上げた時流石に騒ぎは鎮つた。

『諸君……諸君は理由なき騒擾の爲に貴重なる總會を無意味の物にされるやうとするのである

か、今日の我々は實に敵前に立つものである、軍容最も正々堂々たるを要するの機である、然るに諸君は徒らに過激の動議を提出して黨の平和を破壞されやうとする……』

『否、幹部不信任ッ』

廣之の演説半ばに猛然と起上つた一人はッカ〳〵と演壇に近づくと。

『オイ大野君、君も遂に軟化したな、君達幹部が其醜態ぢやから皆なの尻が坐らんのぢや』

『お默りなさい』

廣之の大喝は滿場に響いた。

『我輩個人に對しては何とでも云ひたまへ、幹部を指して暴言を吐くのは黨其物を凌辱するのである』

『曖昧な事を云ひたまふな、然らば君個人の告白を聞う、君が今日の態度に對して我輩は奇怪に堪へんのだ』

『個人の告白？、そんな事を此處で云ふべきぢやない、今日は黨の重要なる公會である、我輩は幹部の一人として多數の黨員を代表して出席して居るのです、個人ならば個人として……』

『いよ〳〵奇怪だ、そんなら我輩が滿場に計る事がある』

敦圍〳〵詰問者は强いて壇上に上らうとする、二三人が制止する、口笛が鳴る、椅子を硝子戸に投げた者がある、轟然たる音響の中に滿場總立となつた。

斯る騷ぎで代議士總會は終つた、此活劇を報ずる新聞號外の鈴が賑やかな頃、民友黨本部の樓上の一室に對座するのは幹部中の年長者で溫厚の人格に衆望を荷ふ杉田老人と大野廣之であつた、老人は白髯を撫して靜かに語る。

『十年苦節を共にした此杉田が云ふのぢや、君も能う考へて見て呉れ、君程の頭腦を有れる人が決して徒らに妄動はすまい、脫黨の理由同志黨に加はる理由、それは必ず有るに違ひない併し我輩それは聞くまい、お互に主義にも意見にも變化は來るだらう、昨是今非は進步の徑路ぢや、君の進まんとする方向が正道で我輩の守るのが迷路かもそれは判らん、判斷し得たところに向つて邁進するのは自由ぢやからな』

廣之は最前から目を閉つて傾聽の態度である。

『我輩の如き老人が君に對してそんな注意は一切無益ぢやと思ふ、唯我輩が忠告したいのは、權勢富貴を一身に極めた彼の巽伯爵が果して君が永遠の友たり得べき人格が何かといふ事ぢや、それを能く考へて呉れたまへといふ事である』

『有難う、能く解りました、實は伯爵其人に對する僕の智識はまだ淺いのです、それで直に其幕下に加はるといふ決心は……』

『ウンまだ考へる餘裕があるといふのですね、それなら眞に可い、何か充分考慮を費して下さい、それで無いとぢや今世間から受ける批評の苦痛を犧牲にしたのが何にもならない事になる』

杉田老人は手に持つた書面を廣之の前へ置いて。

『此脱黨屆はモウ暫時納めて置いて呉れたら何かと思ふ、今の場合君の脱黨は我黨に取つて實に苦痛である、併し我輩は其苦痛を訴へて君を引止め様とするのぢや決して無い、君が巽伯爵を了解するまで慎重の態度に出るのを希望するのです』

斯云つて老人は寂しく笑つた。

『此杉田が十年若かつたら大に君と爭ふて見る、併しモウ可ん、唯若い君方に成功させたいとばかり思ふ、老いたるかなぢやはッはッは、、、、』

《一三》

朧月の濠端を俥にも乘らず帽子を眞深に冠つた外套の紳士が歩む、まだ冷たい風は時々音を立て松から水へ、颯と人を吹く寒さに往來は宵ながら寂しい。先きから後をつけた車夫は思切り覗込んで。

『お召しなすつて、いかゞさま、に、御都合まで』

紳士は初めて口を開いた。

『煩さいッ、要らぬ』

横を向く時、外套の袖に縺れてチラリと太い洋杖の銀飾が光つた、俥夫は『へッ』と云つて立竦む。紳士は再び沈默の歩みを運ぶ、夜氣に濕つた外套の後姿にも瞭然と輕からぬ胸裡の快惱が見ゑ渡つて、下駄に蹴付ける小石にハッとする氣勢は深く何事かの物思ひに屈托する人の様子である。

美くしい自動車が障害の無い夜の大路を心の儘に飛んで來た、貴族の夫婦だつたらう、白い顔

衣と高い絹帽の姿……花薫る温室の空氣の樣な匂ひ、それらを目を聳てる人々に殘して、黄金を鑄混ぜた音に誘る喇叭の響きを何時のいつまでも原始時代の醜惡き姿に甘じて獸畜と共に土踏み奔り、苦しき生活の營みに喘ぐ往來の人々よと罵るが樣に、大く清く鳴轟かせて遙かへ飛んで行つた、朧ろに霞む月宮の歡樂へ雲を蹴つて昇る榮華か。

『畜生ッ、甘く運んでやがる』

『飛んでるのだらう』

『オイ爲公ッ、手前位ひお目出度く出來上つてる人間でも如彼圖を見せつけられちやア些たア憤つくだらうな』

『今の自働車かい、ウム豪氣に威勢が可いなア』

『可かア無ねや、俺ア肝癪の虫が燒打を始めさうだ、考へて見ねえな、俺們だつて彼の徒輩だつてよ、同じ人間の籍に入つてる間柄だぜ、すればよ、何も俺達が頭から砂埃を浴びせられてあの徒輩達が自働車に乘るものと極つた法律がある譯のもんぢやア無ね』

『オイ〳〵兄貴、そんな事を大きい聲で云ふと巡査が叱るぜ、社會主義ッてんで』

『置きやアがれ、社會主義ッていのは俺ア大嫌ひだ、俺のア斯だ、自働車でも馬事でも勝手に

乘るが可いや、有つた働きで好きな事をするなア構はねね、只物には分量に程度ッて物が有うといふんだ、富豪が三代續かなけれア貧乏だつて左樣だい、世界は廻はり持ッていからなア何も運よく豪富になつたつて分量と程度を忘れて威張るのは可けねいといふんだ、自働車が流行ればスグ物見遊山にもブウ〳〵飛ばしやがつて往來の邪魔ばかりぢやア無え、徒歩で歩く貧乏人を何人轢死したか判らねね、別莊季節になると田舍へ繰り出して榮耀贅澤の有ッ丈を見せびらかすから、素朴な百姓が碌な眞似は爲ねい、農事に精を出さねいから米は出來ねい從つて米價騰貴で難義するなア矢張俺們だい、皆な今の富豪の徒輩が程度ッてものを忘れて威張りたがるからだから俺ア富豪の威張るのを見るていと毆り倒して遣りたくなるんだ』

『門を倒すのが流行るぜ』

『神戸かい、何とかいふ代議士の門だ、俺アあの門の寫眞を見て肝を潰したぜ丸で昔の禁裡樣の御門だ、往昔で見ねい借上沙汰で闕所の代物だ、程度を忘れやがつて途方もねい贅澤を爲やがるから諸人の憎惡が集らうといふものだ憎まれねい程度で富豪になるんだな』

職人體の男が、自働車の消ねた方から話しながら來かゝる、重い調子で歩む紳士と摺れ違つた。

『けどもよ、俺らア憎まれても富豪になりていぜ、斯して正路に汗水滴らして稼いだところで

俺の一生に美人と自働車に合乘ッて福德は來ねいと思ふと味氣なくならァ』

『ウフッ飛んだ鑄掛松だ、止しや、憎まれて叩ッ壞される門構へよりァ路次の隅方でも譽め者で暮すが人間の德だい第一氣樂さ』

『それァ昔から貧乏人の云ふ事よ、今ァ金が無くつちァ滅多に譽められる氣遣ひなしよ』

『富豪が可いか貧乏が可いかッ』

『こゝは思案の……怠惰者とけつかる』

『はッはッはゝゝゝ』

後に起る高い笑聲に、鞭で引撲かれでも爲る樣に悸々した紳士は凝と振顧つて職人の影を目送する、蒼白めた顏は大野廣之であつた。

（一四）

待合如月の例時の座敷では佐藤男爵が大野廣之の來るのを待受けて居る、其顏には穩かならぬ色が見ゐる、馴染の藝妓も呼ばず苦り切つた体で長い手紙を認めて居る、劇しく手を鳴して。

『モ一度大野さんへ電話をかけて呉れ、御主人はまだお歸りになりませんかッて聞くのだ、此方を云ふのぢや無い、解つたかね』

女中は叱られさうな權幕に縮み上つて退く。

大野廣之は伸にも乘らず如月の表から入つた來た、衝立の蔭に控へた女中は飛付く樣にして外套を脫がせにかゝる。

『最前から佐藤の御前がお待兼で居らつしやいます、スグ其席へ……』

『イヤ別の……今朝の座敷にして呉れ、居るだらうな』

『は』

女中は詞の意味が能く解らなかつた、それに構はず廣之は急遽しげに二階へ上つた、楷子段を踏む音も荒々しく從來の彼に似ぬ擧動を女中達は怪しんで顏を見合せる、部屋に入るとドッカと坐つて。

『何處へ行つたのだ、早く呼んで呉れ、俺が歸つたと云つて』

『あの佐藤の御前は階下の離座敷で』

『何を云つて居るのだ、小仙を早く呼んで來い』

『あら小仙さんでございますか』

『ウム、俺が預けて置いた物がある、急に入用だからな、此處に待つて居る樣に云つて置いたのだが、何處へ行つたのか、早く呼んで來て吳れ』

合點の行ぬ風で女中は周章下りて行く、廣之は其邊を見廻はして再び立上る、今日一日を混亂に費つた頭腦は割れるばかりに痛い、そして水を浴びるやうな惡寒を感じる。

『何をして居るかッ』

障子を明けて廊下へ出やうとする時楷子段から半身を現はしたのは佐藤男爵であつた。

『大野さん、僕は日の暮から待つて居るのですよ、大層遲かつたですな』

不意に男爵に來られて度を失つた廣之は。

『イヤ甚だ何うも……』

と曖昧な應答をしながら、待たるゝ人を階下に覗き込んで。

『今直ぐ座敷へ伺ひませう、一寸……』

『イヤお越しになつたら我輩安心する、實は妙な報告があつたものだからね、ナニ貴下を疑ふといふのぢやないですよ』

『脫黨ですか、それは僕まだ手續を運ばないです』

『エッ』

と男爵は驚いた風、兩人は部屋に入つた。

『今日總會を遣つたでせう、何してゞす昨夕のお約束を其儘僕は巽さんの方へ報告したのですが』

『……いかにも約束しました、佐藤さん、僕はあの約束を』

廣之の詞半ばへ楷子段を駈上るけたゝましい音、息を喘ませた女將が障子を引明けて。

『大野の旦那え、あの小仙へ何か御大切な品をお頻けなすつたさうでございますが……あの妓は今朝歸つた限で只今尋ねに參りますとね、家中大騷ぎの最中で、何でも約束した男と何處かへ隱れたのだッて大變でございますよ』

『何ッ』

廣之は血相變へて立上つた。

『何したのかね、小仙が隱れた？怪しからん奴ぢやな』

男爵は廣之に進めた藝妓が姿を隱したと聞いて挨拶めいたことを言つたが氣にも止めぬ樣子。

『宅は何處だッ』

早や廣之は廊下へ出た、血の氣の失せた其顏を瓦斯は物凄く照す。

『大野さん何したといふのです、あんな女が……』

と男爵は勘違へをして、餘りに廣之の樣子が變なのに驚きながら續いて出た。

『今警察へ願つて探してる最中でございますよ』

『警察へ？』

楷子段を下りかけた廣之は警察と聞いて其處へ立止ると両の手で頭を犇と抱いた後から。

『何か用事があるのなら人を出した方が可からう、貴下の名前が出る樣な事があつては愚だ』

云ふ聲は耳に入つたか何か、廣之は死せるもの、如く身動きもせぬ、呆氣にとられた佐藤男爵と女將は顏を見合せて佇んだ、この疑惑と恐惶に滿ちた此場の光景を知らず顏に燈火の明るい表通りを新内が流して通る。

『エ、ッ、遣るぞッ』

と廣之は叫ぶ樣に云つて後を振向くと。

『はッは、、、僕の思違ひだつた、佐藤さん何も失禮しました、貴下の座敷へ行つて大に飲う

大丈夫だ、安心して下さい、お約束通りお味方する、之を貴下の方から送つて貰へば大丈夫だらう』

懷中から取出して男爵の面前へ置いたのは脫黨屆であつた。

（一五）

『何か用かね』

『ハイ妾少々伺ひたい事がございます』

廣之は五日振に今朝我家へ歸つて來た、時節柄黨の務めに忙がしい身體は夜を日に襲いでの奔走に、門を過ぎても入らぬ疲勞は何なであらうか、と同情つては妻の身の心安らかな片時も無い、それに熱憤の輿論は暴力沙汰に及んで物騷千萬な噂や事實が各所に起る、正義の名に呼ばれた民友黨に重要の地位占むる夫の身の上に怪我過失は萬々有るまいとは信じて居るもの、、人の氣の涌き立つた時節間違事が何う起つて思ひがけぬ災難が……と朝出を見送る俥上の後姿に人知れぬ手を合はせて……神……佛の加護を力草、弱い思ひは無事のお歸りに元氣な顏を見

るまで絶つた杖を取られた心地を難かしい姑の手前何氣なく裝ふ氣苦勞も普通の事では無かつたが……そんな事は今の思ひに比べて物の數ではなかつたのである。

先刻歸つた夫は和服に着換へると間もなく再び外出の樣子に綾子は强ひて遮ぎるやうにして居間で對坐つた。

『下らん家庭の用事なら今は廢めて貰はう、約束の用事があるから』

斯な邪慳な詞を綾子は夫の口から聞いたのは今が始めてゞある。

『お急ぎの御用なら……でもお歸りが何時か……』

『私の歸りが何日何時といふ事を云へといふかね、そんな事は出來ん、今日も歸れるのぢやなかつた』

綾子は逆はぬ樣に默つたが、そつと見た夫の顏に驚愕を禁め得ず思はず近う寄つて。

『貴郎お顏を何かなすつて？』

『何もせん、用事は又歸つて聞う』

と早や浮腰の、心は此處に居つかぬ態である、綾子が五日見ぬ夫の顏に驚いたも道理、頰の肉はゲッソリと落ち眼も窪んで力なく、血色は凄い程惡い。

『御氣分でもお惡のぢやありませんか』

『氣分？氣分の惡い時もある』

と廣之は両手で顏を荒く擦つて。

『ア、陰氣だッ、酒は無いか酒は』

『は、持つて參りませうか、何方に致しませう』

『何でも可い、早く持つてお出』

夫が宅で酒盃を持つのは絶ゑて久しい事である、綾子はまだ續けさまに機嫌の惡い詞を聞くこと、思つたのに急に酒を命せられていそ〳〵と立かける。

『イヤ要らん、廢す、それよりお前の話といふのは何か』

彼品を斯して暖かい汁の物に、それから夫が好きな雲丹と紫海苔と、香蕉を盛つて……と心盡の献立は無殘に破られる。

『あの……黨の事でございます、種々な噂を申して居るやうですし、新聞にも昨日の總會の事を……何だか貴郎が黨をお脫きになる樣な記事を……』

『新聞に？新聞なぞが何を書いたつてそんなことで乃公が弱ると思ふかッ』

廣之は冷やかに笑つて。

『お前も乃公が新聞や世間の攻撃位に弱る男と蔑視るか』

此意外の詞には綾子は何とも答へる術を知らなんだ、脱黨の事が事實ならば自分は他まで反對する決心で居る、政治向の事業に婦女が容喙しすべきでないことは能く承知して居る、けれども夫の人格に關係の問題が起つた時にも其原因が政治であるからと云つて何一言の意見を陳べぬのは妻としての責任を忘れたものである、といふ信念は綾子の胸に岩の如く堅固である、姑の詞や擧動で事態の大略は推量される、姑の此頃寺田の方へ泊り込みで居られるのも夫の身の上の所謂出世話と關聯した事とは能く解つて居るのであるから、それに彼の佐藤男爵との往來……數日打續いての外泊、それらを一つに合せて考へれば夫の身は今誘惑の惡魔が隙間もなく取卷いて居るのであらう、けれども夫の明鏡のやうな魂は惡魔の正體を照すに充分である、十餘年の歳月を貧苦と闘ふたのは皆な黨の事業の爲である、今日でこそ民友黨の地盤が固まり夫も代議士に當選して生活も裕かになつたれ、自分が嫁入して來た當時の光景？また若い夫の過激な政治運動は屢々其筋の忌諱に觸れ都を放逐の憂目にも遇ふた、土裂くる八月の炎天に腦を痛めた夫を介抱して、汽車賃の無いに箱根越をした事もある、九州の空に彷徨うて安宿の木

枕に空腹の夢のせた事もある、それらの辛酸は今の名譽と光り輝いて夫の歴史を飾つて居る、その美くしい光りを我と消す樣な無分別を夫が何として爲されやう疑ふては濟ぬ、疑ふは我心の至らぬのであらう。

斯う信じて居た綾子の耳に今の詞は餘りに突飛であつた、世間や新聞の攻撃位に弱る男と蔑視るか？意味が解せねば答へも出來ぬ、凝と夫の顔を眺めて居ると。

『オイ綾ッ、いかにも俺は民友黨を退いた、今日からの此大野廣之は全く別人ぢやぞ、俺は俺の信ずる所に向つて進むのだ、それに就ては其方達は何も云ふな、何も云はずに唯俺に隨いて來れば可い、可いか、馬車に乘れと云へば柔順に乘れ、夜會に出いと云つたら柔順に出いそして俺が捉む新しい運命の味を相伴して呉れ、可いか』

（一六）

主人が不在勝の大野邸は寂しい、老人仲子は寺田の高輪の別莊へ行つた限歸つて來ぬ、抱車夫晋藏は車の御用の閑を健々しく立働くのであるが昨日から珍らしく感冒で部屋に引籠つて居る

女中を相手に晝餐の支度に立働いて居た綾子は今客膳を座敷に運ぶと、ホッとして白い前覆をとつた。

梅の梢に近い二階の窓から朗々と讀書の聲が漏れる、其處は一室を學校の教室同樣に拵へた薫の勉強所で、家庭教師として朝から正午まで出張する榊直也は、薫の齡に合はせた尋常科二年程度の學修に熱心籠めて責任を盡すのであつた。

傷氣な不自由の躰軀を椅子に乘せて卓上の本に目を注ぐのは薫である、木綿の紋付羽織に小倉の袴を跨いた直也は嚴肅な姿勢で直立て、片手に展げた修身の教科書と、薫の樣子を七分三分に見る、太い濃い眉と伸びるに任した煩髯に強い氣持の迸しる凜々しい壯漢である。

『可しい、讀方はそれで可しい、本をお疊みなさいそれから此に書いた字をモ一度お讀みなさい』

『梅花……男兒……正義』

『然う、可しい、梅花は梅の花、男兒は男、判つたね、それから正義は、正義とは何んな事かお答へなさい』

『人間の行ふべき正しい道です』

『可し、それで先生は先刻此三つの字で訓話をしました、あの訓話を覺えて居ますか』

薫は言下に椅子を支へて身を起す。

『春の花の第一番に梅の花が開きます、梅の花は冬の寒さにも決して負けません、そして美しい花や好い匂ひを放つて人を喜ばせます、男も此梅の花と同じ樣に、何な寒い……何な辛い悲しい事があつても決して負けてはなりません、そして人間の行ふべき正しい道を歩かねばなりません』

『ア、能く覺えられた、それを宿題にしますから明日までに書いてお置きなさい、禮ッ』

薫は禮の號令で活潑に頭を下げる、直也は白墨で汚れた手を拭ふて後の椅子に腰を下す。

『先生ッ』

と薫は懷しさうに其傍へ寄つた、直也は今迄の嚴肅な体度を改めて。

『何、モウ正午だ、御飯だらう、階下へ行きたまへ』

『厭、先生と一緒に行く』

『僕ア直下りるよ』

『一緒に行かんと寂しい』

『寂しい？はッはッは、、、、薫君は弱いなア、寂いなんテ女が云ふ事ぢや』

『だつて……お母様でも寂がつてらア』

『お母様は女ぢやないか、お母様が寂しがつたり悲しがつたりする時は薫君が慰めて上げるんだ、それが孝行といふのぢや』

『泣く時も』

『泣く時？……お母様は泣くの』

『人の前では泣んけどなア、僕ア能う知つとる、僕が寢た後で火鉢の所へ座つて何時でも泣くんだもの、お母様はお父様が些とも歸つて來ないものだからそれで泣くんだ、寂しいから泣くんだ、僕だつてお父様が居ないと寂しいけど……』

直也は此頃の政變が政客の家庭に及ぼす影響は種々であらうと考へた、病死の妻を葬らず議會に馳參じた地方代議士の新聞が出て居た、壯快な政治界の裏面には悲慘な消息が幾つも有るだらうと思つたそして寂しいに泣くといふ當邸の夫人の事を變に思ひ惑ふのであつた。

民友黨の名士と推さるゝ當邸の主人廣之の政治的手腕は知らず、其人格には敬意を拂つて居る政治といふ事に趣味を有ぬ自分ながら、そも〳〵初めて文學に志した動機は政治小説と銘打つ

た其頃の出版物を讀んだ事であつた、雪中梅だとか花間鶯だとかいふ民權自由の政事を骨子にした壯烈な文字は、八犬傳や弓張月の玉の樣な文章を暗んじて喜んだ青年に一進境に與へて、我をして人の世の情を描く小説作家たらん決心を與へたのは確に政治小説のお蔭である、其小説中の主人公とも見たい大野廣之、十有餘年を野に立つて眼に富貴なく口に權勢を罵り終始一貫の大精神を表はし來つた偉大なる人格、我モシ今政治に交渉ある文學の筆執らば民友黨の名士大野廣之を寫したい、とまで崇拜して居る人物である、此人から家庭教師を委囑されて自分は喜んで當邸に來る事となつたのである、近づいて見れば主人はいよ〳〵頼みある人格である夫人は今の所謂新しいと稱する墮落女の一派に眞の女性道德の光りを投げ與へる爲に現はれた人かと自然と尊敬の情催さるゝ優しの婦人である、其中の一粒種薫は聰明な血を承けて怜悧く生長つ小供である、此一家に迎へられた自分の職掌は實に愉快極まるものである、傷しの不具の身は是非なし、精神の修養は一點の缺ぐる點なく立派に教へて鍛ねて、親達に劣ぬ人物とするには初等教育の今が最も大切で、夫は自分の天職である。

直也が家庭教師の態度は斯であつた、で赤誠を傾ける教へ振は薫は素より廣之夫婦の心を動かして、二年の月日は直也と大野家の間に親戚の樣な親善を生けたのであつた。

『お父様は國家の爲に働いての方ぢや、それで忙がしいから歸つて來られん、君も早く大きくなつてお父様の様に國家的事業に身を捧げんと可ん、はッはッはゝゝゝ難かしかいね、ソラ先刻敎へた正義の道ぢや、正しい道を威張つて歩くんぢや』

『民友黨は正義だ、ね、先生、お父様の民友黨は正しいだらう』

『ウン、小供は政治の事なぞは云はんでも可い、お父様やお母様の爲される事は悉皆正しい道ぢや』

『だつて訝しいなァ、先生、お父様ァ民友黨を廢めたんだもの、お母様はそれで泣いてるのかも知れないせ』

直也は大笑ひをして。

『そんな事は無い、君のお父様は正義の士ぢや、モシお父様が民友黨を廢める様な事があつたら君はスグ正義の道を說いてお父様に聞せるが可い、正義とは人間の守るべき正しい道なりッてな先刻敎へたらうはッはッはゝゝゝ』

磊落に高く笑つた時女中が飯を報せて來た。

（一七）

『氷肌玉骨淸艶を爭ふ、孰かこれ梅花いづれか美人……』

直也は星の如く咲き誇つた梅の木蔭を肩聳やかしてノソリ〳〵と歩きながら微かに詩の句を吟じつゝ佇立る、滑かな靑苔に置く落英の彩りは、空に滿る香薰よりも彼の情緖に觸れたのだらう、春日燈籠を背に、高く腕を組んで凝と地上を見る。

『先生、それ詩？、歌？』

『ウ、今のか、はッはッはゝゝゝ』

と直也は薰が不意の質問に一寸閉口する。

『詩だ、詩だけれどまだ君には解らん詩ぢや』

『說明したら解るとも』

『說明せいでも可い詩ぢやはッはッはゝゝゝ』

少年の追究に直也は頭を搔いて。

『君には斯な詩がある、梅花は照れる星に似たり、菅公の詩ぢや、菅公つて天神樣の事だ』

『天神さま詩を作つて』

『詩でも歌でも上手ぢやつた、君より小さい時に作られたのが今の梅花の詩ぢや、今度書いて教へやう』

直也は午餐を濟せて一時間ほど薫を連れて運動した後辭去るのが例になつて居る植物園へ出掛けたり、時には電車で淺草上野まで連れて行く事もある、彼は敎室では儼かな敎師となり、學課を離れては弟を庇護ふ肉親の兄の情愛をもて此身躰の不自由な可憐な少年に對するのであつた、今日は庭園の梅が眞盛りなので其下を逍遙しつゝ趣味ある話に薫が喜ぶのを見て、自分も髯に埋つた顏を無邪氣に笑ひ崩して興に入るのである。

庭下駄の音がして綾子が出て來た。

『ほゝほ又何か御無理を云つてるのね、そんなに先生にお縋りして、これ薫、お前それ何といふお行儀だねね』

『ィヤ構はんです、敎室を出たらウンと亂暴を發揮しなけァ可んですよはッはッはゝゝゝ』

『でも餘り可愛がつて頂くものですから妾達より貴方……本統に小供といふものは』

薫は自分に面白くない話を直也の後でニコ〳〵笑つて居る。

『大分進んで來ましたぞ、時々僕を遣り込めますはッはッはゝゝゝ』

『ほゝほ、有難うございます、斯な身體なので何かと心配したのでございますが、全く御骨折のお蔭でございます、お禮の申上げ樣もございません』

『奥さん、僕ァ些とも骨は折りませんぞ、非常に興味を有つて遣つて居るのです僕が貧乏でなけァ貴家の方から手當なぞ邪魔臭い物を貰うんぢやないはッはッはゝゝゝ』

『ほゝほゝゝゝ』

飾り氣のない率直な詞に其人の美しい性格も見えて、此良敎師を我子に得た喜びが今更ながら繰返さるゝ。

『お任せ限りにして些とも構はないものですから御迷惑だらうと存じます、所夫が御承知の通り只今大變な政變の最中でございますので其爲に一向家庭の事は……』

『御主人はお留守勝ださうですな、併し御愉快ですなァ、多年正義の味方となつて御奮鬪の甲斐がありましたな、僕なざァ政界の事は風馬牛で何も解らんですが併し愉快を感じるですよ御主人が正義の立場に同情する聲を聞くと何だか斯う肩身が廣い樣ですよ、今度の一擧に多

數の敵を制すればモウ民友黨の天下と曰ひますな、正義の勝利です、實に御愉快ですなア』

『はい……』

『今日までは御主人ばかりぢやない、奥さんの御苦勞も隨分有つたでせうな』

『……いゑ妾なぞは……』

『イヤお察しするです、僕ア貴方方御夫婦の事を描いて見たいと思つた事が屢々有つたのです家人亦解す勤王の事、釵裙を賣盡して戰袍に充つ……尊い文學が得られるです』

直也の重い口から斯なに詞數を聞くのは珍らしいのである、それだけ同情の深い人に對つて、綾子は何と答へる事も出來ぬ心の苦しさを凝と堪ゑるにつけて、夫の淺ましいとも情ない所業終生の事業我が生命とまで誓つた民友黨を一朝に振捨て敵の同志黨に加はり、從來は蛇蝎の如く忌み厭うた權勢名利を望む夫の精神が恨めしいとも口惜しいとも……、それに結んでは自分の立場の切なさ苦しさに思ひ惱む色は自然と面に現はれる、直也はそれに氣の付かぬ樣子で、琴は長鎗に易へ書は刀に易ふ、士は國難に當り敢て勞を辭せむ……と今の詩の前句を口の中で唱へる、薫は杖に縋つて急いで前に出ると。

『ねゑお母樣、お父樣は民友黨を廢めたんだらう、先生は嘘ッて云んだもの、ねえお母樣』

綾子はハッと思つた、我子の口が押たい、身を寄せて。

『ほゝほ何を云ふのだねゑお前は』

と苦痛に慄く聲、薫が手に梅の小枝を持つのを見て、それを咎めるのに辛く紛らせる。

『そんな物を折つては可けません、お前は何故惡戯ばかりするのです……』

直也は始めて……先刻薫が云つた事……今又不意に云出した廣之が脫黨したといふこと、それが小供の妄語でなく、何か根據のある詞ではなからうかと云ふ事に氣付くと同時に、夫人が餘程重大な煩悶に惱まされて居るらしい樣子を見て取つた、が遠慮せず。

『奥さん、御主人が民友黨を去られるといふ樣な事實が有るのですか』

『……表向きの事は一向妾存じないのでございますが……何か事情がある樣な話も……』

苦痛は遂に胸に餘つて白い頰に涙の一滴夫を見せじと屈で苦上の落英を撮む。

お母樣は泣いて居る、と云つた薫の詞が今の涙で又直也の胸に浮んだ、そして廣之の脫黨が事實であつて、其夫の行動が妻たる綾子を殘酷に責め虐むのであらう……といふ直覺が直也の腦に閃いた、が彼は些とも躊躇はず。

『ウム、僕は門外漢で敢て喙を容るべきぢやないですが……奥さん貴女は今或物と大いに鬪ふ

て居られるですな』

『……』

『負けちゃ不可ん、貴女は正義の爲に闘ふて居られると思ふ。負けちゃ可けませんぞ、僕ア正義と闘ふ人間が大好きぢや、大いにお遣んなさい、正義の力は何物をも動かす、夫でも何でも動かず、泣く樣な事ぢやア戰闘に勝てませんぞッ』

直也は敵前に立つ勇士の如き姿勢で、凜々しした口調で斯云ふと突然薫の手に持つた梅の枝を取つて。

『奥さん、僕ア、貴女の正義の軍に餞別をしやう、梅は寒にして秀づぢや、正義の花です』

綾子は赤誠溢るゝ人の同情を嬉しみ、手に花の枝を受けて頂く樣に。

『御深切に難有うございます』

『僕の誤解ぢやつたら幸福ですはッはッはゝゝゝ』

直也が苦の無い哄笑をする時、椽の障子を内から細く明てスグ閉めた人がある。

（一八）

夫の居室は今日も空虛である、若やと待受けの火鉢に櫻炭の白灰空しく崩れて、人なき部屋の氣勢物寂しう、冷々とうそ寒い紫檀の卓上に一輪生の水仙も眺めにいらぬ憂きを色にか、花冠は力なく萎れて垂れた。

梅の折枝に木鋏を持添えて靜かに入つて來たのは綾子である、憂色の顏に四邊を見廻はして、卓子に進むと崩れる樣に肩を落し力なく身を倚せてホッと息をついた。

弱い心で何ならうぞ、今も斂く事情を看破つて同情の赤誠に我を勵まして呉れた榊教師から、泣く樣な事ぢや戰闘に勝てんと云はれた詞、實に自分は今前と後に大敵受けた身の上である、姑には心盡しの甲斐もなく平時に增して不機嫌の、二言目には此家に緣なき者の樣に罵られ、夫の出世を邪魔する女と情ない、昨日今日で無い仲に子といふ鎹も深々と、夫婦の情愛に一點の障碍もなう過越方の辛酸艱苦をこれからの追憶と樂しい希望に努力の心一日も弛怠なく、夫の躰面衣食住にも人に云はれぬ苦勞を重ねて居るものを、自分が來てから大野家の運傾いた

證據は不具者の薫を見よと生きた皮剝く凌辱を、畢竟自分の赤誠が足らぬからと我と反省の胸裡の底には、天地が覆るも怖くない方頼みの夫あればこそ、夫は自分の鏡である、曇らぬ鏡には虚偽のない我が映らう、夫の心に映る赤誠は何時か姑の胸にも響いて嬉しい家庭の暮も來やう、頼むは夫唯一人、此思ひは世間の妻の萬人の心では有うが、今の境遇には心弱くも一層の杖柱、辛い悲しい時に夫の名を念じて闇中に燈火の力強さを加ふるのが自分の僅た一つの慰籍である。

其夫は……杖柱とも鏡とも、闇中の燈火とも縋り懐かしむ我夫は……ア、姑が後追ふ敵ならば夫は前に逼る敵であつた、自分に一言の相談もなく民友黨を脱して巽伯爵の旗下に走り、今迄の主張も持操も抛つた上で、今日から生れ變つた我は好きな方へ勝手に進むから其方は何も云はず唯柔順に隨いて來い？とは假令天魔か魅いるとも今迄の夫に出來ぬ仕打である、それを平氣で爲る夫は、若しや自分に對する愛情も……。

此腹背の敵に挾まれた自分の執るべき手段は？榊教師の同情は芳薫に籠る白梅の一枝、寒にして秀づる花の節操は雪霜に惱みていよ〳〵堅い、進んで夫を諫め退いて姑に仕へる手段は唯一筋の女の赤誠正義の力は何物をも動かす……と其人の激勵は神佛の聲であらう、姑に放逐れても此家を出ぬ決心の我は、聞かうと曰う夫の耳に迷ひを破る聲吹込まで置くべきか。

綾子は涙の面を屹と上げた、堅く結んだ唇邊には堅い決心が見ゐる、蒼白い顔は青白の花に映うて、凄艶の氣は靜かな部室に滿つる。

青銅の花瓶の水仙に替へて梅の枝を挿し鋏の音させて居た綾子は後ろの襖が明いたのに氣付いて振向くと、何時の間に歸つて來たのか、姑の仲子が半身を見せて起つて居る。

『あらお母様お歸り遊ばせ、些とも存じませんでお出迎へも』

と起上る、仲子は默つてツカ〳〵と入つて來る、と卓子の横に突立つた儘。

『豪い陽氣な事ぢやのう、生花のお樂みかえ』

『イエあの……花が萎れて居たものですから、恰度斯んな梅がございますので一寸……』

『善い梅ぢやのう、色氣があつて、ほゝほゝ』

『御滯留でございましたわね、一度伺はせに出す積りでしたけれど、旦那様もお歸りがございませんので……』

『母子共家を明けてほゝほゝゝゝお前は思ふ通りで定めて可かつらたうの』

仲子のジロリと見る顔を、アゝ又解けぬお心かと。

『あの、まことにお寂しうございます……』

『ほゝほゝゝゝ口は重寶なものぢやの、寂しい段か、お前は大層陽氣なお樂みでは無いか』

と毒針は肉に逼る、獨語の樣に。

『本統に今時の人の大膽なのには呆れ反るのう』

綾子は態と聞へぬものに。

『あのお衣裳換遊ばしては』

『妾はスグ出ます、斯んな穢れた家に片時居るのは厭ですよ』

『ね』

遂に堪へ兼ねて姑の詞に不審の點打づ一言を、仲子は待つて居たといふ風、そろ〳〵と坐りかける。

『妾今迄は目を眠つて默つて居たのが、お前といふ女は實に大それた恐しい事を爲てぢやの』

嫁入先の家が潰れるのを喜ぶ女だの、薫を不具にしたのは自分の所爲だのと、罵詈を始めたら心往くまでに極度を拂かねば承知せぬ姑である、恐ろしい詞も聞馴れては左まで苦にならぬ修行を積んだ今ながら、穢れた家の一言には胸が潰れて心が昏む。

『今日といふ今日は妾默つて居る事は出來ません、お前は廣之といふ歴然とした夫ある身分といふ事を忘れて居るではあるまいの』

『お母樣』

と綾子は姿を正して。

『妾妻の身分を片時忘れた事はございません』

凛然と云放つ、斯ういふ詞に對しては綾子が何時も優しい態度から離れて判然と云ひ爭ふのが仲子の爲にいよ〳〵憤惡の的となるのである。

『ホウ夫を持つ身を忘れん者が能く思ひ切つた不品行が出來ますの』

『何と仰有います』

『お前は大それた不品行を爲て居てぢや、エ、隱しても駄目ですよ、妾の眼は光つて居る』

と屠にかゝた老人は矢庭に出を延して卓子の上の梅花を引奪る、花瓶は轉がつて水が垂る。

『此梅花をお前は誰から貰ふたのです、ほゝほゝ何程達辨で妾を遣込るお前でも之を判察と答へが出來まいがの』

（一九）

斯る災禍は白梅の花一枝、それを恐ろしい不義呼はりの證據に罵しふれやうとは綾子は思ひも依らぬ事であつた、最前庭園で薫の折つたのを榊教師の手から受取つて此室の花瓶に挿したばかり、自分の切ない苦勞に同情して吳れて花に喩へて勵まされた、其深切を感謝の禮ごゝろに其人の出から頂いて受けこそしたれ、夫が不品行の不義のとは何う曲げて何責めらるゝ我過失か綾子は屹と面を上げた。

『お母様、その花は先刻薫が庭園で折たのでございますが、それが何か妾の』

『ほゝほゝゝ、さうで有う、さう云はねばなるまい、正眞の事は云へまいがの』

『妾嘘は申上げません』

『お默んなさい』

と仲子は威丈高になつて。

『惡い事は天道様が見透しぢや、其天道様のお照しになる眞白晝に、夫のある身が他の男と狎

話狂ふて、それで嘘をつかんも何もあるものか、妾はチャンと現場を見て知つて居ますぞ』

綾子は呆れて詞が出なかつた、他の男とは榊教師の事であらう。

『それでもお前は白々と薫が折つた花と云ひ張るのぢやの、妾を盲目にする氣ぢやの』

『お母様、何といふ情ないお疑ひでございます』

親なりとて夫なりとて女性が命の貞操疑ふに用捨がならうか。

『最前薫を連れて毎時の通り榊さんが庭前を運動させていらつしやいました、其時薫が折つた梅花を榊さんから妾が受取つたのでございますが、お母様が御覽になつたと仰有るのは』

『それ御覽、薫から取つたといふのはチャンと嘘ぢやないか、親や夫を欺く樣な事になるのは皆な不品行の爲です』

『妾不品行の覺ねはございません、その言には妾何處までも』

『何處までも？此妾と何處までも白黑を立てやうと云ふのぢやの、お前が云はいでもそれは廣之の母たる私の責任ぢや、斯な事を抛棄にして置けるものか、立派な男の顏に泥を塗つて』

梅の枝を持つた儘荒々しく起上らうとする姑の袂を綾子は確と掴んだ。

『お母様……それは餘り……餘りな御無理ぢやございませんか』

膝にポロ〳〵落つる涙を其儘。

『妾が薫も居りまする前で家庭教師の榊さんから梅の枝を受取つたのが何故不品行でございます、家庭教師と話をして居たのが何故夫の顔に泥を塗ることになるのでございます、お母様、妾お母様の仰せには何な事でもお詞を反かぬ覺悟でございますが、此事ばかりは默つて居る事は出來ません、お母様のお考へ違ひです、モ一度妾の申上げる事を……』

『モウ聞くに及びません、話をしたのが不品行とは云ひません、話にも依りけり密々と長い間……揚句の果には厭らしい梅花の遣取りなぞをしてそれで身の潔白が立つと思ふのが猛々しい』

袂を強く振放して。

『あゝ長生すると恐ろしい物を見ます、エ、斯んな物は穢らはしい』

と梅花を疊に叩きつけて襖をピシャリ、姿は消えたが罵る聲はまだ聞ゐる、唇をキと咬んで半ば身を起した綾子は、疊に散つた白い花片がグル〳〵輪に舞ひ蝶と飛んでそこら一面雪の景色……と見て昏々と激しい眩暈を感じドウと其場に倒れたのである。

『お母様何うしたの……お母様……お母様』

『何も爲やしない……何も……』

と微かに答へて顔を上げると漸次に明瞭と、其處に起つ薫が目についた。

『オ、薫かい』

『お母様何したの、氣分が惡いの、え、何うしたの』

『イエ、モウ何うもないのよ……、一寸逆上せたのだらうね、お前今來たの』

『僕吃驚したんだ、今車が玄關に聞ゐたからお父様かと思つて出て見たら伯母様が』

『おばあ様が？お出掛けになつたの』

『ウン僕お家苞貝戴つて云つたらそんな物は無いつて叱るんだもの、伯母様は此頃偶に歸つちやア叱つてばかり居るぜ、詰らないからお母様を探して此室へ來たら俯伏いて寢て居たから吃驚しちやつた』

と四邊をキョロ〳〵見廻はして。

『お母様卓子の上に水が覆れてるぜ、ア梅の花が斯んなになつてらあ』

『お母様が粗相をしたのです』

そこらを取片附る母の顔を覗込んで。

『お母様』

『何』

『お母様も伯母様に叱られたの？』

『……ほゝほゝ、お母様は叱られはしないよ』

『だつて泣いてたのだらう目が眞赤だもの』

『……』

『お母様、お母様は泣くから可けないぜ、先生が然う云つたらう、泣く人は負けるッて云つたらう、僕お母様が負けると厭だからなあ、お母様泣かずに強い人になつて下さいよ』

『ほゝほゝ、モウお母様は泣きはしない、強い〳〵人になるからね、お前も能く勉強して早く豪い人におなりなさいよ』

綾子は斯く語る中にフト恐ろしい運命の黒雲が母子の上に舞下るかの様な、心細い悲しい情を感じて、痛ましい姿の薫を引寄せた。

（二〇）

『はッはッはゝゝゝイヤ貴方と俺が斯して手を握り合うのも之も時勢の進歩ちやテ』

『全くです、私も今度は生れ變つた積りですよ、醒めたる女といふ事が大流行ですが私のは醒めたる男を行かうと思ふ、習慣と遺傳と……それから從來の境遇、それらの總てを突破つて一つ新しく遣つて見る決心で斷行したのです駄目です、到底駄目です、正義だの人道だのと普通なお交際を云つてた所が遂に敗者です、實力の伴はない空威張ちやア遂に成功しない事を全く覺りました』

『その事、その事、其點へ氣が付いたのは矢張貴方の豪いのぢや、ナアニ暫時は群蠅見たいな連中がイヤ變節だの軟化だのと愚にもつかん事をワイ〳〵吠に立てるがそんな事は稼業にならんからの、ア、大野は矢張豪い哩と云つて貴方の成功に縋つたり羨んだりするのは目前の事ぢやテ』

主人は寺田幸作である、今日別莊へ來た珍客を歡迎振りに、例の梅林の離座敷で酒を汲交すのである、珍客は大野廣之で、彼は長い間仲違ひ同樣疎遠になつて居た母兄の許を今日久々に訪

間したのである、母の仲子は當邸を我家の住心地よく時間にしか小石川へは歸らぬのであるが昨日の午後一寸行くと云つて出たかと思ふと間もなく引返して來て何か密々幸作と相談を遂げた後電話を何處かへかけて今日廣之を招き寄せる手筈を運んだのであつた。

廣之は此頃宅を外にして從來の公私の知人と一切交際を避け、其居所を知つたのは彼の佐藤男爵と母仲子と、それから伯父の幸作位のものである、彼の不意の脱黨は果して巽伯爵の目算通り尠からず民友黨の内部を混亂させ、彼同樣脱黨した代議士が二十餘名に及んだ、其結果今度こそはと思はれた民友黨の多數勢力は土俵際で無殘に頽れ、敵の同志黨は遂に政界の覇を握るに至つたのである、之が爲に大野廣之の變節を攻める聲は轟々として起り、彼の肉を啖はんの絶叫は一時物凄かつたのであるが、彼の脱黨理由書といふ物が新聞に發表されたのに依ると……自分は決して巽伯爵の同志黨に趨く者では無い、永年の立脚地たる民友黨を涙を呑んで去るに至つた唯一の理由は現時政界の現狀に對する一大不平の勃發である、敵黨に對すると同じく自黨に對して抱く不滿足不愉快は到底此儘に自分を政治壇上に置くに堪ぬへのである、で余の心事の誤解から起る一切の非難攻擊を意とせず斷然暫時政界の外に身を置くに至つたのである、が之を以て自分が政治的生命の終焉と見るのは自分を解せぬ人である、自分は或實力を

捉へ得た曉に於て更に政界に雄飛し其抱負を實現せんと努むる者である……といふのであつた之に對する世間の批評は種々で、或は現に巽伯爵の幕下に加はり佐藤男爵と共に黨員の操縱に當つて居ながら變節の制裁を怖れて巧みなる瞞着手段を試みるのだと罵り、或は彼の名望は黨内の嫉視を買ひ中傷讒誣を絶えぬ爲に自ら潔よくする脱黨であつて、日ならず彼は理想の新政黨を組織し捲土重來の活動を見せるだらうと期待する者、世はさま〳〵の取沙汰の中に彼に對する攻擊は大分下火になりかける、が此問題の脱黨理由書を後に影を沒した廣之は容易に行動を世間に見せぬのであつた。

主人幸作は盃を廣之に差して。

『何にしろ斯んな目出度い事は無いテ、妹もな、これで何時ころりと死つても心殘りは無いと云ふ、イヤ女なんテいふものは智慧も淺い代りに慾望も小さな物ぢやテ、そこで俺は然う云ふて聞すのぢや、貴方ほどの男を子に有つてこれ位の事で何するのぢやい、從來の廣之さんは寶を塵溜に埋たと同前ぢや之から巽の御前といふ豪勢の人に發見られて立派な光輝を出さうといふ、榮耀も歡樂もこれからの潮先ぢや、吝な考へは止めて唯ウンと陽氣に貴方に勢をつけい、と斯う云つて叱るのぢやはッはッはゝゝゝ』

と膝を乘出す。

『だけど然うぢやらうが、失禮ぢやけれど從來の民友黨たら何たらいふ、彼な事俺の目から見ると全で小供の惡戯ぢやが、政治だの法律だのと玩弄品が珍らしい間は泣かずに遊びよるが腹が減つたと來たらピイ〳〵泣くほか藝は無い、國の事は偖置いて嬶アの容器家一つ滿足に經營よらん連中ばかしたテ、俺らア議會の敷居跨げた事も無いがお政府の借金の相談には何時もお迎ねが立つ、仲間が一つに寄れア軍艦でも大砲でも直ぐに出來やうと云ふもんぢやない金といふ實力さへ蓄めたら議論も理屈も要つたもんぢやないわ』

幸作は酒の氣と共に何物をも吹飛さんづ勢ひ。

『なあ大野さん、之から貴方も俺達の仲間入りをして先づウンと蓄貯る事ぢや蓄める兵法はなそれ今の貴方の詞ぢや、正義だの人道だのと普通のお交際ぢや埒口は明かんテ、何ぢや俺の說は俺は學問は無いがの、この學問といふ奴が兎角人間を貧乏にしたがるテ、貴方もこれからは學問なぞは仕舞つて置く事ぢやはッはッはヽヽヽ

『イヤ痛快に眞理を穿つたお說です、今になつて見ると私の歩いて來た道が全く徒勞だつた無意味だつたといふ事が合點されるです』

と廣之は冷めた酒盃をグッと煽つて。

『何も彼も打破るのですな、イヤ美しい名に惚れて私は既でに貧乏といふ女と情死する所だつたですはッはッはヽヽヽ』

幸作も之に和して笑つた。

『然ぢや、然ぢや、貧乏も一つの黴菌ちやテ、黴菌らしい物は今度を機會に皆な拂つて仕舞ふぢや』

仲子が入つて來た。

（二）

幸作と廣之の談話に耳を傾けながら仲子は座につくと、我子の顏を喜ばしげに眺めて。

『妾はお前と伯父さんが左樣して仲の善い態度を見るとヤレ〳〵と思つて此肩の荷が下りた氣持ですよ、のう廣之、モウ將來は決して寺田の宅へ疎遠になる樣な事をして此母を困らせてお呉れでないよ』

『イヤ廣之さんの意中は能う解つた、モウお前が焦心するに當らん、お前は寢轉んでこれからの果報を待てば可いのぢや』

『イエ却々、貴兄そんな事を云ふてぢやが妾これからモ一つ大きな苦勞を爲んならん』

と意味ありげに兄を見る。

『オ、彼の事か』

幸作は合點して。

『此席で相談を始めるが可い、何せ云はんと濟ぬ事を獨りで鬱々と考へた所が馬鹿な事ぢや、廣之さんには又分別が有うといふものぢや』

『イエ相談する積で今日呼んだのだけれど、他の事件と違うてな……本統に妾は昨日から壽命を何程縮めたか……』

両人の話振が何か物々しいので廣之は。

『お母様何ですかね、電話でも何か御相談がある樣な風でしたが、仰有つて下さい、何でも構はん仰有つて下さい、私アモウ何が衝突つたつてビクともするのぢや有りません、ナルだけ大い問題が可いですよはッはッはッはッはッ』

モウ酒が七分廻はつた樣子、大きいのを傾けながら笑つて云ふ。

『ほゝゝお前が其元氣だと妾も張合が……』

と仲子はズッと身を寄せて。

『のう廣之、お前は宅の綾を一體何う思ふて居てのかい』

『綾を？彼が何かしたのですか』

『イエ、その何した爲んは二の句目として、お前あの女を信用しとつてかの』

『妻を信用しとるかといふ問題ですか、信用すればこそ長い同棲を續けて居る……と從來の私ならお答へするのぢやが、ナアニあれも習慣ですよはッはッはッはッ』

苦もなく云放つて。

『ねゝ伯父さん、貧乏は黴菌といふお詞でしたが、女房なぞは習慣と一緒に粘り着いてる身の垢ですね、垢も石の苔と同じで裝飾になる場合もあるが多くの場合は煩いものだ、時々磨き落すべきでせうね』

『違ひなしの眞中ぢや、俺は其議論の實行者ぢやが、苔にも錢苔もあれば杉苔もあらうといふもの、どれと定めぬのも勝手の可いものぢやテ』

と幸作は義齒が飛び出しさうに笑つた、仲子は一寸顏を顰めて。

『ほゝほ貴君の樣に苦道樂でも何もならんが……戯談は置いて、のうお前、妾些と綾子の事に就いてお前の耳に入れたい事があります よ』

『お母樣、私は前途の事業といふ事の外には一切頭腦を費はない積です、過ぎた三十年の損失を一擧に回復す工風の外には何事も考へない決心です、ですから家の事や女房の事は私に聞せてくださるな、唯默つて私に隨いて來て下さい、此事は綾にも宣告したのです、それに彼は私に對して反抗を試みやうとして居る、それを說き伏せる閑が私には惜しいのです、只拋棄て近かない、ナニ妻は夫の行く道さへ隨いて歩けばそれで可い、貴方も私に隨いて來て下されさへすれア……』

『さ其點ですよ、妾は無論左樣したいからこそ種々骨を折つたのぢやないか、それに彼の綾は……』

『綾なぞの事は問題になりません、今云つた苦ぢやありませんかはッはッはゝゝゝ』

『其苦の爲にお前の顏が汚れたり大野の家が潰れたりする樣な事に立行く時はお前は何うする決心ぢやの』

『私は强ひて反抗すれば綾でも誰でも犧牲にする事を厭ひません、古い苦を拂落すに過ぎないぢやありませんか』

『廣之、お前はそれ程立派な決心をして居てのなら、あの綾子を一時も早く離緣してお了ひなさい』

仲子の鋭い詞にも廣之は左程驚いた樣子も無い、酒氣に亂れた睛を据ゑて母の顏を凝視るばかりである。

『綾はお前が將來の事業の邪魔をするばかりぢやありません、あの女は大それた不義を爲て居るのですよ』

『不義を？、綾がですか』

流石に廣之も聞咎める。

『不義をする？、不義をするには餘正直過る女ぢやが……其相手は誰ですな』

『あの薫の敎師の榊です』

『榊？家庭敎師の……』

廣之は暫時考へて居たが。

『フムあれも不義が出來る程融通は利かない男と思つたが』
『お前は妾の云ふ事を信用せんかも知れんがの、妾は現場を押へたのだよ』
『左樣ですか』
と廣之は幸作の方に向いて。
『伯父さん、機會は束になつて來るです、私は家庭的にも新しい男になれさうですよ』
其聲には微塵苦痛の響は無かつた。
『怪しからん話ぢやが……事實とすれば一刻も打捨て置けん事ぢや』
幸作は眉を寄せて廣之の顏を覗き込み。
『今になつて俺も云ふが、あの嫁は面白くない點があるテ、それに第一生家がのう』

《二二》

大野家の門前へモウ市中では餘り見受けぬ鐵輪俥が梶棒を下した、俥から下りたのは田舍風の五十一二とも見らるゝ霜置く髪を小締と小きな丸髷に結ひ、鼻筋とほつた面長の仁體な點やら

スラリと高い背格好やらが當邸の夫人綾子に酷似の老女である、色褪めた長の足らぬ被布を嚴格に着て、小風呂敷包を前に洋傘を手に提げた姿態は律義な昔氣質が其儘に現はれた婦人である、車夫に賃錢を拂ふといそ〳〵早足で門を入つて、一寸立止つて四邊を見ると、襟を繕ひながら勝手口の方へ廻はつた。暖い日に背を曝して赤い布の張物に餘念ない女中の濱は足音に振顧くと『あら』と云つて頭の手拭を取りながら。
『入つしやいまし』
と周章内に入る暫時すると『ほゝほ奥樣は疑ぐつて居らつして？』
『だつて突然だもの、欺される樣だわね』
と問答の聲、綾子が顏を出して。
『あら、お母樣……まあ本統だつたわねね』
『それ御覽なさいまし奥樣ほゝほゝ』
『ほゝほゝゝ』
嬉しい笑聲の眞中に挾まれた老女は呆れた樣な顏。
『まことに御無沙汰ばかり……皆さまお變りはありますまいね』

と先づ女中に鄭寧な挨拶、綾子は包みと傘を強ひて取る樣にして寄添ふた。

『ほ、ほお母樣こんな處で……早くお入りなさいませお寒かつたでせうね、お獨りで？』

『イエ寒いと云つてもモウ陽氣が變つて居るからねね、村は梅の眞盛りでね、それは美くしいからあれを坊に見せたら……それから……』

『あのお父樣は御壯健ですねね』

『手紙で知らせる通りピン〳〵して居られますよ、それよりも此方は御隱居も廣之さんもお變りはあるまいね、早く一度來やうと思つて何度も支度してはツイ出られないものだからね』

久振りの話は糸が解けた樣に、モウ土間でそれからそれと續く老女は夫人の實母絹子である、座敷へ入ると。

『あの坊を早く……ほ、ほ、、それより御隱居に御挨拶をして來ませうね、廣之さんはお留守の御樣子だね』

『お両人ともお不在です』

『オヤ、然うかね、久々でお目にかゝりたいと思つたのに御遠方へ？、何時頃お歸りになるだらうね』

『……あの何時とも……お母樣は此頃高輪の方へずつとお泊りになつて居るのですよ』

『寺田さんの御別莊？、左樣かね』

と絹子は奥の方を見て。

『あの坊は居ませうね、早く呼んで下さいよ、永い間遇はないから妾モウ彼子が見たくつて見たくつて……』

『二階で遊んで居るのでせう、今濱が呼びに參りました』

『お前は何處か惡いのかね、顏色が大變……眼の中も赤い樣だねえ』

綾子は母の覗き込むのを避ける樣にして。

『イエ何もありません』

『それなら可いけれど今年の寒さは別の樣だつたからねね、冷込みなぞしては可ませんよ』

云ひつゝ、風呂敷包を解く。

『何かお土產をと思つたけれど東京の中央へ持て來られる物は無しねえ、御隱居へは手製だけれど香ばしいから之を上げて下さいよ』

と香煎の袋を出す。

『之は坊にだつてお父様が例の細工物ですよ、それから之を忘れずにお前に渡して呉れつて喧ましい傳言でね』

『お父様が？、ほ、ほそんな心配なぞなさらないでも』

『此品ですよ』

と白紙の折つたのを手に渡して。

『お前今年三十三の大厄ですからね、お父様は此間からその靈府に御祈禱をして下さつたのですよ、恰度七日の間毎朝暗い内に拜殿へ出て入つしつてね、それは丹誠を籠めて居られたのだから勿體ない事をせぬ様に大切に身に添けてお置きなさいよ』

綾子は話を聞く中に我知らず涙ぐみ、父の情籠る神の靈符を押戴いた。

（二三）

老齢の父が此寒空の曉かけて神前に祈誠を凝した靈符と聞いて綾子は子を思ふ親の慈悲を心の中で泣いて居る、絹子はまだモ一つの折紙を取出して。

『それから此靈符は廣之さんに進げる様にと云つてね……お父様は此頃の東京の物騒な噂を聞いて大變憂慮ふて居られるのですよ、それに如彼な一徹な氣性だもんだからね、廣之さんの黨の人で今度出來るとか出來たとかの黨の方へ内通したり降參したりする者があるといふ事を聞いて、廣之さんに限つてそんな事は無いから安心だけれど、黄金を撒いたり種々な手段で誘き込むのが敵黨の術だから、萬一……物には魔が魅すといふ事があるから、そんな事も無からうけれど身の守護に肌に添けて貰うんだと云つて、お前のと同じ様に一生懸命お祈禱をなされたのですよ』

綾子は俯向いて默つて居る。

『身體は壯健だけれど何しろあのお老齢だからねね、近頃はお前の事やら廣之さんの事が無性に氣に懸ると見ねて云出されたらそればかり……寂しくなるのだらうねえ、妾だつて忘れた事は無いけれど』

『……憂慮ばかりかけて濟みません』

『ほ、ほ、心配はお前にこそ……何時も彼んなにして送金つて貰ふばかりでねね、何程糸の助力になるか知れません、此方も物費りの中から普通の心配ではなからうと思ふと……』

糸子といふのは綾子の妹である、綾子は母の詞を遮るやうにして。

『あれ位の物を……糸ちやんは相變らず會社の方へ』

『オ、糸の話もあるのだよ、彼女はお前の知つての通り變つた氣風だがらね、外聞も何も構はないで一生懸命になつて勤めるお蔭で今度は大勢の女工の監督になつてね、貰ふ給金も以前より善くなりました、その事を一番に話して安心させやうと思つてたのに……話が澤山で混み合うのねほゝほゝゝ』

母が笑へば姉も嬉し氣に。

『それは糸ちやん大手柄ですこと、何時も云ふ事だけれど紡績なぞへ勤めて……如彼な氣の勝つた女だから今日迄怪我過失も無いのだけれど、妾妹の事を片時忘れた事は有りませんよ妾モウ少し働きがあると思ふ樣に手助も出來るだらうに……綿屑に塗れた彼妹の夢を始終見るのですもの……』

勞働に身を委ねて貧しい一家の柱になつて居る僅た一人の妹に同情の涙一滴。

『ほゝほ偶に來てお前を泣かせては……喜んで貰ふ積りですよ、それからお父樣の話では今度はいよ〳〵廣之さんの黨の勝利になるらしいから長い間の苦勞も甲斐があつたといふもの、

お前も定めて嬉しいだらうと仰有つてね、何とかいふ國風を詠んで……雪を凌いだ松の色が何とかいふ歌を短冊に書いてね、それから……』

『お母樣』

と綾子は其話を聞く苦痛に堪ねぬので。

『あの……まだ何方とも判かんのですよそれは』

自分にも判らぬ曖昧な事を云ふ。

『左樣かね、でもお父樣はお前や廣之さんが何なに喜んで居るか夫婦の晴れた顏を見て來て呉れと仰有つて……』

詞は一々に胸に釘打たるゝ思ひである、夫が變心して脫黨の事を聞せたら一徹の父は何と云つて怒られるだらうか、自分が今の身の難義を打明けて話したら優い母は何なに嘆くだらうか、夫の事も自分の事も齡老いた両親には決して知らせたくない、けれども遂に隱せぬ夫の淺ましい所業は、新聞や人の口にのつて都離れた靜な村にも傳はらう、夫から自分も……姑の意中は夫に從はぬ嫁を放逐たい一念が凝つて昨日今日の虐待である、自分は何にかして夫の心を飜へして見せる決心で居る、其志を遂げぬ中は死んでも此家は出ぬ覺悟を定めて居る……が姑

の虐待には堪ねられても夫の愛に離れた妻の身の立場があるであらうか、半世の事業たる民友黨を抛つた夫に、子まで爲した妻を捨る冷たい酷い心が動いた時、恐ろしい讒誣中傷が其隙に乘つたら……其時の我身はいかに成行くだらうか、思ふても心の昏む悲を両親の家に運んだ時……夫婦の喜び顔を見て歸れ？、我子の運を神掛け祈る親達の、慈愛に甘い詞は今の身にイツソ恨めしい、と綾子は見せられぬ涙の顔を深う俯向る。母親は氣遣はしげに低い聲。

『……お前窶れが目立つ上に……何か屈托がある樣子だが、妾に隱してる事があるのぢやないかね』

膝を進ませる時女中が入つて來た。

『奥樣あの旦那さまから電話でございます』

『旦那樣から？』

とスグ立上つた綾子は、顔に憂ひの色も消ねて詞も冴々と、夫の聲聞れる電話室へ急いだ。

（二四）

『ハイ　妾綾でございます』

電話機の前に立つた綾子は、我を呼ぶ聲の正しく夫である事を確めて受話機を堅く耳に當てる。

所在を知らさず家に歸らぬ夫の振舞の何時まで續くことか、政變の鎭まるまで人の指彈のうしろめたく、身を隱す所存とは察せらるゝのであるが、連添ふ妻に何の秘密ぞ、此前の歸宅に初めて脫黨の事を明すと共に、今日から生れ變つた別人の自分には一切の諫言立無用、唯夫の進む方向へ默つて隨いて來いと酷い詞の袂に絶つて、種々に意見を盡した、それを耳にも止めずフィと外出の後は今日まで何の消息も無いのである、その居所を探す事は反つて夫の心に逆らうのであるから、今は時機を待つより外に手段は有るまいと、煩悶と悲愁の宿に辛い寂しい起臥を僅に怜悧い薫といふ慰籍と、封建時代の忠義な家來に見る樣な床しい志操で誠實に仕へる俥夫音藏の奉公振りに勵まされて、遠征の留守もる妻の心も斯か、姑が邪慳な虐待にも堪へ忍

んで切ない毎日を送るのであるが、心頼みは夫の思慮分別を覆ふ雲霧の自ら吹散る日、晴れた姿を迎へる時、其時は屹度近うに來るに違ひない、迷ひの夫、墮ちた夫、それは自分の信ずる夫では無い、愛を捧げた眞の夫大野廣之といふ正しい人格の蘇へる時は屹度近うに來るに違ひない……。

日夜の情緒は其傍に飛ぶ夫からの電話は善か惡かの考へよりは先づ胸の鬱結解ける心地で、聲漏らすまじと犇と寄る。

『留守は何事も無いか……俺は近い中に歸る……それから家庭教師の榊直也、あの男は都合あつて斷わる、其處置をとつて呉れ、解つたかね』……と耳に入つた夫の聲、綾子はよろ〳〵として倒れかけた身體を傍への柱で支へた。

『榊さんを……斷われと仰有るのは……來て頂くのを斷るのでございますか』

『然だッ』と鋭い聲……怒りの顔が其處に見えるやう、綾子の器械に觸れた手はブル〳〵と震へて、其顔は赫と燃える色。

『榊さんをお斷わりして……薫は何するのでございます、あのお方に今突然そんな失禮な事を……第一薫が可愛想でございます……其事は貴郎一應お歸りの上で』

『お前には出來んといふのか、左樣だらう、可しい、それではお母樣に其事を委任する、お前は決して容喙する事は出來ないぞ』激した夫の聲は太く響いて耳に痛い。

『イエ薫の身の上の大事です、妾それに就て申上げる事があるのです、お歸りの御都合にまゐらねば妾が』

リ、ンと鈴が鳴つた、電話は向うから切れたのである。手から取落された受話器は板を打つて宙に下る、綾子は袂を顔に覆ふて器械の上に泣き頽れた。

『お母樣は此室だい、ソラ電話を掛けて居るんだ、おばあさん所は田舍だから電話はないだらう、電話かける事知らないだらう』

薫が絹子の手を引張つて來た、そして突然電話室の扉を引開けると。

『アお母樣又此室で泣いてらア、お母樣ッ』

『泣いて？』

と絹子も驚かされて覗き込む。

『まあお前斯んな所で何をして居るのだよ』

仰天して近寄ると。

『お、お母様、妾に構はないで早く……日の暮れない中に歸つて下さいませ……お願ひ……妾のお願でございます』

『厭だい、厭だい。お母様厭だよ僕ア、今夜はおばあさんは泊まるんだせ、ねえ、今左様云つたらう、今夜も明日も居るんだ、明日は僕が榊先生と勉強する所を見せる約束だもの、ねねおばあさん、誰が歸すものか、約束を違へたら可んだらう、お母様厭だよ僕ア……』

綾子が母に歸れと云つた詞を聞咎めて薫は懸命に爭ふた。

《二五》

久振りに遙々玉川在から訪問た母親の、目に入つても痛くない孫の薫に取付れて一晩は泊ると云出したのを此方から早く歸つて呉れと急き立る辛さは譬へ様もないのであるが、夫の電話では榊敎師の處置を姑に任すとあるからは、今夜にも姑が歸つて來られるのであらう、そして榊敎師の處置といふのはスダ自分の身に係つた事である、姑の酷い讒言は夫の心を動かして妻の貞操を疑ふに至らしめたのであらう、それでなければ今突然にそんな問題が起る理由が無い、

で姑の歸つた今夜には又情ない葛藤が起るのは知れた事であるから。夫を見せて何も知らぬ母に淺ましい思ひを爲せたくない、妹の働きで折角生活の難義も薄らいだ、老の両親が平和な現在に新しい苦勞をかけたくないのである姑の歸らぬ中に母を返すのは悲しい辛い自分の心盡しである。

『お前の都合で歸るが可ければ歸りますがね此儘去つては妾も懸念で詮術が無いから、どんな憂慮が起つて居るのか概略でも聞かうぢやないかね、それでないと……』

母親はモウ胸を堅くして。

『それでないと歸つてお父様にお家苞が……喜び事でも聞いて歸る様に思ふて待つて居てのだものねね……』

綾子は強ひて笑顔を見せる。

『ほ、ほそんなに案じて頂く程の事ぢやありませんから……』

『だけど今も坊に聞くと、御隱居さんとお前と……何か口論でもあつたやうな様事だし、それにお前は現に泣いて居てゝはないか……嬉しい顔を見て歸りたいのは當然だけれど、悲しい心配事も隱さずに云ふてお呉れでこそ親の心はイツソ嬉しからうぢやないか』

慈愛の溢る、詞には遂に隠し切れぬ涙である。

『お母様……偶に入らつしつたのに斯な事態を見せて濟みません、全く眞の僅かなことですけれど……お氣に障つた時スグ謝罪れば可ござんしたのを……妾が惡いのです、今夜はお歸りの樣子ですからお詫をする積です、それで……そんな折にお母様が居て下さつては御心配を掛るばかりですから……』

『それなら妾も共々お詫をして上げやうぢやないかね、恰度來合せたのを幸ひに……何な事か知らないけれど』

何な事にも之が斯々と打明けられる仕義ではない、無理難題も事によれ不義の密通の疑ひかけられたと淺ましい忌はしい口にいふさへ穢らはしい詞で、律義眞法な老の両親が驚かされやうぞ、綾子は母の詞を打消すやうにして。

『お母様にそんな事をさせては濟みません……又そんな事をしたら反て變に取られていよ〳〵難かしくなりますから』

『それも然うかねね』

と絹子はホッと息をつく。

『直に親が出る樣にとられても惡いし、お前が左樣お云ひなら此儘歸りますけどね、ねえお前』

『は』

『今更斯な事を妾が云はいでもの事だけれど、去年御隱居がお國元からお越しになる迄は、何時來て見ても當家の内中が面白そうに睦じやかな風が見ゐて寄せて貰ふ妾達も氣が暢々して嬉しかつたのに……御隱居が居らつしやる樣になつてからは……、尤も妾は二度か三度しか伺ばないのだけれど、何だか斯う……お前の樣子も變つた樣だし、來て見る度に氣の所爲か漸次に窶れが見ゐて……』

「ほゝほそれは齡の加減ですよ』

と綾子は滅入る心を强ひて勵まして、態と輕い調子で云つた。

『イゝエ齡が左樣急に取るものでは有ません、精神の疲れは齡よりも遙か毒だからねね、それは妾達と違つて御隱居は物堅いお國の方だし。萬事こちらの風とは變つて……御氣性の難かしい點もあつてお前の身にとつては苦勞も隨分あるだらうと、妾それを思はぬ日は一日もありません……併し御隱居は然うでも廣之さんは外間であれ程に賞讃られる方だけあつて家庭

の事も能くお判りだらうしお前の苦勞も知つて入らつしやるのだから、何といつても女房は夫が杖柱だからねね……杖にさへ縋れば辛い山阪も登るに苦になるまいといふもの……假令何な無理非道……酷い道でも辛抱を仕遂げれば安樂な所へ屹度出られるに違ひないのだからね、お前も種々辛い事もあるだらうが廣之さんの目的が立ちかけた瀬戸際だからモウ暫時我慢してねね……』

母が姑への苦勞を察して、それと云はずに慰めの詞は、夫の現狀を知らぬ道理である、杖柱にも離れかけた悲しい仔細を打明けたら老の胸は潰れやう。

『お母様能う解つて居ります、妾どんな……何な辛抱も致しますから決して御心配下さいますな、お父様には萬望能く繕らうてお母様から御安心の行く様に』

黄昏頃を裏門から、絹子は雇ひ俥に乗つて密と歸つた、離さぬといふ薫を賺して、連立つて見送る母の後影は涙と夕の色に消ゐる。

《二六》

麗かな朝日影を椽の頽れた古帽子に受けて、例時の木綿紋付の羽織に小倉袴、齒の滅つた下駄を高く轟かせて、悠々と大野邸の門前へ現はれたのは家庭教師の榊直也である、太い洋杖を玄關の敷石にカチリと云はせて。

『頼まう』

と怒鳴るやうな聲、女中が障子を明けて。

『あら榊様でございますか』

『ヤ濱さんはッはッは、、、早いのに驚いたかね』

女中の怪しんだ顔は、今日の日曜日に此人が來たといふ事ばかりではないらしい、直也は無頓着。

『薫君は起きてるだらうな』

『ハイ……まだお寢みになつて……あの今日は……』

『今日は日曜日だ、家庭教師の來る日ぢやない』

と高らかに笑つて。

『薫君の友人が遊びに來たのだ、まだ寢て居る？、それア可ん、日三竿ぢや、春眠曉を覺えぬ少年があるものか、どれ俺が起して遣らう』

直也は玄關に上つた、女中は困つた顏をして。

『あの……暫時應接で……』

『應接で待て？ウン君が起して來て呉れるか、諾、スグ引張つて來て呉れたまへ、今日は突然に喜ばして遣るんぢや』

火鉢の傍へドッカと坐つた、その無邪氣な態度の後姿を眺めて、女中は當惑の顏をいよ〳〵雲らせて奥に入つた。

綾子は今朝は勵しい頭痛の爲に枕が上らなんだ、昨夜遲く歸つて來た仲子は果して榊教師謝絶の問題を提出し散々綾子を泣かせた上、今日の日曜日を幸ひに仲子は自身に榊の宅へ出掛けて明日からの出張を斷はると云ふのである、綾子は理を正し自分を曲げ、爭ふたり謝つたりして姑の無法を止めやうとしたのであるが、頑として聞入れぬ仲子は『廣之の命令です』の一點張

で、其上楯つけば淺ましい疑ひを增させるばかり、それは遂に他人の名を傷ける破目にも立至るは必定と、姑の爲るに任せ自分は夫の歸宅を待つ決心をしたのである。

寢室の椽にバタ〳〵と足音して。

『奥樣……奥樣』

とお濱の聲、今日の情ない日を見まいとする樣に蒲團の襟深く顏を埋めた綾子は此聲に半ば身を起して。

『何、何か用事、お明けよ』

『奥樣何いたしませう、あの榊樣が入らつしやいましたよ』

『エ、先生が？』

『ハイ、あの今日は日曜だけれどお坊樣のお友達の資格で遊びに來たから、早く呼んで來て呉れと仰有つて』

綾子は急いで床を離れて。

『薫は』

『お二階でございませう』

『先生の入らつしやつた事を知つて？』

『イエ、妾……夜前御隱居樣があの方のお住所をお尋ねになつて、今日は斷りに行くのだつて仰有つたのを承はつたものですから』

『まあお前にもそんな事を……お母樣は』

『まだお目覺になりません』

『まだ？』

姑の寢た間に榊に面會して、事情を打明け穩便に謝らう……と綾子は起上つた。

『薫には知らさずに置いてお呉れ、妾お目にかゝるから』

と手拭を提げて椽に出た綾子は何を思つたか急に又座敷へ入つて障子をピッシャリ閉めると、手拭を顏に疊に俯伏した。

今日まで二年の間榊教師がイカニ薫の爲に赤誠を傾けて盡して呉れたか、普通ならぬ不自由の身体に深い同情を寄せて教師の任務の外に暖かい慈愛をかけ、親同胞も及ばぬ盡力は感謝に詞はない位の杖に縋つて大きくなる不具の身は繼木の枝と同じだらう、育てる苦勞と雨露の惠澤は幾層倍に止まらぬ、それを獨力に引受けて文字を教へ智慧を啓いて怜悧い子と云はるゝ迄に

して呉れたのは悉皆其人の力である、政治に關係はる人を父に有つて薫は眞に父が慈愛の味を知る機會が少かつた、それで一層に我を愛む榊教師を慕ふた、教へ教へらるゝ師弟の間は教室を垣間見しても涙が零れる程有難い、家庭にばかり引籠つては發育を害ふからと、授業の際には郊外の運動に手を引き足を扶ける介抱は爲やうとして出來る情義では無い。

その榊教師に向つて今日から斷はる？そんな事が人間の口から何うして云へやう、まして其原因は？。

事の原因を打明けて自分の眞心を告げて賴んで斷はらうと綾子は一旦は思つたのである、……が彼は人の妻たる身分と、淺ましい疑ひの中に置れた今の立場を考へて、それも出來ぬ心の快惱に、聲を呑んで泣くより外を知らぬのであつた。

『あれ坊樣チョット待つて頂戴……お母樣に伺つた上で』

『厭だッ、お母樣に伺はないたつて構うもんか、放して、コラ放さんかッ』

椽端に劇しく爭ふ聲は薫と女中のお濱である。

（二七）

綾子は障子を引き明けた、其處には表玄關の方へ走らうとする薫を女中の濱が捉まへて退け退かぬと爭ふて居る、綾子の顏を見ると薫は激した調子で。

『お母樣、僕今榊先生が來られたのを見たから行うと思ふと濱がお母樣が叱るから止せつて放さないんだもの、先生が來られたらお迎へに行くのだらう、ね、お母樣、行つても可いだらう、ソラ見い、行くのが當然だい、放せッ』

子供力も一生懸命にお濱は突かれて蹣跚としたが捉へた袂をまだ放さぬ。

『奥樣、でも今御隱居樣がお會ひになつてお話中でございますから』

『お母樣が？……』

綾子は嘆息をして薫の手を確と握つた。

『お前にはね、お母さんが話があるから此室へお入りなさい、今玄關へ行くとおばあ樣が叱つてだからそれで濱が止めたのです、さ、穩和しくしてね』

薫は首を振つて。

『僕先にチョット先生の所へ遣つて下さいよ、今日は日曜だから先生屹度何處へ僕連て行く積だい、ね、お母樣、チョット遇つて來てからでも可いでせう、ね、ね』

と杖を頼りに駈出さうとする。

『これ薫ッ、お前お母樣の云ふ事を聞きませんか、此室へお入りといつたらお入りなさい』

叱られて忽ち悄氣る。

『……用が濟んだらスグ行くよ僕、可いでせう』

お濱は斯んなに先生を懷しがる子供を突然に引離すとは何といふ酷い所業だらうかと仲子の腹が合點行ぬ、氣難かしい老人と頑是ない小供の間に挾まれた奥樣がお痛はしいと、眼前の悲劇に涙ぐんで引下る。

『薫、お前はね、何も知らないけれど……お前モウ榊先生に敎へて頂く事は出來ないのだよ』

薫は默つて母の顏を凝視て居る。

『突然に斯云つても解るまいけれどね、先生は今日からモウお越しにはならないのだから……

……』

『フ、、、』
と薫は笑つて。
『お母様はあんな事を云つてらア、そんな嘘を吐いて僕を欺したつて……』
『お母様は嘘を吐く事は嫌ひです、榊先生はお廢めになるのだからね……お前其積りでね、又他の先生が……』
『厭だい僕、他の先生なぞに誰が習ふものか』
と強い反抗の意氣を見せたが又無邪氣な笑顔になつて。
『フ、、、嘘だい、お母様嘘は嫌いだつて嘘を吐くんだもの、僕チャンと嘘の證據があるんだから』
『證據？、證據つて何があります』
『先生昨日だつて何も云はないもの、そして明日から一週間の學科割を拵へちやつたもの』
『……』
綾子は何とも答へる事が出來なかつた。
『嘘だ嘘だ』

と薫は急に元氣づいて勇しう叫んだ。
『先生今度の土曜日に上野公園へ樂隊聞きに連れていくつて約束したんだものほら……お母様嘘だい、フ、、、先生は一度だつて嘘を吐いて僕を欺した事は無いから』
見事に嘘を看破つたといふ誇りに薫は大勝利の顔をして。
『ア、僕吃驚した、お母様は惡いねえ』
苦しい胸を抉る邪氣ない詞は遂に涙の堰を破る、母子は堪らず横を向いて。
『それはね、昨日迄はまだ先生御自身にも判らなかつたのだよ、それがねえ……あの急に遠方へ入らつしやる事になつたのだから』
と嘘でないのを嘘で隱して、稚い者の心を傷るまいと、母親は辛く一方の血路を開く。
『先生遠方へ旅行？お母様、それ眞實？』
薫の美しい顔は見る〳〵不安に曇る。
『僕先生に問ふて來るッ』
云ふが早いか杖をも拾はず、薫は障子やら壁やら柱やらを力に支て玄關の方へ。
『これ薫、お待ちなさい、今お前が行つては』

と綾子も續いて駈て行く。

(二八)

今日を春の第一日かと暖い日影麗かに、濕んだ蒼空の調子はモウ花鳥の舞臺に似合しくも仰がれる、若草の萠ゆる郊外に彼の少年を率ゐて、雲雀と共に歌ふ無邪氣な聲を樂しまんか……。榊直也は愉快な希望を抱いて家を出た、清爽かな朝の風に頰髯を吹かせて、太い洋杖を打振りながら例の微吟興面白く、長い市中を電車にも乘らず小石川へ來たのである。

今日の日曜を誘ひに來る事は云ふてなかつた、突然に現はれる我姿を迎へてイカニ薫少年が喜ぶだらうか……主人公の事情の爲に家庭の平和を缺ぎ、夫人は信ずる主義の爲めに夫と鬪ふて居ると見た、多年の志を拋つて忽ち敵黨に降るが如き人物とは自分は廣之を信ぜぬのであつたが、脫黨は既に公表された事實だから、變節を罵しらるゝ政客の妻たる位置はイトせめて切ないものであらう、それらの面白からぬ家庭事情が薫少年の上に何な影響を與へるであらうかイナその影響を防ぐのが家庭敎師たる自分が今此際の努力である……、途中も思ひを可憐の少

年の上に勞らせて歩いた、門を潛る時には極つて迎へに出る、今日は不意だから知らずに居るだらう、來たと聞いたら飛んで出るだらう?。

應接室に通された直也は、玄關に立つまでの思ひを繰反して、今朝に限つた變つた待遇に暫時呆れ惑ふたのである、二年の間に嘗て斯んな事は知らぬ、去年國元から上つたといふ廣之の老母には餘り親しく物も云交した事はないのであるが、其他は主人夫婦を始め伸夫女中まで親しい馴染で、自分の氣風を知つた人々は裏表ない心を見せて呉れた、從つて毎日の訪問に客扱ひの應接室へ通されたのは之が始めてゞある。

『一體何したのか』

稍待てど一向に薫の足音もせぬので、張合扨の形で少々不平を覺えた直也は斯く獨語つて起上つた、彼は氣風が面白いので大好きな伸夫音藏を部屋へ尋ねて、腑に落ちぬ今朝の樣子を質さうと思つたのである、其時。

『お待せを致したの』

と云ひつゝ現はれた人がある、直也は振顧くとそれは廣之の母仲子であつた。

『ヤア御老人ですか暫時……今朝は薫君は何して居るのですな、好い日曜ですから此通り兵粮

を腰に釣下つて誘ひに來たですよ、はッはッは、、、』

鬱陶しかつた思ひを哄笑ひに散じたといふ風、仲子は其人をジロリと見て座つた。

『薫は都合で昨日限り稽古の方を廢める事にしましたよ』

『何ですか』

と直也は我耳を疑ふて問返した。

『突然にお氣の毒ぢやが當方の都合での今日實は妾が貴方の宅へお斷りに出やうと思ふて居る所でしたよ、お出でだから恰度可い鹽梅ぢや、何か左樣思ふて下さい』

『斷る？、斷るとは僕の事ですか』

『ハイ來て敎へて頂くのをな』

『廢めるとは薫君の敎育をですかッ』

直也の聲は鋭かつた。

『皆な當方の都合でな』

『此方の都合で？』

と直也は威丈高になつた、袴を摑んだ手は憤りに震へて居る。

『御老人ッ、貴女は大野廣之氏の母堂ですな、先づそれから聞かう』

『ハイ妾は廣之の母ですよ』

『フム、帝國の選良大野代議士の母堂？、御老人、貴女の其態度はそれァ何ぢや』

仲子は平氣で居る。

『苟も代議士の母とも有る貴女は禮義の何物たるを解しないのかッ、先程から僕に對して何といふ無禮を爲れるのか』

『ほ、ほ貴方は大層怒つてぢやが、妾は何も失禮ほ爲ん積りですよ』

『お默んなさい』

應接室も搖ぐかと凄い大喝一聲。

『僕は可い、僕は雇はれた人間だから雇はぬと云へばそれ迄だ、神聖な敎育に對して侮辱を加へらるゝと許しませんぞ』

火鉢を傍に突遣つてズッと出る、仲子は腕を捲つた恐ろしい權幕に、流石に氣を呑まれて後へ退る。

『大切な子供の敎育を一任した家庭敎師の囑托を解くそれが辭令ですか』

『主人の命令でな』

『フム其御主人に遇ほう、情に感じた爲には一諾二年の責任を盡した、理に外れた事に用捨をする榊直也ぢやない、大野廣之君に面會しやう』

(二九)

廣之に面會しやうと怒鳴つた直也の詞を。

『主人は不在ですよ、それで妾が代理を勤めます』

と仲子は輕く受流して。

『貴方は何かの、モウ薫に敎へに來て頂かんでも可いと斷つたのが失禮と云ふてのぢやの』

『敎へる敎へぬが問題ぢやないです、貴女の樣な常識の缺げた不具者に論は無益ぢやが、廣之君の代理と仰有るなら云はう』

直也はモウ沈着た態度で。

『僕は當家の爲に俥夫や下男に雇はれた者ぢや有ませんぞ、勞働に使役ふ奉公人を罷めるにも

それ相當の作法はある、それに何です、大切な子供の敎養を托した家庭敎師の職務を解くのに、何か僕の方に過失があつて其制裁とでも云つた風に、何等の交渉もなく突然……然も僕の方から來たのを幸ひに?、其理由としては只當家の都合だ……そんな不法な手段に屈從して引退る僕と思ひますか、イヤこの世界に於てそんな不法不理暴戾殘酷な振舞をする奴を默て赦す僕と思ふですか』

疊を叩いて犇々と攻め蒐る。

『僕は渺たる一介の書生ぢや、けれども僕が薫君に行ふたところの敎育は恐れ多くも聖勅を基礎とした智德修養の活學問ですぞ、責任を有て一人前の人間を作り上る事業ですぞ、僕は其精神を以て薫君に臨んだ、未だ嘗て一日も其心を忘れた事は無い……』

直也は精神を傾けた二年間の事業を回想して感慨に堪えぬのである。

『それで薫君の敎育の結果に就て非難があるのならば僕はいかなる責をも受ける、罷めるとあるのなら直に辭する、それでなく何の理由をも明かにしないで只突然に都合で廢める?、且つ敎育といふ神聖な事業を侮辱した不作法千萬の態度は決して許す事はなりませんぞ』

『ホウ貴方は面白い事を云はれる、許さんといふと何なりますのぢやな』

直也は言下に叫んだ。

『僕を罷める事を許さんと共に、薫君の教育を廢する事を許さんのです』

『ほゝほいよ〳〵可笑しな事を云はれる、罷めるのは當方の勝手ではないか、一度お頼したからと云つて貴方の一生を當方で養ふといふ理由はないからの』

『無禮の事を仰有るなッ』

嚇となつた直也は固く握つた拳を今にも活動させんず氣勢。

『僕が罷めんといふのを誤解して報酬を貪る者と思うのですな、老人に對する敬意を拂つて居れば何處までも侮辱を……、貴女の如き者は相手にならぬ、主人が不在なら夫人にお目にかゝらう、僕を罷める事と薫君の教育を廢する事を許さんと云つた深い意味を説いて聞せる』

『家内に？、ほゝほゝゝ、深い意味とは何か知らんが、それは綾子には貴方を罷める事の出來ぬ弱點があるかも知れんがの、彼女は廣之といふ夫のある身分ですよ、夫の不在を幸ひに子供の先生と……ほゝほゝゝ、詰らん噂を立てられては當家の迷惑ですからの、それはお斷りをします』

『何』

『齡を取ると長坐が辛くてな、又御用なら廣之の在宅の時に、妾はこれで失禮します』

と仲子は立上る。

『お待ちなさい』

直也も立上つてツカ〳〵と進むと、仲子の前に立塞がつた。

『今云はれた事をモ一度聞う』

『妾を何かする積ですかい』

『此直也の名譽を回復する迄は此席は一歩も立せぬ積だ、お座んなさい』

『座らうと立うと妾の家だよ、亂暴をされると承知しませんぞ』

『此方のいふ事だッ』

激昂した直也は腕を伸して強ひて去らうとする仲子の袂を捉まへると、強い力は老人に徹へてヨロ〳〵として尻坐に倒れた。

『あれェ……、誰か來てお呉れッ、亂暴者だ』

『僕ァ決して亂暴はせん、お起きなさい』

仲子の叫ぶ聲は家中に聞えた、併し此與疎い聲に駈付る筈の綾子も女中の濱も倅夫音藏も、皆

な先刻から爭論の漏るゝ次の室へ來て居たのである、綾子は身を跪く薫を押付ける樣にして、皆を制して始終を聞いて居たのであるが、姑の救ひを呼ぶ聲に薫を音藏に渡して急いで其室へ入つた、仲子はモウ起上つて隅の方に靑くなつて立竦んで居る。

『オ、奥さんですか』

綾子は其處へ坐つて手を突いた。其顏には血の氣が無い。

《三〇》

綾子は疊に手を突いて俯向いて居る、直也も仲子も突立つた儘、颶風の後の物凄さである。

『まことに……何と云つてお詫を致して……』

『これッ、お前は引込んでおゐでなさい』

綾子が微かな聲を壓潰す樣に叱つて、唇邊をビリ〳〵顫はせた仲子は屹と直也を睨めつけた。

『さ、早く貴方は此家を出て貰はう、老人を捉まへて亂暴を働くやうな、恐ろしい狼籍者は……』

『お母樣ッ』

姑の立つ前へッと膝行つた綾子は取縋るやうにして凝と見上げる、丸髷はガックリ傾いて鬢はそゝけて、頰の落ちた寂しい橫顏を眺めて直也は默つて腕を組んだ。

『お母樣……みんな妾が惡いのです、榊樣が今日までのお骨折は親の妾共が及ばぬ御苦勞をかけて居るのです、そのお方に對して失禮な事を仰有るのだけ……萬望……お母樣……みんな妾が惡いのでございますから』

『ほ、ほお前さんが先生の爲に謝るといふのかい、それは然うだらうねえ』

と嘲ける樣に云つて。

『お前達は一緒になつて妾を云籠めやうとするのだね、本統に呆れて物が云はれぬ、それだけ猛々しうなれば……』

仲子は此上何を云出すか知れぬ、綾子は觀念の目を閉つて、肩を落してペッタリと坐つた。

『お母樣、妾御存分の御處置を受けます……妾離緣を……離緣を頂くが可しければ』

『イヤ奥さん』

此時迄默して石像の如く突立つて居た直也は口を開いた、鋭い聲で綾子を呼んで。

『貴女はそんな焦慮を爲さらんでも可しい、僕には當家の家庭事情が能く了解されました、僕は今改めて家庭教師免職の辭令を受取りませう、貴女から御主人へ其事を傳へて下さい』

凝然と座つて居た綾子は決心示す眞青の面を上げた、嚙んだ唇には血が浸んで眼は紅く冴にて居る。

『榊樣、妾お願ひでございます、今貴方にお別れしたら……妾の居ないよりも悲みませう、御恩を忘れた失禮は妾から……妾がお詫の手段を致します、全く誤解でございますから……』

『僕と貴女の間に醜關係があるといふのか』

と直也は仲子を睨んで無頓着に云放つた。

『其誤解を破つて僕の名譽を償ふ爲に貴女は重大な決心をしたのだらう、而しそれは可けない貴女は廣之氏の夫人たると同時に薫君の母ですぞ、一時の感情に走つて永遠の悔いを遺しちやア可ん、弱い心を起さずに賢妻良母の大事業に御奮闘なさい、飜つて僕ア』

天井を仰いで彼は苦しさうな息を吐いたがそれを、笑ひに紛らせて。

『僕なぞア唯僕限りだ、はッはッは、、、、そんな殘酷なお詫は要りません、イヤ今日は實に

……美の極致と醜の極致……左の眼に惡魔を見て右の眼に佛を見た、奥さん、他人の妻を盜む者と罵られた僕ア愉快にお暇しますぞ、貴女の美くしい情義……尊い犧牲の精神に感じた僕ア一切の苦痛を忘れて歸りませう』

直也は釘にかけた古帽子を取つた、それを腋下に挾むと屹と仲子の方を振顧いて。

『御老人、貴女は惡魔と呼ぶべきぢやが……當家の平和を望む僕ア遠慮を爲やう、家庭教師榊直也は貴女の御希望通り免職のお受けをして引取りますぞ、而しぢや、弱い者を苦しめる奴ア僕の仇敵ぢやから、早く改心なさらんと、今度は人道の布教師となつて貴女を教へに來ますぞ』

仲子は口の中で何か呟いて居たがモウ相手にはならなかつた。

『ヤ奥さんお別れします』

と云つて襖に手を掛けた直也は、一寸考へるとツカ〳〵と後戻りして、腰を探つて帶に釣下つた紺の小さな風呂敷包を取出して綾子の面前へ置いた。

『奥さん、これア薫君への置家苞ぢや、今日は天氣が好いから連出して何處か、遊ばせて遣らうと思つてね、例の榊流の握り飯の大な奴を提げて來たが、辨當は要らん樣になつた、はッ

はッは、、、、僕が來んとなつたら寂しがるかも知れん、此飯を遣つて下さい、それから敎室に僕の書類が五六冊と書いた物がある、あれは皆僕の記念にして呉れと……云ふて下さいウムそれから算術を少し勉强する樣にな……一體の頭腦は寧ろ進み過ぎる位です、怪我をさせぬ樣に賴みますぞ……ヤ失敬ッ』

彼はさつさと出て行つた。

《三一》

直也は大跨に下駄を鳴らして大野邸を出た、而して門傍の櫻の下を通る時一寸振顧いて供待部屋の横手の竹の透垣の邊りを見た、可愛らしい少年の姿は敎師を送迎への爲に例時も此勝手口から現はれるのである、大い洋杖を强く振つて直也は足下の柴生を毆りつけると、『ヱ、ッ』と自分を叱るもの、如く獨語つて再び歩み出す。

大野の邸宅を出て二丁程行くと植物園への近道で緩い勾配の阪がある、朝の光は化け榎の名ある老樹の枝を通してチラ〳〵と輝いた、車も通れぬ此界隈は晝も森閑と物寂しい、藪蔓を横に

貫いて榎の聳つた暗い影の籠る向側は某華族の別邸裏で、年中鎖切つた非常門は雨風に曝れた古風の姿で去年の落葉の堆く敷かれた中に立つ、直也はいつも此近道を拔けるのである二三丁が間に續く幽邃な、都離れのした此處の景色が彼は大好きであつた新綠の傘をひろげた榎の下へ薫を誘ひ出して徐やかに流れる白雲を仰いでは天體の說明をしたり、涼しい風に聲を合はせた軍歌をのせて興がつたり、黑雲一朶老樹の頂きに、颯と射落す銀箭の雨の中を、走れぬ薫を背中に邸に飛ばした事もある雪の朝に肩車して、氷滑りを羨む不具の少年を喜ばせた事もあつた。

直也はこの阪の半ばに來て立止つた、今は追懷となるべき此邊の景色を眺めるのであらうか、彼は今出た大野の邸宅の方を俯瞰す姿態に立つたが、其眼は堅く閉つて居る、山の奥の樣な寂寞を怪しい聲の鳥が渡つた。

『先生……先生……』

彼は不意の聲に驚かされて、夢から覺めた者の如く、怪みの目を睜つて四邊を見廻はした。

『先生ッ』

聲は榎の下の藪の中から聞えて、ガサ〳〵と垣押し分け這ひ出る黑い物がある。

『オ、薫君かッ』

『榊先生ッ』

杖を持たぬ薫は直也に近づかうと苛立て垣竹に袂をとられ、横に轉がつた身躰を其儘に這ふ。

『危ない』

と叫んだ直也は駈寄つて抱起さうとする其手へ飛付くやうに、確りと握つた薫はワッと泣き出した。

『これ何したのぢや、負傷しやせんか、杖も持たんと……何したんぢや斯な所から』

薫は悲しい聲で泣き止まぬ、蜘蛛の巣やら枯笹のひつ着いたのを拂ふて、引寄せて膝に靠らせ顔を覗き込む。

『オイ泣いては解らん、泣かずに云ひたまへ、さ、止めるんぢや、男ぢやないか』

と叱つて勵ました、漸く嗚咽になつて。

『先生……厭だ……厭だ……先生廢めるから厭だい……廢めるから……』

『……』

直也は默つて邸宅の方を見た。

『先生明日からモウ來ないんだもの、廢めてモウ來ないんだもの、僕厭だ、僕厭だ』

『ウンそれで君泣くのかい』

と快濶に云つて『はッはッは、、、』と笑つたが、熱い涙が頰に傳はつた。

『そんな事で泣いちや可ん、僕はね……急に何ぢや……國へ歸る事になつたんだからね』

『嘘だ嘘だ』

薫は握つた手を劇しく振動かして。

『先生もお母様と同じ嘘を吐くんだもの僕を皆欺すんだもの、僕知つとるから……知つとるから可い……知つとるから……』

『知つとる？、君知つて居のるのかい』

『おばあ様が惡いんだ、先生とお母様が……』

『オイ君、知つて居るのなら可い、僕が嘘を吐いたのは惡かつた、赦して呉れたまへ、モウ隱しはせん、能く云ふて聞す事があるからな、一遍顔を拭くが可い眞黑になつたぞ』

袂から半巾を出して渡しかけたが、逆上せて眞赤になつた顔を見ると、引寄せて奇麗に拭いて遣る。

『君は何して此處へ來たんぢや』

『先生が廢めると云つて歸りかけたから僕ア便所へ行く風をして裏から廻つて籔の中を傳うて來たのです、先生は屹度此邊を通るから……杖を便所の椽に置いて來たからおばあ樣だつて誰だつて僕ら便所へ入いつて居るともつて油斷して居るんだ、だつて先生に遇はせない樣にするんだもの……』

又悲しくなつてシク〳〵と泣出した、直也は目を瞬いて。

『杖なしに？、そんな亂暴をしちやア可ん、其上負傷をしたら何するんぢや、而し能く來て呉れた、僕はね、君に一寸遇ひたかつたんぢや、……一度遇ふて別れたい……と思つたけれどな』

『先生ッ、僕先生と別れァせん、厭だ、厭だ、誰が別れるもんか』

『はッはゝ』

と直也は寂しう笑ふた。

『薫君、此世の中にはな、人間の智慧で計り知る事の出來ん物がある、運命といふのぢや、其奴ァね、殘酷な……無情な……血も涙も無い奴ぢや、此奴の爲には僕や君のお母樣見たいな

大人でも……それから君の樣な子供でも、皆な辛い悲しい目に遇されるんぢや』

薫は突然に大きな聲をした。

『先生、運命ッて宅のおばあ樣見たいなの？』

（三二）

人間を虐ぐる運命といふものは宅のおばあ樣見たやうなのかとの薫の警句は直也を困らせた。

『ウム君のおばあ樣？、イヤおばあ樣は僕らと同じ人間ぢや、運命といふものは目に見ねぬ惡魔ぢや、人間は此惡魔と鬪はんけれアならぬ、可いかね、君でも君のお母樣でも僕でも皆な運命に咀はれて居る、組伏せ捻伏せて遣らうと狙つて居る、此奴を反對に降參させるのが豪い人間ぢや、運が惡いと云つて直に挫折る樣な人間は駄目ぢやぞ』

と勵ますやうに云つて。

『イヤ斯んな事を今から君に聞かしたつて解らん、君はな、運命を降參させるやうな豪い人間になる爲に一生懸命に勉强する事だぞ、僕が來んと云つて勉强を怠る樣ぢや可んぞ』

『厭です……先生來んッて厭です、僕先生が來んのなら……』

薫は染々と直也の顔を凝視つて。

『僕先生に隨いて行く、先生僕連れてッて下さい』

『連れて行け？、君をかい』

直也は思ひも寄らぬ少年の詞に愕然として、涙に濕れた面を眺める。

『先生が來なけれア僕寂しいんだもの、而して誰も學科を敎へて呉れやしないから……僕足が斯んなのだから學校へ行けアしない、行つたら皆が屹度不具者ッて馬鹿にするから……學校に行かないだッて先生さへ來て呉れたら僕ア誰にだつて負はしない……ねゝ先生』

『ウム君は能く勉強が出來るから負けはせん、これからいよ〳〵負けない樣に勉強するのだ、僕が居ないつて又代りの先生が有る、其先生に就て』

『厭だ、厭だ、僕他の先生は厭だッ』

と强く頭を振つて。

『僕先生でなけら厭です』

『はッは、、、そんな無理を云つちやア可んよ』

『無理だッて……お母樣だつて先生だつて無理だもの……僕今度の試驗が濟んだら先生鎌倉へ連れて遣るつて云つたでせう、それからお母樣は試驗が能く出來たら先生と一緒に寫眞を』

『薫君ッ』

直也の聲は顫えた。

『それはな、お母樣も僕も其豫定ぢやつた、君を欺く積りぢや無かつたけれどな、突然に斯んな事になつたのぢや、これが人間に解らぬ運命といふ物ぢやからな、君はそんな無理を云はないで穩和して勉强さへして居れば、ソレ運命が降參して又僕と遇へる時機が來る一緒に何處へでも行く事が出來る時節があるからな、それ迄に君はウンと勉强して置いて僕を屹驚させて呉れ、可いかい、君は賢いから能く解るだらうな、可いかい』

默つてまだ頭を振る。

『そんな事を云ふとお母樣も僕も困るからな、親や先生を困らせては可んだらう』

『だから僕先生に隨いて行く』

『それが可んのぢや、そんな事が出來るものか、お父樣やお母樣が何んなに心配されるか知れん、そんな亂暴を云つては僕困るぞ』

『お父様はモウ歸つて來やしないもの、歸つたつてお母様や僕を叱つちやア直に出て行つて了うもの……お母様は、僕が居なくなつたら直に玉川の祖父様の所へ歸るに極つてる、祖父様所お母様の家だから、僕彼所は大好きだ、神社さんがあつて祖父様は其處の神官だ、姉さんも居らア、美くしい石のある奇麗な川があつて……先生お母様の宅知つて丶』

無邪氣な少年の想ひはモウ景色麗はしい玉川在の、鳥居赤く松翠なる鎮守の森へ飛んで居る。

『お母様が玉川の家へ歸る？、そんな事は無い、そんな事は決して無い、僕がね僕が罷めたらモウそんな事は無い、おばあ様も怒りはせん、お父様も歸つて來られるだらう、そんな事を云ふもんぢや無い』

と直也は薫を扶けて身を起すと。

『默つて出たら皆が心配してる、さ、早く歸りたまへ、歸らんと可ん、僕と話してるのを見られると又おばあ様が叱るからな、可いかね、僕の云ふた事が能く解つたぢやらうな、勉强するのだぞ』

薫は取られた手を離して地上に俯伏すと悲しい聲で又泣き出した。

『困るなア……オイ僕困るそそんなに理解が無いと……、オ丶杖がないか、連れて行く譯に行

んからな……オイ薫君、ソラ此を杖にしてな、早く歸りたまへ僕此處から君が門に入るのを見て居るからな』

洋杖を手に持たせると、持つた儘で起上らぬ。

『オイ着物が汚れる、さ早く起きる』

後から抱いた手に熱い涙がポロ〳〵かゝる、放せば倒れる薫を犇と、直也は師と敎へ子の間を繋ぐ愛着の絆に縛られて、心も昏く佇むのであつた。

《三三》

薫は何うしても直也を放さぬのである、種々に云て聞せても頑として承知せぬ、モウ泣くに聲も枯れた傷氣の態を見て直也は弱つて了つた。

『坊さまア――』

籔の中の遙に呼聲が聞える、薫を探すのだな、と思ふと直也は自分が此處に居て人々に見付る不快は堪へられぬと、心を鬼にして取られた袂を振放した。

『誰か探しに來た樣ぢやからな、僕ア君と此處に居ては可ん、又遇ふからな、可いかい』

『僕隨いて行く』

『可んといふのぢや、君ア敎師の云ふ事を守らんかッ』

顏を反けて叱つて見たが、一個の薫は些とも怯まぬ、足に縋れついて。

『先生の云ふ事を守る、守るから連ていて下さい』

『オイ僕を何處まで弱らせるんぢや』

と直也は苦しさうな嘆息をついて。

『不義の汚名を默して引下つた僕に……君は又誘拐の名を負はせやうとするのかッ』

『先生勘忍して下さい』

薫は咽び泣きに泣く。

『泣いでも可い……怒つたのぢや無い、怒つたのぢやないからな、機嫌を善くして歸りたまへ……』

『……』

『勉强するんたぞ』

叫ぶと共に直也は倚る小な體軀を輕く突放してドッと駈出した、ヨロ〳〵とした薫は利かぬ右足を前に尻居に倒れると。

『先生――』

と聲ふり絞り泣立る、追ふて及ばぬ身を知る彼は喉も裂けよと其人を呼立てるのである。

直也は二三十步の彼方で我を呼ぶ悲しい叫びを振顧いた、而して榎の根方の黑い小さな影を彼は遂に見捨ては行き得ぬのであつた、再び後戻りしかける時、先刻薫が潜つた垣の破れから人の顏が覗く。

『オ、坊樣……榊樣ッ』

『ヤ音藏君か』

車夫音藏は垣竹を押折つて躍り出た。

『榊樣……何と御挨拶の致し樣もございません、さぞお腹が立ちやせう……御無念に……、無理難題に事を缺いで不義の密通のと……、傍で聞いてせえ俺ア堪ねられねいから、主筋だつて何だつて構はねえ、飛込んで思ふ存分……と腕を撫つて聞いてますと、奧樣のお痛はしい御決心を知つた貴方が、何も彼も忘れて歸ると仰有つた、俺アあの一言で……』

『オイ〳〵君、それよりはこれを何かして呉れんかい、僕ア困つて居るのぢや』
モウ袴の裾を握つて今度こそは放さぬといふ氣込で、薫は音藏と直也の顏を見交して居る。
『坊樣、貴方の姿が見ねいからお母樣は御心配で、今手分けをして探してる最中ですよ、ぢやア榊樣を迫駈けて』
『ナニ先廻はりをして出て來たんぢや籔ン中からな、驚いたよ』
『僕先生に隨いて行くんた』
『あの一點張りで實に弱つてる所ぢや、君に此子を引渡すぞ』
『ヘイ』
と云つたが音藏は俯向いて眼を擦る。
『君ぢやから可かつたがあの老人の目にでもかゝつて見い、いよ〳〵恥辱を受んならん、子供の敎育に口を藉つて卑しむべき慾望を遂げる爲に出入する者と見て居るらしいからな、根據の無い猜疑を說破つて一身の潔白を立るのは易い事ぢやが問題が問題ぢや、進んで云爭ふ程口も感情もいよ〳〵汚れる、實際僕ア夫人があんな忌はしい爭ひの中へ身を投出したのを見て居る事さへ出來んのぢや、それに侮辱された僕に謝する爲に悲慘な決心をして老人に向つた意氣……僕はあの態度に酬ゆる爲に汚辱の名を被つた儘に去る決心ぢや』

直也は胸の感慨を僅かに漏らす。
『老人は如彼でも廣之氏は當代の名士ぢや、あの高潔な夫人を信ずる事は出來やうから、僕さへ大野家に跡を絕つたらそれで濟むのぢや……唯殘念なのはな』
薫の姿を見下して。
『此子ぢや、僕は此子の上に大きな希望と趣味を有つて居つたのぢや、二年前に廣之氏夫婦から賴まれて以來、普通の身體で無い小兒を普通を脫けた立派な人格に作り上げて見たい考へでな、僕は此事業に精神を打込んで居つたのぢやが……突然に事業は破壞されて了つた……捉へて離さぬ此子よりは……突放して去く僕の意中は辛いのぢや』
傷惱に堪えぬ狀の彼の巨きな眼には涙が涌いて居る。
『はヅは、、、遇うのも別れるのも運命ぢやらうかい、なア君、君は僕の敬服して居る人格ぢや、いよ〳〵大野家の爲に忠勤を勵んで呉れ……折角苔にした花の樣な此子ぢや、家庭の事情といふ殘酷な嵐に散さぬやうにな、君間接に保護して呉れたまへ、可いかい、ヤ失敬ッ』
云ふかと思ふと彼は薫の油斷を飛退て、一散に阪馳せ下り姿は遂に見ずなつた。

（三四）

彼岸櫻のボツ〳〵咲きかける陽氣を向嶋の別莊の奥深く閉籠つた佐藤男爵の妹喜代子は、兄信明の訪問に、雨に打れた花の樣な、華奢な姿を懶げに起して、寢臺を下りやうとする時モウ其處へ兄が來る。

『ヤツまだ寢て居るのか、喜代さん、春だぞ春だぞ、花の咲く春が來たぞ』

と太い底力のある兄の聲は、姿態と共に何時も陽氣である、喜代子は燃ゆる色の寢衣の上へ衣桁にかゝつた荒い縞の書生羽織を重ねて、女優卷の鬢のばら〳〵に紛れたのを、白い指で自棄に掬つて梳きあげつゝ、春の夜のいぎたない夢まだ殘る艶な顏で、突立つた儘の兄を見遣る、發香仕掛の卓子洋燈は消されて間も無う、朝寒をバチ〳〵と銀色の小さな煖爐が燃える、和洋折衷の一室は蘭の香漂はす溫室と蒸されて、違ひ棚に靑銅の置物毬に戯むるゝ狆も欠伸をしさうな氣弛さである。

『可ん、斯う蒸々と立籠めた中で今頃までもお寢みといふのぢやア壯健な者でも病人になる、

チト明けて朝の新鮮な空氣を入れるが可い』

信明は草色の窓帷を動かして窓一枚を上げやうとする、赤い下締の解けかゝりだらしない姿で緞子張の肱掛椅子にくの字形に靠れかゝつた喜代子は『可ません、明けては』と恐れる樣に云つて。

『妾モウ外面を見るのも厭よ、此處で斯うして消えて了うのです』

『消える？、はッはッは、、、消えるは可いね、消えるにも種々の形式がある、ドロ〳〵で掻消す如くといふものあれば……』

『精々愚弄つて下さいよ、現在の兄樣さへそれだから皆が妾の事つたら……』

『ア、情ないッ、天か命かぢや、俺の妹に喜代さんの樣な病的姫殿下が有らせられやうとは因業だな』

『ハイ何せ因業ですよ　因業だから……』

信明は笑ひを堪へるといつた風。

『オイ〳〵モウ可い加減にしなさい、朝ッぱらから兄妹喧嘩が爲たくつて遠い所へ忙がしい身體を運びはせん、何して居るか氣にかゝるしな、相談して見たい事もあつたから公用の中か

ら脱ける様にして來たのぢや』

『だつて兄様が餘りな……』

と喜代子は甘えた調子になる、齡の二十六は三つ四つ若う見せる風俗の、華麗な白い顏は稍險しい目尻と、兄に其儘の高過る鼻が瑕と云へば瑕であるが、流行語の新しい女の新型に相應しいとも賞められさうな十人を拔けた容色である、此喜代子が京都在住の公卿華族某伯爵家に嫁入した事は去年春頃の新聞に揭て例の夫婦二人立に新の字を揭題にして寫眞さへ披露されたのであるが、その新婦がモウ以前の佐藤家令孃に立戻り此向嶋の別莊に納まつて居やうとは六號文字ほどの消息も世間に知れぬのであつた、喜代子の夫たりし伯爵の若君は飛行機道樂の爲に筋の善くない負債に苦しめられ、發明の器機が空に舞はぬ前に信用地に墜ちて禮遇停止の悲境に呻吟し遂に肺を病んで今は洛東八瀨の里なる舊臣の家で寂しい生活をして居るとか、喜代子が離緣になつた眞相は判らぬが、今に蒼空かける鳥の翼に涙を呑む病る伯爵家の公達は、美くしい妻の行衛にも心耄る恨みを抱く事だらう、佐藤男爵の夫人は喜代子の爲には繼母で、萬事折合の惡い爲に喜代子は京都へ行く前から此別莊で暮して居たのである、繼母と喜代子との間は斯して往來も疎遠になつて居るが、世間で剛復陰險と評されて居る信明も僅た一人の妹に

は優しい同胞の愛をかけて、始終に濃かな世話を盡すのであつた、召使ひの外に夫婦者の老人を置いて若い女主人公の保護に當らせ、公私多忙の身が一週一度は必らず自働車を此邸の門前に止めるのも、妹思ひの彼が眞實の心盡しであつた。

信明は女中が運んだ珈琲を啜りながら、妹の顏をジロ〳〵眺めて。

『ウム惜しい物だ、今が花なら七分といふ所ぢや、之を閉籠めて置くのは全く天物暴殄の罪を免れぬ』

『厭ですよ、そんな出鱈目ばつかし云つたつて、兄様ッたら些とも妾に同情しないんだもの、妾が何な煩悶に捉はれて……』

『イヤそれを皆な云ふに及ばん、兄様の鼻眼鏡は伊達にかけん、人の胸中の底まで看破るのぢや、消えたいといふも煩悶といふも、曰く唯一つの寂しいに歸するのぢやらう、俺は自分の血とお前の血とが一つである事を信ずるから俺の精神に絕ゑず燃えさかつて居る富貴功名の觀念は又妹たるお前の胸中に止んだ事は無らうと思ふ、左樣ではないか、功名富貴を縱まにしたい、榮耀榮華の極度を盡したい、之は俺の大理想ぢや、世間の僞善者共がヤレ虛榮が何だの贅澤が可んのと云ふ、俺アあれを聞くと腹の皮が搓れる程可笑しくて堪らぬ、人間に功

名富貴の希望を封じるのは恰度櫻を植ゑて花を咲かせまいとすると同じ事だ、花が厭なら木を植ゑぬが可い、好きな贅澤も出來ぬ樣な窮屈な世界なら面倒臭い人間なぞに生れずともの事ぢや、だから俺ア仙人の囈言見たいな世間の消極道德には大反對ぢや、喜代さんだつて左樣思ふだらう、俺がお前の望み通り京都へ嫁つて、又お前の望み通りに呼び戻したのも悉皆俺の理想を標準とした處置なのぢやお前を人間生活の劣等階級たる貧乏に墮したくない、霞の裡に咲く春の花の樣な誇と滿足の中央へお前が置きたいのぢや』

『そんな事を云つて……妾何時まで斯して……斯んな寂しい思ひをして居るのでずよ』

『まあ待ちなさい、同情せんの愚弄るのと云はれると恐く兄樣は引合はぬ、今俺の身躰は殆ど巽伯爵の影法師同然で迎も家事なそに關係つて居る暇はないのぢや、その中を期して來るのは我ながら妹思ひに感服して居る位ぢや』

『ほ、ほ、、誰の事を思つて居らつしやるか知れァしない、清香は何したのですよ』

『清香？、清香は清香ぢや、喜代子は喜代子ぢや、高子は高子ぢや』

と夫人の名まで云ひ添ゑて信明は哄笑ひした。

『喜代さん、それよりお前あの大野廣之といふ人物を知つて居るだらうね』

(三五)

民友黨の名士としての大野廣之の名は誰でも知つて居る、喜代子も其人に接した事は無いけれど雜誌や新聞の寫眞でその風采さへも記憶して居るのである。

『大野つてあの民友黨の？』

『然さ、以前は民友黨の領袖だつたが今は俺と共に巽さんの幕下さ』

と信明は得意げに云つて。

『俺の働きで彼の男を民友黨から引拔いたからあの狀態さ、流石の伯爵も手を置いて居たのを攻落した手際は豪いだらう、併し俺に次いで豪いと思つたのは其大野ぢや、彼が脫黨すると其眞似をしてゾロ〳〵民友黨を出た奴が、代議士だけでも三十人以上だ、それからお互ひの約束で當分は何處までも白を切つて何の關係も無い風を裝ふといふので、彼の男の名で曖昧極まる脫黨理由を發表すると、彼を信用してる世間はナル程と感心して攻擊どころか同情者が有うといふのだ、人格といふ看板も老舗となると豪いものだね』

『何してあれ程の地位を捨て巽さんへ咏方をしたのです』

『さ、其處が俺の豪い點さ、何してと云つて斯と答へる譯には行かぬが、女を口説くのも男を口説くのも秘訣は向ふの弱點に乘ずるのだ、同情に渴して居る奴は同情の餌で釣上げる、金に窮してる奴は黄金の釣で引かける、恐らく外れつこは無いからねえ、喜代さんも此呼吸を能く會得んで貰ひたいね』

『ほ、ほ妾には口説きたい人なんか無いから』

『イアそれが有る……のぢやない、無いから有る……チョッ云はれない』

と信明は笑み傾けて。

『喜代さん、俺は今日お前の爲に希望の光輝く或物を持つて來たのだがね、冷めた珈琲ぢやアー對話に勢ひが乘らぬ、興奮劑は無いかね興奮劑は』

『興奮劑つて、ベルモットなら』

『フ、、、まあそれでも可い、先づ祝盃を上げてから話さう』

程なく女中が銀盆に三鞭盞と美しい壜を載せ、果物を盛つた鉢とを運ぶ、信明は手酌で汪々と二三杯、妹が美しい手に象牙柄のナイフ弄り林檎剝く仰山らしい風を眺ながら一氣に煽る。

『口説く人が無いといふ所で話は中止になつて居たな、喜代さん、お前に尋ねるがね、お前は今茲にだねえ、口説くに足る男が居るとすれば敢て口説くに躊躇はしないだらうね』

『ほ、ほ兄樣モウ醉つて？』

信明は眞面目に詞を續ける。

『お前は今口説きたい人なんか無いと云つたらう、即ち無いから口説かないといふ事になる、有れば口説くだらうね』

『有ませんよそんな人は』

『まあさ、有るとしてだよ、何時まで斯な寂しい思ひを爲せられるなんて此別莊へ押籠に遇つた樣な不平を云ふぢやないか、俺だつて今が女盛りのお前に一刻だつて斯な無意味な生活は爲せたくない、俺と共々富貴功名の戰場に華やかな活動をさせたいと思ふから……』

喜代子は兄が飲半の盞を取つてグッと仰ぐ、それを元に置いて酌を爲ながら。

『そんな事問はないだつて……妾斯な詰らない厭な生活を續ける位ゐなら何も京都から歸つて來やしません、兄樣達が男ばかりの世界の樣に面白可笑い歡樂に耽つて居られるのに妾つたら何の慰籍も同情もない孤獨の穴の中へ葬られて全で別莊番見たいな……』

『解つてる、能く解つてる、男ばかりの世界を女ばかりの領土に爲やうと、好き放題の慰籍や同情に食傷する程樂しまうと、それは今後の喜代さんの手腕ぢや、そこで俺が尋ねるのだ、先づその返詞から聞う』

『返詞つて何有』

『今のぢや、口說くか口說かぬか』

喜代子は酒の氣も發したか、美しい眉の邊りを微かに紅くして、活々した眼光で兄を見て打笑む。

『それはねね、自分の理想に叶つたら』

『口說くか』

と信明は卓子をドッと叩く。

『それでこそ喜代さんは俺の妹ぢや、男に口說かるゝから女の運命は他人に握られる、進んで男を選擇するのは即ち女性の獨立を意味するのぢや、口說かれるのは敗けだ、口說くのは勝だ、喜代さん、お前一番大いに口說かないか』

『ほ、ほ兄樣見た樣に、口說く的が無いわ』

『有る、兄さんの口說いたのをお前も口說け、大野廣之といふ豪い男をお前も口說落して見ないか』

(三六)

大野廣之は幾度か脫げる上草履に、冷々と寒い栂の椽板足に快く、數奇を凝した庭前の、電燈に輝く樹の間から、吹くとしもなく渡る夜風に充血した面を向けて、離座敷に導く廻り椽に唯一人佇んだ、彼は大分醉ふて居る。

此處は巽伯爵の本邸である、盛だつた夜の宴會は今の前果た、主人の伯爵が卒ゆる同志黨の幹部連や地方代議士を招待して、議會も終了に間近い此頃を、慰勞を兼ねた成功祝ひの酒宴であつた、宴の半ばに主伯は起つて演說をした、其要領は……同志黨は創立日淺きに係らず一擧にして議場の多數を制し當局死活の權を握つたのは偏に諸君の盡力である事を感謝すると共に自分は又、或二人が我新政黨に捧た獻身的の努力に對つて諸君と共に大いなる謝意を表したいと思ふ……斯云つた主伯は後に控へた兩人を麾いて左右に置いた、それは佐藤男爵と、今一人

は大野廣之であつた、それから伯は両人が新政黨組織に就て盡した事業を報告し、殊に大野廣之が多年の民友黨を抛ち愚の批難に逆らつて政見を同じくする同志黨に加盟し裏面に於て伯の爲めに作戰計畫を案じた非常なる功勞を口を極めて賞讃したのである、而して佐藤男爵は我爲の外務大臣で、大野廣之は内務大臣であるとまで、巧みなる比喩で一同に紹介した、權勢に憧がる、人々を集めた黨員である伯の詞を、我今要路に起ば直ちに外務内務の両重要地位を此両人に與へんとの豫約と聞く程の聰明はある、盛なる拍手は両人に注がれた、男爵も廣之も主伯に續いて起ち、善美の饗應に醉ふた人々を更に雄辯で魅した、羨望の中心となり威服の的となつた両人に盞は雨の如くに飛んだ。

廣之は醉ひに燦やく眼を据ゑて靜な四邊の夜景を見廻はすと、フーと長く酒の氣を吐いた、快よい疲勞は身を襲ふ、彼が同志黨に加はつた事は其黨員にも今宵始めて披露されたのである、曖昧な告白に世間を欺いた彼は爾來此處巽邸の奥なる離座敷を假の宿と定め、佐藤男爵と共に待合遊の夜の外は家にも歸らず、當邸に起伏して主伯の事業に參謀の、一圖に忠勤を抽んでたのである、此に對する報酬は？、それは伯爵と男爵と廣之の外には知る筈もない、正直な世間は彼が既に同志黨中の人たる事をさへ信ぜぬのであるから。

『ほッはッは、、、』

と廣之は獨りで笑つた、彼の胸には或物の得られる成功の機會が目前に近づいた喜悦と、快よい酒の醉ひが混雜に入亂れて居るのである。

『貴郎お苦しくつて？』

後方に女の聲、振顧くと、庇に隈どつた夜の色に、すつきりと染め抜いた白い顏は、先刻宴會の座敷で佐藤男爵に紹介された其人の妹喜代子であつた。

『オ、佐藤さんの御令妹ですか、これは失禮、些とも知らなかつた、貴嬢は密と來られたですな、足音もさせんと、俺を驚かす積だね、貴嬢もお兄イさんと一緒で人が惡いはッはッは、、、、』

『ほ、ほ、彼な事を仰有つて、妾兄から貴郎が大層お苦しい相だから伺つて御介抱を申す樣にと命令つて、今迄お探し申したのですわ』

喜代子の口吻は今宵始めて逢ふた人に對する樣では無い、馴々しう傍に寄つた、化粧の匂ひはフロックの禮裝で柱に椅りかゝつた廣之に縺れかゝる。

『令嬢の御介抱？、貴嬢？介抱を煩はしたらそれこそ此大野廣之は滅亡です』

『あら何故でございます』

生々した眼を働せて醉ふ人を覗き込む。

『何故と云つてゞすな、艶福の嫉視は怖るべきですからなはッはッはゝゝゝ』

『あら彼な事を、妾こそ……、兄から能く承まはつて居りますよほゝほゝゝ』

『兄さんからはッはゝゝゝ、貴嬢の兄さんには叶はない』

『ほゝ、兄も然う申して居るのですもの』

『イヤ之は酷い、兄妹一致で肉薄ですな、可しい、覺えてお出でなさい、今に……』

喜代子は透さず突込んだ。

『今に染次を聘んで入らつてやるの』

『ヤ何も之は閉口』

と廣之は啞然といつた風、撥蛸のある女を素人仕立に爲た樣な、仇つぽい姿勢でッと進んだ喜代子は、勝ち誇つた顏に媚を見せて。

『あの斯な所に居らつしやると冷えて毒ですから、離座敷へお入りになつては』

『有難う、彼室が獨居暮しの巢ですよ、來て大に談りませんか、貴嬢は却々話せる』

と柱を離れると、酒の足が狹い椽に危い。

『あらお危う……』

喜代子は横に廣之を捉まへた、燦然と光る白い手は男の手を握つて。

(三七)

春の夜の朧の月影は澹々と竹椽に照る、障子には男女の影法師、沈丁花の香が何處やらから。

一室に對座つたのは稍酒から醒めた廣之と婿びて艶めく喜代子である。

『喜代子さん、今夜は貴嬢のお蔭で俺は久振りに斯う暖かい……家庭的の優味とでも云ふ樣な物に觸れた心持がして大變愉快ですよ、モウ永らく斯な氣持は知らなかつた』

廣之は此頃打續いだ荒める自分を顧て斯云つた、彼が我から家庭に遠ざかつてからモウ月の以上にもなる、喜代子の兄信明と共に事業の隙を新橋に遊んで大金を持つて姿を隱した小仙の後は染次といふ一流の藝妓に馴染を重ねて居る、待合の酒の香と美しい女の色で、彼は生れ變つて志すといふ事業に疲れる頭腦を慰める手段を執つて居るのであるが、嘗て覺へた家庭的の情

味、夫人綾子を中心にして優しい睦じい細やかな、華麗でない代りに冗が無うてそして精神の髄に泌み込むやうな温味は到底得る事が出來ぬのであつた。

『ほゝほ妾の樣な女が何して……貴郎は御立派な夫人が居らつしやるぢや有りませんか』

喜代子は鋭く云つて凝と相手の顔を見る。

『家内ですかはッは、、、』

と廣之は寂しく笑つた。

『家内はあります、子供も居るです、併し俺の妻は遠去に死んだのです、形骸だけは生きて宅の留守番をして居るのですが精神的の死人ですからな、死人からは何の慰籍も得られませんよ』

『夫人が精神的の死人とは何故です』

『夫の俺に從はんのです、俺が民友黨を去て貴嬢のお兄さんと共に巽伯の事業を輔ける、その事が正義に反くといふのですな、俺が十餘年の黨籍を抛つて志を改めたのは別に大いに考へる所があるのです、その事を云つて聞せても妻は頑冥に守つて屈しないのです、飽くまでも俺を諫めて以前の民友黨に復れといふのです』

『まあ左樣ですか、何故でしやうねね、正義なぞといふ事は解釋の仕方で餘程危險な場合がありますわね、あの夫人は何方で御學問は』

『教育ですか、女學校は出たのですが、ナニ根本が狹い融通の利かぬ儒教主義で思想を固められたのですからな、父といふのが寺子屋の師匠見た樣な昔氣質の男で、敬神思想の衰へたのが憤慨に堪へぬと云つて自ら進んで居村の鎮守の神主を勤めるといふ老人の子ですもの俺が復活的に新らしい人となつて成功したいと思ふ精神が何しても妻には了解されんのですな』

『情ない方ね』

と云つて喜代子は態と周章た風をする。

『御免遊ばせ、妾ッイ貴郎の只今の御境遇に同情してね……夫人が何故そんな事態がお解りにならないかと思ふと腹が立つ樣ですわ』

『感謝します、要するに古い黴の生へた思想と新しい精神の衝突ですな、その爲に俺の家庭は滅茶々々です……他人に云へない闇黒もあるのです』

『夫人にですか』

『エ、家内にですがね、詰らん事ですよ……』

『何な事ですか知りませんが坊ちやんが居らつしやる樣に聞きました、そんな家庭の事情の裡に無邪氣な少年をお置きになるのは殘酷ですわねゑ、まあ左樣なのですかねえ』

同情に堪ねぬやうな濕んだ聲。

『さあ子供は可愛相ですがね、それも普通の身躰ぢや無いです、負傷の爲に足を挫いて不具同然です、それで家庭教師を聘して教育を施して居たのですが其教師と……其教師にも不都合があつて放逐したものですから』

『まあそれでは坊の教育も？大野さん、それァ事實なのですか、妾餘り悲慘なお話で何だか有り得べからざる事の樣に思ふのですもの』

『貴嬢の深切な御同情の前に一切浚け出したのです、俺は今度の事業に取かゝる前に深い決心を爲たのですからな、何な犧牲をも厭わない覺悟を有つて居るのです』

『犧牲と仰有ると』

『新しい俺に適合ぬ家庭は破壞しても搆わないといふ決心です』

『あの夫人とお別れになつても？』

『無論です、貴嬢だから云ふのだが、從來の俺の妻としては充分で有つたのです、隨分俺と共

に辛酸も嘗めたのです所謂糟糠の妻ですな、けれどもです、一旦夫が機に觸れて醒覺した場合にも係らず、固陋の思想に捉へられて夫に反抗する樣な女に對しては俺は非常に憎惡の念を起すのです、可愛さが餘つて憎い讐へですな、今では迚も同棲に堪へんのですよ』

『それは、然うですわねね、夫に同情しないで妻の資格は有ませんものね』

喜代子は其人を蔑すむ樣に云つて暫時默つて俯向いて居たが、急に物に襲はれた樣に身躰をブル〳〵と顫はせると、腕環のはまつた美しい腕をピタリと胸に合せ慄然とした氣勢。

『大野さん、夫人の事に關しては妾からは何も申上げますまい、妾は堪へられないものに小さな坊に同情します、可愛相ですわ、憐れな一輪咲の花が風に揉まれて居るのを見ては妾は其儘に見過す事は出來ません、夫人の事は御相談とあらば兄にも又分別がありませうから妾はお願しても其坊を救ひます、萬望妾に救はせて下さい』

『有難う、御同情は實に謝するです、併し貴嬢は男爵家の御令嬢ぢや、俺は平民で僅に代議士……』

『ほゝゝほ愛に區別があるものですか』

と云つて喜代子は膝を進ませる。

『妾坊の爲に善い家庭教師を見付けました、それを御紹介しませうね、女ですが、妾は此上ない適任者だと信じます』

『それは實に結構です、妻に對する所置を考へて居るのですが、子供の世話なぞに今の俺の頭腦を使ふのは惜しいです、そんな事は妻が引受けて遣るのが當然ですからな』

『ほゝほ、そう仰有ると妾困るわ、何だか夫人の後任を狙つて居る樣だわね』

『俺家庭的にも復活して貴孃の樣な美しい新夫人が迎へたいてはッは、、、』

『ほゝほゝゝ』

喜代子は電燈を避けて赤くなつた顔に袖を當て、華やかな笑を漏らすのであつた。

《三八》

家庭教師榊直也に引放された少年薫の其後は哀れであつた。

散々に母に逼つては榊教師を呼んで呉れ左も無れば自分を連れて行けと、種々に云慰める綾子に逆つた、母の訓言に從はぬ子ではなかつたがと綾子は胸を痛めて我身の上に漸次々々に黑い影被せる運命といふ惡魔と何處までも鬪ふ臍は堅めながら、罪の無い子供には血の涙呑む憂思

の、世は春の長閑に反いて寂い宿に夫の歸りを今日か明日かと待暮すのである。

薫は今日も二階に閉籠つた、三度の飯時に一寸臺所に姿を見せるばかり、庭園の運動も廢めて了つて、教室に拵へた一室で餘念も無く勉强に耽るのであつた、綾子は居間で針を動かして居ると、女中の濱が入つて來て、當惑の顔で。

『奥樣、何致しませう、坊樣はお晝餐も厭だから喫べないと有仰います』

薫は今朝も箸をとらなかつた、綾子は眉を寄せて。

『お晝餐も？何を云ふのだらうねえ彼の子は……此處へ呼んで來てお呉れ』

と云つたが『イヱ妾行つて見ます』とホッと屈托の嘆息して起上つた。

薫は今足繼ぎして黑板に向ひ何やら頻りに描いて居る綾子は襖の透間からソッと覗く、それに氣付かぬ薫は一心不亂に白墨をカチ〳〵と動かした、暫時して踏臺から下りた彼は。

『先生ッ、榊先生ッ』

と大きな聲で叫んで、今描いた黑板を屹と仰ぐ、白墨の痕は鮮明やかに榊教師の髯濃い顔である、廣い額巨きな眼締つた口元の酷似と繪になつて、誰が見ても其人である、薫は懷しい師の在すが如く似顔に對つて敬禮をした。

『先生、僕です、大野薫です』

襖の外に綾子は袂を咬へた。

『先生、僕ア先生の命令通り毎日勉強して居ます、モウ讀本も十遍復習へました、習字も草紙を二度換へました、清書はお母様に出しました、作文は題がありませんから僕が勝手に拵へて作りました、榊先生に遇ひたいといふ題です、それを先生に直して欲しいのです……まだ先生に問ひたい事が皆書いてあります……先生僕ア毎日先生の來るのを待つて居ります……一生懸命に勉強をしたら先生に遇へると云はれたから僕ア寂しいけれど勉強して居ます、僕ア先生の宅へ連れて行つて下さいッてお母さまに頼むけれど、そんなことをしたらお母様はお前に別れねばならぬと云つて泣かれます……先生には遇ひたいけれど……お母様と別れるのは僕……』

少年の聲は顫えて、小さな肩は微かに動く。

『僕お父様が歸られたらおばあ様の惡い事を皆な告げます、先生とお母様とは惡い事は無いのも告げます、そして先生を呼んで貰ふのです、けれどもお父様は些とも歸へつて來ないから……』

手の掌で二三度目を擦つて。

『お父様は何程待つても歸つて來ないから、僕今日から飯を喰ふのを廢めました、孝子與作の話を僕ア覺えて居ます、與作のお父さんが海に漁に出て歸つて來ないからお母さんは病氣になつて眼が潰れて泣いて居る、與作は十三だけれど賢い兒だから、自分は飯を喫べないでお母さんを養ひました、其の中に外國に漂流れたお父さんは澤山の寶を持つて歸りました、與作は孝行を賞められて御褒美を頂きました……僕のお母様も泣いて居る……僕ア早くお父様の歸る様に今日からモウ飯は喫べません……先生ッ先生も早く來て下さい、僕アお父様が歸つて先生を呼んで呉れるまでは死んでも……死んでも飯は喫べません』

『薫ッ』

と襖引明け駈込んだ綾子は突然哀れな姿を犇と抱締める。

『これお前は……お前はそれは何を云ふのです、死んでも御飯を喫べないつて……お前が死んでお母様は何うするのですよ……何故お前はそんな……』

薫は濕れた顔で母を仰いで。

『そんなら榊先生を呼んで下さい』

綾子は怜悧い樣でも頑是ない我子の一念師を慕ふ強い意志に驚いて、黑板に現然と生きた其人の顏を見ると、何とはなしに慄然とした。

(三九)

『お母樣、これ榊先生に似て居るねゑ』

『先生に其儘です、能く描けました』

『先生に見せたら屹度滿點だけれどなア』

『薫、お前それ程先生に遇ひたいの？』

『遇ひたい、僕先生が大好きだもの』

『それなら何故今の樣な亂暴な事を云ふのです』

と我子を引寄せて其處の椅子に掛ける。

『お前は死んでも御飯を喫べないと云ひましたね、お前死んだら何して先生に遇ふのです、先生がお別れの時に、能く勉强さへして居たら運命といふ意地の惡い惡魔が降參して又僕と遇へる時節が來る、一緒に連立つて何處へでも行く事が出來るッて先生が仰有つたとお前は云つたでは有ませんか、お前から聞いたお母さんさへ善く覺えて居るのにお前はモウ忘れましたね』

薫は急に首を振つて。

『僕忘れはせん、一生懸命に勉强してるんだもの、だつて先生は來ないから……』

『それが時節を待つといふのです、何でも急いでは成功しないといふ訓話も覺ふて居るでせうそれにお母さんの云ふ言を聞かないで御飯を喫べなかつたら勉强も出來ません、死んだら先生に遇へる時節も來やしません、お父樣や妾には親不孝になります、先生のお詞にも反く事になりますよ、それでもお前は御飯を喫べないなぞ亂暴な事を云ふのですか』

『……』

『ね、解つたらう、お前は怜悧いつて先生も能く賞めてだつたわねゑ、これまでお母さんの云ふ事を聞かなかつた事は一度だつてありはしないだらう、ね、能く考へて御覽、お母さんは決して惡い事は云はないからね』

『だつて僕……』

『お前が先生をお慕ひ申すのを見ると、お前よりは此お母さんの方が何程招んで上げたいか知れないのだよ、夫が出來ぬといふのはね……夫か此世の中の義理と云つて……辛い悲しい事は誰にだつて有るのだから……お前が大きくなつたら今お母さんの辛いのが能く解る時があるからね、お母さんを可愛相と思ふのなら……』

耳に近く憚る樣に。

『お父樣がお歸りになつても決して榊先生の事を云ふのではありませんよ、先生を招んで呉れといふ樣な事は一寸でも云はずに置いてお呉れ、それでないと此お母さんが辛い悲しい目に遇はねばならぬからね、お前と一緒に暮す事が出來ない樣になるかも知れんからねお母さんが時機を見てお父樣にお願ひして榊先生を又以前の通りに屹度招んで上げるからね』

『だつてお父樣も歸つて來やしない、お母樣と僕と僅た両人ぎりだもの……僕おばあ樣は大嫌ひだ、おばあ樣が先生を憤らせたりお母樣を虐めたりするんだ』

『これそんな事も云ふのでは有ません、小供といふものはそんな事は知らん顔をして勉強さへして居れば可いのだからね、お父樣がお歸りになつたら何より前にお前の先生を招んで上げるから其方に就て從來通りに能く勉強するのですよ』

『先生ッて榊先生？』

『又そんな事を……今あれ程云つて聞かせたぢや有ませんか、榊先生は時節が來たら屹度お母さんが遇はせて上げるからね、それ迄は他の先生に就て……』

『お母樣、僕お母樣が何と云つても他の先生は厭だ、他の先生に誰が習ふもんか』

綾子はモウ詞も出ぬ、反抗の氣勢を眉邊に現はして小供ながら屈せぬ魂に、これが原因となつて家庭の悲劇はいよ〳〵縺れ行くのではあるまいかと、胸の快惱は增すばかりであるの推量して呉れても』

『お前は何故そんなに理解が無なつたのだらうねえ、お母さんの苦痛が小供だつて少しは……

母が袂を覆ふた顔をオロ〳〵と見上げて薫も涙を擦りこすり。

『お母樣堪忍して頂戴、僕他の先生が來ないたつて勉強するから……飯も喫べて勉強するから……榊先生は黑板に居るんだ、僕モウ先生を招んで下さいッて無理は云はない、先生黑板にチャンとゐるんだもの』

餘りの愛着に幼い精神の狂したのではあるまいかと綾子は水を浴びる心地で、確かと其手を握つて放さぬ。

『ねお母様、僕が榊先生を招んで下さいッて云はなけァ他の先生が來やしないだらう、僕モウ云やしない、此繪が先生だもの』

と母を離して黑板の下に行く、其後姿を見る綾子の胸は引裂く樣である、勉強が嫌ひに泣く親はあらう、慕ふ敎師を生木裂く樣に引裂して、その名も呼ぶな思ふなとは鬼畜の世界にも通用すまい無情である、良師を憧れ慕ふ優しい少年の美德を壓へつけ、哀さに泣く大人の涙の世界へ無理から連込んで、折角咲いた花を闇に置く殘酷しさは何といふ因果であらうか……綾子は悲痛の極を心地遠く眼眩んで椅子から落ちやうとした時、階段を駈上る足音聞えて。

『奥樣、旦那樣がお歸りでございます』

(四〇)

旦那樣の歸宅?、一聲は寂しい母子に花鳥の春忽ち到る懷ひである。

『お父樣が?』

と薫は喜悅に顏輝やかす、泣いた鴉がモウ笑ふ、綾子はいそ〳〵起上る。

『お父樣にそんな顏を見せては可けません、奇麗に拭いて後からお出で』

と自分も涙の痕を隱して急いで下りやうとする階下から太い夫の聲。

『下りないでも可し、其處へ行く』

廣之はズッと上つた。

『お歸り遊ばせ』

『お父樣ッ』

『ウン』

と微かに應へた廣之は一寸兩人を俯下した目を正面の黑板に注ぐ、と凝と瞳を据ゑた、そこには薫が手弄びの、榊敎師の似顏が例の磊落な調子で『ヤァ御主人』と高からに聲を發しさう、眞に逼つて描かれてあつた、廣之は輕蔑んだやうな淺い冷笑を浮べながら椅子に掛ける。

長い間の留守中に榊敎師の事件が起たのである。姑から何な報告が行て夫が何な感情を有つて居るかは些とも解らぬのであるが、自分が不義の罪を犯す女とはイカニ此頃急に樣子の變つた夫でも疑ふ事は出來まい、榊敎師を廢めよとの電話の樣子は情なかつたが遇へば潔白な辨解に淺ましい濡衣は屹度乾く……と綾子は堅く信じて居るのである、例時の樣に冷たい擧動は先づ

心寒いけれど、忘れられたかと思ふ我家に自分で歸つた夫の顔を見れば、怨みや愚痴やは自然に消えて、力強い滿足に苦しい病ひの癒ゐた心地がする。

『お衣裳換をなすつては？』

晴れやかな笑顔を見せて、優しい詞を待受ける樣に、手を突いた夫人に對つて廣之は突然に哄笑を浴びせた。

『オイ綾、暫時の間に其方も却々進んだね』

『は』

と云つて綾子は顔を見る、長い間物云ひ交はさぬ夫の、久々の詞が意味が取れなかつた。

『新しい女になれさうだといふ事よ』

懷しい父の膝に薫は絶りつく。

『お父樣、僕お父樣が不在でも榊先生が居ない樣になつても一生懸命勉强して居ます、習字も書取りも上手になつたからお父樣見て點つけて下さい、繪も巧いでせう、ホラ先生の似顔！』

『お前が此繪を描いたのか』

『巧いでせう僕、先生の顔似とるでせう、お父樣歸つたら先生を……』

と憂ひを包藏むには小さな胸の、母から敎へられた事は知りながらツィ口を辷らせて急に悄氣る。

『綾、其方は斯な似顔を描せて俺に見いといふのかね』

詞は抉る樣であるが聲調は靜かに、廣之は平然とした態度である。

『あのそれは薫が惡戯で……妾只今叱つて居た所でございます』

『左樣か、却々能く描いてある、他人の妻を盜む顔にしては少々眞面目過ぎるが』

綾子は鐵火を心臟に加へられた心地、グラ〳〵涌立つ黑雲の底へ眞逆樣に落るかと、確と捉へたのは薫の背中であつた。

『貴郎……貴郎も妾をお疑ひでございますかッ』

何も答へぬ夫の傍へズッと寄つて其膝を搖り動かす。

『餘りなお詞でございます、妾が母樣の御難題を其場で云聞く事は出來るのでございますが、逆らつて御機嫌を惡くするばかりですから……貴郎のお歸りを待つて居たのでございます、何なお調も受けまする、妾は……妾は貴郎に絶つて身の潔白を立てるより他には手段のない身でございますから……眞逆と思ひました貴郎まで御疑ひがあるのなら、妾モ一度貴郎の前

でお母様と……』

『は、、、對決といふのかね、それには及ばんぢやないか、オイ綾ッ』

と前屈みに夫人の顏を覗き込む。

『俺はお前が俺の不在に他の男と不義をしたからつて何も怒りはせんぞ、左樣心配する事は要らぬ、俺は此通り平氣だはッは、、、』

一層情ない淺ましい詞に、綾子は呆れて俯向いた。

『俺は從來は正義といふ者に魅かされて居つた、が將來の俺は正義を敵として鬪ふのだ、正義だの人道だのといふ奴は悉皆俺の敵ぢや、此立場から見ると其方や榊のした事に俺は寧ろ同情するよはッは、、、』

惡魔の呪ひと恐ろしい夫の詞の終るを待つて綾子は屹と面を上げる。

《四一》

『貴郎……貴郎萬望モ一度以前の御精神になつて下さいませ』

綾子の聲には苦痛が籠つたが、沈着いた心は姿勢に見ゐて、端然と居坐を正し泌々と夫の顏を見た。

『無法な力に抵抗うても正しい道理を貫けとは、以前の貴郎から敎へて頂いた訓言で妾片時も忘れたことはございません』

『は、、、まだそんな事を云つて居るのかね、なる程俺はそんな事を云つた時もあつたらうな、併しそれは生れ變らぬ以前の俺ぢや、前生の事は覺ゐて居らぬ』

と事もなげに輕く打消して。

『オイ其方は何時まで好んでそんな苦しい思ひを爲るのぢや、其方や榊を煩悶から救うて遣る氣で俺は歸つて來たのだぞ、綾ッ、俺と其方は別れやう』

遂には……と思ひ惱まぬ事では無つたが、眼前に夫の口から悲しい詞を聞かされた綾子は『エッ』と驚愕を漏らした儘物云ふ事が出來なかつた。

哀れな母の一大事の場合と見て最初から稚い心を痛めて居た薫は此時衝と父の前に進んだ。

『お父樣、榊先生は惡い事をする人ぢやありません、お母樣も惡い事は無い、皆な……』

『これお前は』

と綾子は嬉しい味方を叱り付ける。

『皆な何したのぢや』

父の聲に應じて薫は明確と。

『皆なおばあ樣が惡いのです、おばあ樣が嘘を吐いてお母樣を虐めるのです、それから……』

『お前は何を云ふのです』

手で蓋する樣にして制めるのを。

『何故制める、そんな躾方をするから精神までが不具者になる、云はして置け、薫ッそれから何したのぢや、其方の思ふ事を何んでも可いから云つて見い』

『お父樣叱りはせんの』

『叱りはせん、さ云つて見い』

母を救はうとする少年の氣慨は面に迸しる。

『それからお父樣が惡いのです』

『はッは、、、俺が惡いといふのかね』

『お父樣は民友黨を廢めたから惡い、民友黨は正義だのにお父樣は正義に反いて敵に降參した

から惡いのだ、お父樣は正義といふ事を知つて居るの……正義とは人間の行ふべき正しい道です』

廣之は俯向いて默つて居る綾子をヂロリと見て、强ひて口邊に微笑を見せる。

『はッは、、面白い、正義の講釋まで仕込んであるのか、用意周到ぢや』

『僕榊先生に敎へて貰つたのよ、モシお父樣が民友黨を廢めたら僕に正義の道を說いてお父樣に聞せるが可いッて先生が』

『榊がそんな事を其方に云つたか、何奴も此奴も臭いもの身知らずでお負けに古い鑄型で拵へた人間と來て居るから始末が惡いはッほッは、、、』

と罵つたが何を思つたか急に穩和な顏になつて。

『薫、其方は却々怜悧な質ぢや、唯從來の敎育が惡かつた爲に生來の美質を變に捩けさせたのは俺の不注意ぢやつた、彼な敎師は可ん、代りに立派な家庭敎師を聘んで遣るぞ』

『榊先生を招んで下さい』

『ナニ榊を？、彼んなのより遙か善い先生が來る、能くお前を可愛がる先生が』

『厭だ厭だ、僕榊先生でなけら厭です』

『はッは、、、厭なら厭でも可い、お父様の爲る通りになれば可ろしい』
『貴郎ッ、妾貴郎から離縁れる覺えはございません』
綾子の血を吐くやうな聲を冷に受けて。
『覺えが無いなら無いで可いぢやないか、其事ばかりが問題じやない』
『妾決心いたしました、これ迄は妾の責任と存じましたからお諫めを致しました、緣を切る
といふお詞を聞きますれば妾……妾これ迄でございます、貴郎に隨いて何處までも參りま
る……』
『イヤそれはモウ遲いのじや、俺は古い精神と共に總てを拋棄る、古い思想に捉へられた其方
が俺と一緒に歩まうとするのは相互の不利益じや、俺は其方達の邪魔をせぬから其方も俺の
妨害をするな』
斯云つて廣之は急に起上つた、機みに椅子が後ろに倒れる、窓玻璃が微かに鳴つた、その物音
を我身に逼る魔の軍の叫喚かと、恐ろしい思ひに綾子は岸破と俯伏した、母の姿を庇護ふやう
にして薫も立ちながらシク〳〵泣く。

(四二)

暈被た月は微茫と小夜更けた上野の臺を照して居る、雨を報せの蒸暖い風も醉顏に心地快く俥
上の人は眠つた、音もなく護謨輪一臺、阪を麓へ廣小路に、と向けた轅棒を矢庭に取直すと、
グルリ方向を變へて東照宮の杜の方へ。
『オイ音藏、何處へ行る』
乘つたのは大野廣之である、音藏は主人の聲が聞ねぬものに韋駄天の如く宙を飛び、モウ小闇
い木の下闇へ引込んだ、老梟は森の夜を怪しう歌ふ。
『オイ何處へ行るかといふにッ』
『ヘイ……』
と音藏は轅を落すと、額の汗を手で拭いて。
『旦那様……まことに濟まねい事でございますが……暫時此處で……俺のお願ひを……』
『願ひを?、願ひたつて斯な處へ車を引込んで何するのだ、早く彼方へ行れ』

『萬望……眞の僅かの間で能うございますから……』
『僅かの間を何せいといふのだ』
『へイ……俺の申上げる事をお聞きなすつて下せいまし』
『願ひを聞いて呉れといふのか、それなら何故邸宅で云はんのだ、默つて斯な處へ……』
『へイ……お邸宅で申上げやうと思つたんで？ぜいますが……お抱の車夫風情が御主人に對つて諫言の意見のと……』
『ナニ異見？、其方も俺に異見をしやうといふのか』
『そ、そんな失禮な事じやございませんぜ……五年の間旦那のお車の轅棒握つた此音藏がお願ひ……お賴みでございます』
『邸で云へッ、車を動かさぬのなら俺が下りる』
と廣之は起うとする、音藏は轅棒の中へ身を入れてペッタリと地に膝突いた。
『旦那ッ……お願ひでございます……可愛想な奥様や坊様のお身の上を萬望……萬望モ一度お考へ遊ばして下せいまし』
『はッは、、、奥や坊が可愛相だから俺に考へ直せといふのか、そんな事は其方が容喙すべき

事ぢや無い』
『へイ……それは能く承知して居るのでございますが……お邸宅の御恩を戴く俺ア、奥様や坊様のあの御様子を默つて見る事は出來ねいのでございます、坊様ア榊さんをお慕ひなすつて此頃じやア御病氣同然……奥様は旦那から御離緣のお話があつたとやらで……一室に籠つて欝々と……モウ此頃のお窶れ遊ばしたお姿は……御隱居様は相變らずお両人を目の敵に……それに旦那はお歸邸が……』
『オイ〳〵音藏、貴方も可い齡をして算盤の桁にのらぬ事をするなッ、其了簡じやア一生轅棒と惡緣だぞ、止せ〳〵々そんな馬鹿な事を云はないでな、默つて俺の車を曳いて居れ、出世の道ぢや』
『旦那、そ、それが俺に判らねいので……旦那が民友黨を廢したつてんで、手前日頃の廣言に似合ねい大野の様な性根の腐つた二股……さ種んな事を云つて俺にね……俺ア今迄民友黨を背負つて立つた旦那の車を曳くのを威張つてたもんだから……口惜しいのを堪へて……旦那程の豪い方だから深い御思慮がある事だと思つてたのでございますが……旦那は只出世がしていばつかしに民友黨をお退きなすつたのでございますか、御出世が望みの爲に奥様を御離

緣になるのでございますか』

主家を思ふ一圖の眞心を詞に見せて屹と仰ぐ、廣之の聲は冷やかであつた。

『左樣だ、俺は唯出世がしたいばつかりじや、出世の邪魔をする奴ア誰でも構はん突倒して進むのだ、オイ音藏、其方は誰に賴まれてそんな詰らぬ役に出た』

『旦那、お情ねいお詞でございます、誰に賴まれもしねえ、俺獨りの了簡で……』

『惡い了簡だ、そんな了簡は早く改めろ』

『旦那……旦那萬望御改心をなすつて下せい』

『馬鹿な事を云ふなッ』

と廣之は蹴込みを鳴らして激した。

『其方は俺を斯な處へ連れて來て脅迫しやうといふのだなッ』

『旦那ッ、旦那の目にア俺がそんな恐しい物に見えるのでございますかッ』

『そんなら車を行れ』

『ヘイ……それぢやア奥樣はモウ何うあつても……』

『彼女はモウ俺の妻ぢやない、何うしても實家へ行かんといふのなら俺も歸らんばかりじや』

『そ、それは何といふ酷いお詞でございます、以前に較べたら鬼……鬼の樣な御心におなりなせいましたなア』

『ウム鬼か……鬼は可い、俺は鬼だ、其方も早く鬼の仲間入りを爲い、でないとな、今に轅棒枕に目を眩る時になつて、俺が車上の說敎を思ひ出すぞはッは、、、』

(四三)

提灯の火を切つて音藏は悄然と轅棒を上げた、と後ろを顧いて幌の中を覗く樣にして。

『旦那、それじやア今夜は萬望お邸へ……』

『馬鹿な事を云ふな、早く如月へ行れッ』

『奥樣が……坊樣がお父樣を連れて歸つて呉れと仰有るのを聞くと……俺ア此胸が張裂けるやうでございまさあ……旦那今夜だけでも一度お邸へ……』

『それを聞くのが厭なら其方も邸へ歸るな、俺が居る所を拵へて遣る』

『イエ俺ア』

と術無げな聲、そつと涙を拭く顏にバラ〳〵と冷たい雨。

『俺には旦那のお詞は解らぬい。假令生涯轅棒を握つて、提灯を枕に野倒死を爲たつて、俺ァ あのお可愛相な奥樣や坊樣をお助け申さぬいじやァ……』

『はッは、、、蓼喰ふ虫も好々じや。自分の好む所に進むのは自由だ』

此時四邊の靜寂を破つて此方へ近づく人聲がする、音藏は駈出した。

『オイ丸に大の字ぢやァ無いか提灯の紋が』

『大野かも知れんぞ』

『追かけて見ろ』

『來いッ』

今車に中を割らせて左右に避けた兩人の壯漢は聲を合せて引返す。

『オイ大野ッ』

『大野君ぢやないか』

後ろに喚く聲に音藏は顧反る。

『怪しい奴ぢや、行れ』

車上の聲に『はッ』と再び駈出す時、左右から一時に泥避を捉んだ。

『君ァ大野廣之君ぢやないかッ』

『オッ大野だ々々』

と背の高い方が幌を覗き込む。

『何を仕やがるんでい奴らァ』

音藏は大喝した。

『大野なら用事がある、一寸此處へ下りたまへ』

『そんな手緩いことぢや可ん哩、引擦り下せッ』

偖は壯士の襲擊かと音藏は轅棒を置くと『何を』と叫んで飛込みさま、幌の骨捉む一人の胸も碎けよと突飛ばす。

『コラ民友黨を賣つた大醜漢ッ、制裁を受けろ』

櫻の杖が空に鳴る、廣之は放さぬ拳銃を握つて飛下りた。

『逃がすなッ』

『提まへろ』

『猪口才な事を仕やがるなッ』

主人大事と懸命の音藏は両人を左右に胸倉引捉む。

『旦那、早く』

『奴ッ邪魔するかッ』

力を籠めた防禦の間に廣之の姿は闇に沒した。

『チ畜生ッ此奴を遣付ろ』

『邪魔しやがつたな』

『何をッ』

音藏は主人の無事に力を增して、サッと身を退いて車躰を背に『サア來いッ』と身を構へる、雨は劇しく降りそゝぐ。

一人は石を拾ふた、杖打振り逼るのを、身を轉して避ける時、ドッと組附き一緒に倒れる、跳ね起きやうとするを押へつけ、立つた敵を片手で防ぐ、下から伸した石持つ手は、音藏の眞額を狙つた。

『ウヽ』

と苦痛に發した聲、傷を押へた隙を跳ね起き、暴漢はドッと走つた。

額を押へて起上つた音藏はヨロ〳〵として車を探り、轅から轅を杖に捉まへて、蹴込へ惱める身を倚りかゝり、ダラ〳〵と血は顏を染めた。

『オイ何したのぢや』

『は』

と遠くなる氣を人に呼ばれて目を開くと懷中電燈の光りは我を照して、黑い外套は巡査だらう。

『血塗れぢやないか、何した』

『ヘイ……ナニあの……人違ひでしたんでございませう……』

手拭で確と鉢卷をする。

『斬られたのか』

『ナニ石で殴られたんで……俺が此處を通りかゝると突然に二人飛出しやがつて……』

『両人？、そして逃げたのか』

『ヘイ』

『自用車ぢやな、誰家だ』

『へイ……あの大野代議士の』

『ウム大野廣之氏の、左樣か、主人を乘せて居たのだな』

『へイ……エ空車でございました』

（四四）

『あ、此邸だよ、下してお呉れ』

優しい聲は透骨の幌の中、車の轅は溝蓋の花崗石にカチと下りる、鳶色の膝掛をサッと除つてヒラリと身を退くと車輪を捉んで頭を下げる、氣の利いた服裝の車夫を見下して、海老茶の袴の裾は緋の敷皮に綾に亂れ、三枚草履の音もなく靜かに下り立つと悠然と門内へ進む。

『御免なさい』

大野邸の玄關へ立つた美人の、高く結んだ庇髪の流行型やら、貴い價を輝く寶玉の飾櫛やら何處となく氣品の高い風采の、優れた容色やらは穿いた其袴とは何しても調和がとれぬのである。

『ハイお越しあ…そ…ば…せ……』

取次に出たお濱は目を剝いて變つたお客に驚いた、先づ容色に氣を呑まれ態度に肝を挫がれ、チラ〳〵光る指にも目を眩ませ、刺繍の細鼻緒にまで咄嗟の間に驚きを重ね、最後に海考茶の袴に『わッ』と思つて驚異と怪訝に混雜した顏付。

『あの…何誰樣で……』

『妾ね、あの佐藤といふものだがね、御主人は被在るだらうねね、お約束があつて伺つたのだから』

『は、只今……』

マア何といふ横柄な、そして美しいお客樣だらうかと、お濱は混雜の鎭まらぬ儘周章奥へ入らうとする。

『チョイトお待ちなさい』

と袴の美人は帶の間を探る、チラト光る豆の樣な金時計、お濱は立竦む。

『恰度一時だわね、御主人のお居室へ案内をして下さい』

早や玄關の板の間へスラリと立つた。